

14

十錢文庫

東海道中腰栗

編後

268

755

東京百華書房發行

東海
道中

膝栗毛五編卷之上序

(後編)

歌人は居ながら名所を知り、雅人は行きて名所を探ぐる、今年五篇目の膝栗毛を十返舎の主人、心の手綱をかいくりかいくりかけ見れば伊勢の海、千尋の濱に深くうがちて洒落を花なる貝盡し、古跡を温ねて新しき、趣向を見する筆のすさみに、予も寝ながら名所をしり馬、はねる顔にて序すること、是作者の需に應じてとはうその皮、もともせぬに筆を採りしは、跡の一杯がすぎ田の梅の、香にひかれたるうかれ心、これも亦餘慶の仕事と謂はんか。

文化丙寅春

龜山人蘭衣誌

明治
45. 2. 22
内交

附言并凡例

予今年神無月二十日あまり、六日の朝思ひたちて、東海道に杖をはせ、伊勢路に赴き内外の宮巡をして歸りしは、雪見月の五日になん、そよりして此の五編目の著述にかゝり、彫工机のもとに絶えず、須臾も筆をおく間なし。然るにいづれの人の編りけん。膝栗毛續編といへるもの皇都の書肆より下したりとて、上總屋忠助なる人のもとより、予が方におこせたり。予是を閱するに、其排設つゞまやかにして、滑稽もつとも工みなり。惜しむらくはかゝる筆の文をもて、なごて自立せざるこそ不審けれ。そは名を索むる人に非ず、欲に馳するの徒なるべき歎。されど予が爲の引札にして思はざるの幸甚なりき。故に今五編目に至るまで、頓て見んことを競ひ給へる人のあなりと、書肆の喜びは、益々膝栗毛の尾に尾をひかんことを、おしはかれるにや覺束なし。

或人曰、此書初編より四編に及ぶ迄、彌次郎兵衛北八なるもの、髮結月代をせし所を見ず。こは大江都を立ち出でしより以來、其事無きは如何にぞや予答て曰、こたび旅行の刻、しばしその光景を見るに、風土人情の差別、方言の可笑しみ、其洩れたること、缺けたること算ふるに十指を出でたり。さればその足らざるを穿ち難じ給はるこそ、予が爲の幸

なれば、取りあへず其事をもて追加に出せり。

羈中飯盛おじやれの戯れは、卷中毎に粗あらはし、事ふりたれど、こたび作者の旅寢にて、實に夜這といへることを仕損じたることあなれば、其事をもて彌次郎兵衛北八が四日市泊りの趣向とす。

東海道追分までを上巻とし、其餘伊勢路にかゝりて、事繁く記すに遑あらず。漸く山田に此巻の筆をどめて、後編に妙見町の奇宿、古市の遊樂、相の宿の宮めぐり等をあらはし續いて出版す。

兼々聞及貴公才
探得神都神代穴

一遍相逢親十回
翻々乘膝栗毛一來

右

初逢十返舎一九生自勢州還戯賦送

瀬芳園草

東海道中 膝栗毛五編卷之上

宮重大根のふとしくたてし宮柱は、風呂吹の熱田の神の慈眼す、七里のわたし浪ゆたかにして、奈往の渡船難なく、桑名に着きたる悦びのあまり、名物の焼蛤に酒酌み交して、かの彌次郎兵衛北八なるもの、やがて爰を立ち出で辿り行く程に、此の頃旅人の唄ふを聞けば「はやりうた」時雨蛤土産にさんせ、宮のお龜が情所、ヤレコリヤ、よウしよウしよし「まご」コレ旦那衆、戻り馬乗らんせんか「彌」よウしよし「まご」やすいに只百五十でやらまいか「彌」よウしよし「喜」せうろく四文で乗るべいか「まご」そんなちよウせよせ「馬」ヒインヒイン長持人足船はナア、追手に帆かけて走るナアンエ、早くサア、熱田に泊りたやナアンアエ、八兵衛どうした、馬でものんだか、なんだかはねらア、ごっこい「喜」なんと彌次さん、何も慰みだに、斯うしようぢやアないか、おめえの荷物とわしがのを、一緒にして、一人がひつかついで、半日代りに旦那と家來の仕打はごうだらう「彌」コリヤ面白えそれよからう、先づおいらから旦那を始めを「喜」それやアい、が、今日はもう八ッだから七ッ代りにしやせう、勿論旦那と供のあしらひは、互に番狂はせ無しにやらかしやせうぜ「彌」知れた事よ（と、云ひつゝ、あたりには竹一本を才覺し、彌次郎が荷物と北八が包を雨

方に括りつけて「喜」先づ年役におめえ旦那よ、おいらは上下といふもので出かけよう、ナント餘程氣がきいてゐるだらう（と、後から荷をひつかたげて）「喜」モシ旦那え「彌」なんだ「喜」い、天氣でござります「彌」オ、サ、風がないで、暖たかだ「喜」さやうでござります（と、假に主従の如く打語りつゝ行く程に、早くも大ふく村、安中村をうち過ぎて、町や川にさしかゝれば、彌次郎兵衛とりあへず）
 旅人を茶屋の暖簾に招かせてのぼりくだりをまちや川かな
 かく打興じて、なを村おふけ村に辿り着く。此あたりも蛤の名物、旅人を見かけて火鉢の灰を煽ぎたて「喜」お這入りなさりませ、諸白もお飯もござります、お支度なさりませ「喜」「喜」いやかごは入らぬ「かご」あとの親方、旦那を乗せ申してください、戻りぢや、やために「喜」旦那はお徒歩がお好きだか「喜」さう云はずと、モシ旦那やすうしてやらまいかいな「彌」安くてはいやだ、高くやるなら乗りやせうか「喜」そしたら、高うして三百頂きましよかいな「彌」いやだ、もちつと高くやらねえか「かご」ハアまだ安いならやみげん（三五百）で「彌」壹、五百ばかりなら乗つてやらうか「かご」エ、滅相な、わじ共も商賣冥利をない（其様）にやつとは頂かれませぬ、せめて五百で召して下んせんかい「彌」それでも安

いからいやだか「ナアニ安いこんではあらまいそしたら別れに七百くだんせ」鯛「イヤ〜
面倒だ、何かなし一貫五百よりかまからぬ〜」か「はて扱困つたもんぢや、夫よりちつ共
まからまいか 鯛「まからぬ〜」か「エ、なんの事ぢや、駕籠昇の方から値切と云は珍しい、
まよ棒細、壹貫五百でやらまいかい、サア旦那召しませ〜」鯛「それでい〜か、高く乗
つてやる代りに、酒手をこつちへ貰はにやならぬが合點かか」あげますとも 鯛「そんなら
さきへいつて、壹貫四百五十文、こつちへ酒手に差し引いて残五十の駕賃だが、それで承
知かどうだか」エ、そんなこんなであらず、とひやうもない鯛「やそこでまづ縁きりだ、
ハ、ハ、ハ、」鯛「こいつは旦那が出来た〜」

たび人乗せるつもりでかごかきの高い直段にかつがれにけり
かくて朝餉川松寺と打過ぎ、富田の建場に至りけるに、爰は殊に焼蛤の名物兩側に茶屋
軒を並べ、往來を呼びたつる聲にひかれて、茶屋に立寄り、腰をかくと 女「お早うござ
りましたへど、茶を二ツ酌んで来り、彌次郎へさし出す、彌次郎は旦那のつもり故、鞋草
のまゝ茶屋の板の間にあぐらをかき」きた八、支度はい〜か（北八も約束なれば供の氣
取にて）「よろしうござりませう、コレ女中、お飯を二膳出してくんない 女「ハイ〜」蛤
でおあがりなされますか 鯛「イヤ箸で食ひやせう 女「オホ、ハ、ハ、ハ、」（と箱にした圍爐裏の様

な物の中へ蛤を並べ、松かさをつかみこみ、煽ぎたて、焼くうち）鯛「コウ酒はい〜の
があるかの併し諸白ではなくて、片白には困る、そして江戸ぢやア甘え物も食ひあきして
ゐる體だから、道中の物はねから食へぬ、馬に乗ればあぶなし、駕はあたまがつかへる、
店の者どもが、お宿の駕をお吊らせなさるがようござりますといひをつたが、成程さうす
ればよかつた、不肖して乗れば乗るもの、もう〜道中駕には飽き果てた、北八これか
らは歩いて行かう、い、草履があらば買つてくりや、穿きつけぬ草鞋で、コレ見や、足中
が豆だらけになつた 鯛「ほんになア、今日はじめ草鞋をお穿きなつたから、古い靴
が再發した 鯛「とんだと云ふ、之は餘り足が柔だから草鞋の紐がくえ込んだのだ、ヤ
時に蛤は 女「ハイ只今あげます（と、大皿に焼蛤を積み重ねていだし、飯を二膳盛つ
て来て据ゑる） 鯛「コウ彌次さん見なせえ、色男は違つたもんだらう、コレ〜この娘
がおめえの飯はちつと盛て、おいらがのは此通り山盛り、俄鬼道の一里塚といふもんだ、
ア、うめえ〜」鯛「へ、籠棒め、アノ娘が杓子あたりのい〜のを惚れたのだと嬉しがるも
をかしい、ソレヤア手めえを安くするのは 鯛「なせなせや 鯛「總て此街道では上下の
や供の者へは、飯を山盛りにして出すといふことだ、それから誰か目にもおれは旦那、手
めえは御供と見えるから 鯛「ハアさうか、いめねましい 鯛「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、蛤をもつとくんない

らようござる、モウねまらまいか、女中く、寢所を頼みます(と、此うち女來り、それ
 れに床をとり、ねかすと、田舎者二人はそこへころげるや否や、前後も知らず、すうく
 と高野、彌次郎北八この女どもにこあたり文句もさまぐあれど、此とことめしごきの
 洒落はぐつとはしよる。女どもは床をとつてしまひ、勝手へ行く、と彌次郎小聲になりて
 「きた八く、實に手めえさつきの女と約束をしたか」
 來ぬ積りだ、此次の間の壁を傳はつて行く、いき當つた所の襖をあげろそこに寐て居る
 と云ひをつから、今に行かねばならぬ、彌次郎先へいつてやらう、嫉ますと早く寐な
 せえ(と、後をふりむいて寐入る眞似する。彌次郎も北八が邪魔をしてやらんと寐入りし
 ぶりして考へてゐる内、二人とも旅疲れにや、思はずすやくと一寐入りし、暫くすると
 彌次郎兵衛ふつと目をさまし見れば、行燈消えてまつくらがり。あたりもひつそれ静まり
 たるに、じぶんはよしと、拔駈し北八に鼻あかせんと、そつとおきたち、さし足にて次の
 間に出で、かぬて聞き置きたる通り、さぐりく壁をつたひて行くうち、彌次郎兵衛あま
 りに手を上へ延ばしたるにや、釣りたる棚板に手がつかへると、どうしたはづみやら、が
 たりといつて、棚板はづれたるを見た彌次郎兵衛大きにきもをつぶし、「こいつは變ちさだ
 あんまりおれが手を延ばしたから、棚板がはづれたさうな、手を離したから落ちるであら

うしい、何かがらくたしこまあげてあるやうす、落ちたらみんなが目を覺ますだらう、こい
 つは難義な目に逢つた(と、兩手を棚につつばつて突ちて居ても、ねからつまらず、手をは
 なせば棚が落ちる、襦袢一つで寒くはなるし、コリヤ情ない目に逢つた、ごふか仕様はな
 いかど、立はだかつて考へてゐるうち、かくともしらす、北八も目をさまし、おき出、こ
 れもだんく壁をつたひて來る様子、彌次郎それとすかし見て、小ぶるになり、「きた八か
 きた八か、壁だれた、彌次さんだ、コリヤ静かに早く此處へ來てくれ、」
 なんだ、彌次「これを一寸持つてくれ、此處だ、」
 ず落ちかゝつた棚の下をおさへると、彌次郎はそつと手を放し、北八に持たせてわきへは
 づしたるに、きた八驚き、「コリヤ、彌次さん、どうするのだ(と、手を放しさうにする
 と、上のたなが落ちかゝる故)」「ヤア、コリヤ情ない目に逢はせる、コレ、彌次
 さん、何處へ行く、ア、手がだるくなる、コリヤもうござる、」
 彌次郎はくらまされ、そろく先の方へ行きこし、壁を傳ひて勝手のかたへ出るに、庭
 の向ふに見ゆる有明の火かげほのかに、すかして見れば、かのゆきあたりの襖のそばに、
 一人寐てゐる者ある故、さてこそ北八が約束のしる物、しめこの兎と、いきなりに手をや
 つてさぐりみれば、こはいかに石の如く冷え氷りし人倒れゐたり。さながら生きたるもの

とも見えず。これは不思議と、こはく撫で廻せば、荒蕪にくるみある故、彌次郎はつと驚き、俄に氣味がわるくなつて、がた／＼と震ひ出し、やう／＼に北八がある所へ這ひ戻齒の根も合はぬふるへ聲にて、彌「きた入まだそこにか 喜「オ、彌次さんおめえ何處へいつた、コウ一寸と此處へ 彌「イヤそこ所ではない、あそこに死んだものへ蕪がかけてあるから、もう／＼薄氣味の悪いうちだ 喜「ヤアそんなことをいふ 彌「ナニサほんとうに、アレあそこに、ア、とんだうちに泊り合せて、恐ろしや／＼(とそう／＼に這出し逃げ行く) 喜「コレ／＼／＼おれを此處においてどうする、エ、それに、とんだことを云やアがつて、どうやら氣味が悪くなつた、コリヤたまらぬ／＼(と、がた／＼ふるふる拍子に手がゆるみて、上のたながぐわら／＼／＼、こりや叶はぬと、きた入逃げ出せしが、うろたへてとまごひをし、一向分らず、まごつくうち、この物音に勝手よりは亭主の聲して、行燈さげて出て来る様子、奥の間より田舎者が出て来る體故、いよ／＼うろたへ、店の方へはひ出る手もとに、蕪一枚ありしを幸、引かぶりて息をころしかみみると亭主あかりをもち出できもをつぶし)「ヤア／＼／＼コリヤなんせ、たなが落ちた、膳箱も何も亂離忽敗になつた(と、そこら取り片付けるうち、何事やらんと田舎者二人ながらおき出て)「ヤレえらい音がせつと思つた、道理こそコリヤ地藏様の側にまで箱ごもが飛び散つて居るが、ヤア／＼／＼お

鼻がぶつかけてしもうた 今一人のみなかもの「ドリヤ／＼ほんに地藏様の鼻ア無くならかいたそこらにや無いか、イヤ此處に寝てをるは誰ぢやい(と、蕪をまくれば、きた入ははッとはかり顔を上げて見るに、そばには蕪に包みし石地藏あり。さては彌次郎兵衛が死んだ者もありしと云ひしは、この石地藏ならんと思ひあるうち、亭主北八を見て)「ヤアこなさんはこちへ泊らせえたお客ぢやないか、それに今時分なんせこない(此様)な所に、コリヤ合點がいかんわい、どうぢややら、こなさん達の姿素振胡散臭いと思ひをつたが、若しや護摩の灰ぢやないか、何ぞ又しよしめる積りか、有りやらに云はつせえゐな「イヤそればかしぢやござらない、大方こなさんが此の棚を落したもんで、なんせ地藏様のお鼻ア打ち缺いた、コリヤわしごもが村で、今度建立せる地藏様ぢや、きんのふ(昨日)石屋ごのから請取つて、明日は早々長澤寺様へ納めにやならぬが、お鼻がうち缺けては、持つていかれぬ、元の通り償はッせえ(これは此近在の人々村のお寺へ納める地藏也、石屋より持つて歸る所、おそなはりし故、今宵は此處に泊りしと見えたり。亭主愈々やつきとなり)「お地藏様のお鼻ぢやがおまい方のお荷物、なんぞなくなりはせないか、どうでも合點のいかぬ奴等ぢや、有りやうに云ひをりまいか 喜「イヤわしらは、そんな者ぢやアねえ、めつたなことを云ひなさんな、しら几帳面の旅人だゐな「インネ、さうちやあらまい、又それで無

けらにやア、なんせ今時分其處に寝てゐさつせえた 喜「イヤこれはの、手水に行くどつて 喜「たわけたことをつくまい、手水場は座敷の椽先にあるものを、定めし背にもいたであろに、そないな間似合くやせんわい 喜「さう云はれちやア、わつちも面目ないが、恥を云はにやア理が聞えぬ、有體に云ひやせう 喜「オ、サ云はいでござせるもんぢや 喜「イヤごうもお恥かしいが、今頃わつちが此處にまごついて居つたといふわけは、ツイ夜這に來て此棚の落ちたに、うろたへたのでござりやすぬな」ナニ夜這に來た、イヤはや、こなさんは、たはけもんぢや、ごこの國にか、石地藏様の所へ夜這に來て、ござせる積りぢや 喜「云へば云ふ程、碌なことはぬかしをらぬ 喜「コリヤさんだ災難に逢ふことだ、彌次さん彌次さん」と、呼び立てる、先刻より彌次郎は立ち聞して腹筋を捻りぬたりけるが、もうよい時分と立ち出で「コレヤアごなたもお氣の毒な、あれやアわつちが受合、胡亂な者ぢやアござりやせぬ、了簡してやつてくんせえ、又地藏様の鼻ごやらが缺けたと云ひなさるがごうぞわつちに免じて、後ではごうとも致しやせう」と、色々ちやらくらと斷りを云ひちらし、亭主も今はせんかたなく、さながら悪者とも見えぬ手あひ、一通りは云つたものの、今は納得して済ましければ」

はひかけし地藏の顔も三度笠またかぶりたる首尾のわるさよ

かく即吟の彌次郎兵衛が狂歌に、おのくごつと笑を催し、やうくいさくさをさまりけるにぞ未だ夜の明くるには程もあらんと、銘々寢所に這入りたるが、暫くありて早く一ばん鶏の告げわたる聲々、馬の嘶き表に聞え、彌次郎兵衛北八急ぎ起き出て支度整へやがて此宿を立ち出づるとて

やうくと東海道もこれからははなのみやこへ四日市なり

それより濱田村を打ち過ぎ、赤堀にさしかりたるに、往來殊に賑はしく、男女大勢の處彼處につごひ集まりたるは、何事にやと、彌次郎兵衛北八も片寄り行きつゝ、ある親父に向ひて 彌「モシく何でござりやす おやち」あれ見さつせえ 喜「喧嘩でもござりやすか おやち」インネ、天蓋寺の蝸薬師さまが桑名へ開帳に行かしやるので、今こゝを通らつせるから 彌「ハ、ア成程向ふへ見えるく」と、此内だんく人足繁くなり、講中と覺しく、真先に村の名を染めたる幟をおし立ていづれも大音にて「かう中」なアまアだアく 喜「蝸薬師様ア、ゆでたのぢやアねえ、なまだご見えるかう中」なアまアだア 彌「幟を持つていく奴の面ア見さつし、智恵のねえ面だせ かう中」お賽銭はこれへく、是は海中より芋畑へ出現したまふ所の、天蓋寺蝸薬師如來、御信心のかたはお心持次第あげさつしやりませう、サアくお心持はようござりますかな 彌「今朝程は中かさで三膳ほど食べました 彌「ソリヤ

おのれ金毘羅、鼻あかせてやらんと、無理におし込み皆くつてしもふ(こんびら)「コリヤたまらぬ、えらい〜、もう〜私(わたし)はかなひませぬ 彌(やま)おめえもやらかして見なせえ、こんな小さな物はいくらでも食はれる 彌(やま)こんびら」イヤさうは参りませぬ、併(し)私(わたし)もあまり残念な十ばかりたべてみませう 彌(やま)ナニ十ぐらゐ、二十食ひなせえ、その代り、一つも残さず食ひなすつたならば、饅頭(まんじゅう)の代(た)は勿論(もちろん)、外(ほか)に百文金毘羅様へお初穂(はつほ)をあげやせう、こんびら「そりや有難(ありがた)い、てんぼの皮(かわ)、やつて見ませう(と)、饅頭(まんじゅう)二十取り寄せ、たじもじ〜と見てばかりゐたりけるが、やがてくひかゝると、ぼつり〜十ばかり食つてしまひ、あどはいやさうな顔付(かほづか)にてやう〜と残らず食つてしまふ。彌(やま)あてが違(ちが)ひ) 彌(やま)コリヤ恐(おそ)れる〜、こんびら「お約束(やくそく)の通り饅頭(まんじゅう)代(た)はさし引(ひ)いて、お初穂(はつほ)の百文(ももふだ)下(くだ)さりませ 彌(やま)今(いま)上げやせう、併(し)あんまり見事(みごと)だから、もう二十食ひなせえ、今度はお初穂(はつほ)を三百文(ももふだ)上げやせう、その代り食はねえとこつちへ二百とりツこだが、ごうだ〜、こんびら「面白(おもしろ)い〜、何も徳(とく)徳(とく)腹(はら)の裂(さ)けるまでやつて見ませう 彌(やま)サア〜今(こんど)度は現(げん)銭(ぜん)だ、おめえも二百そこへ出して置(お)きなと彌次郎(やじらう)三百文(ももふだ)をつき出し、なんでも今(いま)取(と)られたお初穂(はつほ)の百文(ももふだ)に利(り)を付けて取る氣(き)になり、よもやもう食はれめえと思(おも)ひ込んで、饅頭(まんじゅう)を又(また)々(また)々(また)二十取(と)寄せ、金毘羅(きんぴら)へすゝめるや否(いな)や、このたびは何(なん)の苦(くる)もなく忽(たち)ち二十食(く)つてしまひ、手早(てはや)くかの三百文(ももふだ)を着服(ちやくぷく)して、こんびら「

これは有難(ありがた)い、饅頭(まんじゅう)の代(た)も宜(よろ)しうお頼(たの)み申(ま)します、ハ、ハ、ハ、思(おも)ひがけないおさうさに預(あ)りました、ハイゆるりとこれに(と)、お神酒箱(かみさけばこ)をせなに負(お)ひ、あどをも見(み)ずして出(い)て行(い)きたるに、彌次郎(やじらう)は呆(あ)れはてゝゐる) 喜(よろこ)ハ、ハ、大方(おほ)こんな事(こと)にならうと思(おも)つた 彌(やま)いまいましい目に逢(あ)はしやアがつた、初(はつ)の百(もも)が惜(お)しくなつて、上乗(うはのり)をした、業腹(ごふはら)な(と)、此内(このうち)、下(した)の方(ほう)よりかごかきとら〜と來(きた)りて「旦那方(だんながた)はお駕(か)は入(い)らしやりませぬか 彌(やま)駕所(かこころ)ちやアねえ、えらい目に逢(あ)つた、饅頭(まんじゅう)の食(く)ひごつこをして、錢(ぜに)三百只(さんびやくだい)取(と)られた、かごかき「ハ、ア今の金毘羅(きんぴら)めぢやな、わきめはあないな風(ふう)をしてあるきをるが、アリヤ大津(おほつ)の釜七(かまなな)といふえらい手づまつかひぢやげな、こんぢうも坂(さか)の下(した)で餅(もち)の食(く)ひくらで、七十八とやら食(く)らつたと見(み)せて、錢(ぜに)は人(ひと)に拂(はら)はせ、餅(もち)をばみんな袂(たもと)へさらひ込んで、うせをつたといふ事(こと)ぢやが、旦那(だんな)も一杯(いっぱい)箆(へら)められさつせえたのハ、ハ、ハ、(此(この)はなしのうち、伊勢参(いせまゐり)の子供(こども)二人、饅頭(まんじゅう)三(さん)ツ四(よ)ツづ、手(て)に持(も)ちて食(く)ひがなら、この門口(かどぐち)へ來(きた)り) いせ参(まゐ)り「ハイ旦那様(だんなさま)、拔参(ひきまゐ)りに御(ご)ほうしや、〇コレ手(て)めえ達(たち)やア、その饅頭(まんじゅう)を誰(たれ)に貰(もら)つたいせ参(まゐ)り「ハイコリヤこのあどで金毘羅参(きんぴらまゐ)りの人(ひと)が袂(たもと)から出(だ)してくれました 彌(やま)エ、そんなら、あいつめがくらつたと見(み)せやアがつて、おいらをだまくらかしやアがつたか、いま〜しい、ぼつかけてぶちのめさうか 喜(よろこ)い、はな、おいらも神参(かみまゐ)りだ、勘忍(かんにん)してやりなせえ、みんなこつちが間拔(まひき)だから

よ、ハ、ハ、ハ、彌それだどつて、あんまり業が煮えかへる。喜。昨宵の泊りでおれをえらい目に逢はせたその報だと思ひなせえ、ほんにいゝ業晒しだ

盗人に追分なれや饅頭のあんのほかる初穂とられて

彌「エ、面白くもなえ、洒落やんな、モシ〜、饅頭の代はいくらだね 女「ハイ……残らず

べて二百三十三文でござります 彌「せう事がねえ（と、ふせう〜に錢を拂ふと）かこかき

「旦那まんなほしに安く召して下さりませ 彌「いや〜、かこかき。酒手でまゐりましょう

彌「貴様酒を呑むか かこかき「ハイ酒は好きで一升ざけを下さります 彌「また酒の呑みツク

らしようと思つてか、もういやだ〜、サア北八出かけよう（と、これより伊勢參宮道へはいる）。

東海 道中 膝栗毛五編卷之上 終

東海 道中 膝栗毛五編卷之下

神風や伊勢と都のわかれ道なる追分の建場より左の方の町を離れて野道を辿り行く程に向ふより来る農行の馬を横乗したる男、痾張聲にて「見た見てもぬくとさうなヨ、お方と寝たりやナア、手織布子の一枚ねつこにつんぬげた、ア、エ、ハ、ハ、エ「コウ見さつし、アノ向うから乗つてる来る馬士をおろして見せようか（ト脇差をぐつと抜き出してさし合羽の袖を前の方へ折りて刀の柄に持ち添へたる體に見せかけてゆくと、馬かたやがて馬よりおりて行く）彌「ナントどうだ〜、又向より横乗の馬士」 晩に泊りにヨ行こととて止めたナア、なんぜいきやらぬ、裸でお方に逢はりよかエ、ナア、エ 彌「こいつもおろしてやらう、エヘン馬士「シツ〜（ト俄にうろたへおりて行過る）彌「北八どうだ、奇妙か喜「二本ざしを見ると、乗打の出来ねえことア、皆知つて居らア 彌「やそれだからよ、おれを待たと思ひをつて、喜「馬鹿アいふせ、あとを見なせえ、侍が二人来るから 彌「エ、ほんにか（トふりかへる拍子にこのお侍にはつたり）彌「ハイ是は御免なさいやし、神戸へはもうどれ程ござりやすな（此侍衆は此邊の郷士と見えて）「ソレむこ（向）の堤から、つツとそらへあがらせると、もう半道もあらずにな 彌「ハイ有難うござりやす 喜「堤からそらへあがれ

とア何のこただ、蟒が天上しやアしめえし、ハ、ハ、ハ、時にこの川は何といふ川だはし
ばん「ハイ橋銭が二文ヅ、出ます、此川は宇都部川といひます 綱ソレ二文ヅ、四文よ

抜参りならばぶさをもうつべ川わたしの錢もかりばしにして
それより高岡川をうち渡り早くも神戸の宿に至る。入口に寶珠山火除地藏堂あり

安穩に火よけ地藏の守るらん夏のあつさも冬の神戸も

かくてこの宿はづれなる茶店に寄りて休み居たるに 馬士モシ、お前方アおま(馬)に乗
つて下んせんか 綱やいかさま戻りなら乗るべい馬士「上野まで戻るおまちやわい、荷をつ
けて二百五十下んせ 竝二方荒神で百五十遣るべい馬士「今日は梓をもつて来んわいの、爰
から上野迄三里の所ぢや白子へ一里半代りやつて乗つていかんせ 綱二人乗られにやいや
だ馬士「うしたらお二人ともおま(馬)の鞍へ括し付けて行こまいか、此繩で締めりや氣遣
ひはないがな 竝「さんだことを云ふ、それぢやア煙草も吞まれぬ 綱「そんなら代り、ッ乗
らうが百五十でやるか馬士「まよかし遣らかしましよ(ト馬の相談出来て二人の荷をつけ
此所よりまづ北八が乗つて出かける)綱「やおらアそろく先へ行くぞ、ソレ北八右の方へ
かしぐやうだ 馬「ヒイン(鈴のおと)。しやん(此内)向ふより來たる男紺縞の
洗濯したる引廻しを着て錢壹貫ばかり刺子の風呂敷に包み肩に引かけ草履がけにて來り、

この馬士を見つげ、ヒヤア、のしやア上野の長太ぢやないか、今のしが處へ行た戻りぢや、
えいどこでいき逢うたか長太「ハア、權平次様かいな、コリヤさてわしや面目がないがな
ごん「あるまい、ある筈がないわい、晦日(ひ)にいこす(戻) 筈をまんた銀錢壹文もい
こさんがな、どうしさるのぢや、ソレきこ(聞) わい馬士「マア、こちへ來て下んせ(此
馬士借金の斷りと見えて、かの男を日あたりのよい處へ伴ひ、己も土手に悠々と腰うちか
けて)「そなにどうにや(業煮)「らかいてくだんすな、マアこゝへ掛けさんせ、イヤろこの
ねきには犬の糞がある、今日おいでると知り居つたら、掃除しておこもの、コリヤ、權
平様へ茶など上げんか、酒買うて來いと云ふ所ぢやが、こゝは大道中でそれもでけぬくい
竝「コリヤ、どうする、早くやらぬか馬士「ハテせはしない、ちと待たんせ、いんま大事の
お客がある、さてマア聞いて下んせ、去年の冬から家の鼻めが病氣を煩らひをつて、餓鬼
共にはせちがはれる、雜役にさへ出やせんものを、何ぢややろと斯うして下んせ、四五日
の内には、ひゆつと此方からもていこ(持参)がなごん「イヤ承知ならんわい、そない(其
様)に云うてもよういこ(戻)しやしままいがな、でんない(大事無)いもう三年越
しといふもの貸した錢ぢや、利に利がつて二十貫餘りといふもんぢやもの、いこすない
こすな、その代りあのおま(馬)をとて(取)いのかい、ハテまさかの時は、のしがおま

を渡そと證文に書いたぢやないか、うしたら言ひ分ありやしよまいがな、サア〜もし、おま(馬)の上な旦那様、いんま(今)聞かんす通りぢや、借銭のかはりに、請取るおまぢや、どうぞこゝからおりさんせ、氣の毒ながら、喜ハア、おいらもさつきから、じれつたくてならなんだ、ひよんな馬に乗合せたは、こつちの不仕合、然しまだ錢は遣らず、是まで乗つたを徳として、ドレ下りて行きやせう、(ト彼の權平に口を取らせて馬からおりると馬士駈け寄り)モシ旦那、お前がおりては、このおまを取られる、マア乗つてゐて下んせ〜イヤ、ならんわい馬士ハテ、ごないにも爲るわいの、旦那をおろしては氣の毒な、サア〜召して下んせ、喜また乗るのか、しつかり頼むぞ(ト北八又馬に乗れば權平やつきとなり)コリヤ〜、長太どうしなさるのぢや、旦那おりて下んせ、喜エ、又おろすのか、イヤ貴様達ア、俺をい〜てうさいばうにする、下ろしたり上げたり足も腰も草臥れ果てた〜、うれぢやて、わしがおまぢや、どうぞかしおりてくだんせ、喜エ、面倒だ、(ト小ぐれが来てぐつと飛おりる)馬士はて扱おりさんせすよいがな、コレ權平様斯うして下だんせ、わしも途中ぢや、しよことがない、せめて内へいぬまで待つてくだんせ、その代りこゝで此布子を渡すに〜、(ト)そしたらいんで、譯つけるか馬士もうよいわい、サア旦那召さぬかい、喜ナニ又乗れか、もう勘忍してくれ、おらア之から歩いて行かう、何なら少々

は錢を出しても乗ることアいやだ馬士さう云はんせすと乗つて下んせ、もうよいがなサア〜(ト馬の口をとりてすゝむる故、北八又仕方なく馬に乗れば、ごん平)サア約束の布子脱ごまいか馬士イヤそないには云うたもの、これも家へいぬまで待つて下んせ〜イヤおのれ、もう了簡ならんわい、サア〜旦那、又おりてくだんせ、喜エ、この唐人めらア、又おりるとぬかしやアがるか、もういやだ、サア早くやらねわか、どうしやアがるのだ馬士旦那さうはかいの、下りすとよいに〜イヤ、下りすとわいとは何でぬかす、(ト眞黒になり、馬に取付きかゝる所を、馬士つき除けて馬の尻を思ふ様たゝきたてると、馬は一散に駈け出せば、北八上にて眞青になり大聲あげて)ヤアイ〜、助けてくれ、コリヤどうする〜、ごん馬をにがしてはならん、オ、イ〜、(ト追駈る、北八は後生大事に馬の鞍にとりつきても馬はやみくもに走る故、北八飛び下りようとして鞍の繩に足がひつか、り眞逆様に落ちて腰の骨をうち)ア、痛い〜、誰ぞきてくれアイタ、(ト一人藻きて苦しむ體に馬方一散に駈けつきたり)モシ、旦那お怪我はないかな、ドリヤ〜(ト手を取りて引越すうち權平は馬を捕へんとかけぬける。馬方これを見てさうはさせぬと、北八にかまはず駈け出して行く)喜オ、イ待ちアがれ、俺をばひごい目に逢はしやアがつた(ト小言をいひながら起きあがり、腹は立てども詮方なく、追駈けんには足腰が痛み、や

うゝのことにて踏みしめゝそろゝと辿り行きつゝ

借錢を負うたる馬に乗りあはせひんすりやざんと落されにけり

行く程なく矢ばせ村といふに至る。彌次郎兵衛は神戸の宿はづれより、先へ來たるが、かの馬のいさくさをば露知らず、餘程先へなりたるを不思議に思ひ、こゝに待合せ居たりけるが、それと見るより 彌「オヤ、北八そのなりはさうしたのだ 喜「イヤもう咄にもならぬとんだめに逢つた、(ト最前よりの一什始終を話せば、彌次郎をかしく、幸ひこの所は鎌倉の權五郎が古跡ありと聞きて、彌次郎兵衛とりあへず。)

權五郎ならねど馬士の一散におつかけて行くかけどりの海それより玉垣を打過ぎ白子の町にいたり、福徳天王を伏し拜みつゝ、子安觀音の別れ道にて

風を孕む沖の白帆は觀音の加護にやすゝうみわたるらん

この宿を過ぎて磯山といへるに著く。此所に吹矢のいろゝ飾りつけたる小店の親仁、往來を見かけて「サア、お慰みにやてかんせ、外題は忠臣藏十一段續き、ソレ吹かんせ、ヤレ吹かんせ、お當てなさると忽ちかはる、新板の上細工はこれぢや、喜「ハ、ア、なんだ勘平おかる魂膽夢の枕、イヤこいつやらかして見よう、(ト吹矢筒に矢を入れて)「フ

フ、引カチリ、ガツタリ 彌「何だハアえらい松茸が出た、コリヤ可笑しい、ハ、ハ、ハ、與一兵衛子故の闇の夜は、何が出るだらう、フ、フ、フ、引カチリガサ、ヒヤアみこし入道、ハ、ハ、ハ、向うのは何だ、北八そつちへ寄りや、(トひきのける拍子に足もとに寝て居たりし犬の足を踏む)犬「キヤアン、彌「この畜生め、ト吹矢の筒でくらはしにかゝる。犬「ワンといつて噛みつく、彌「アイタ、ハ、ハ、ハ、うぬぶち殺すぞ、トおつかくはづみに、ごつさりと轉げた側に落ちてあるは煙草入、彌「ころんでも損はいかぬ、爰に煙草入が(トひろひかゝると、向側に居る子供が糸を引くと煙草入はするゝ)彌「エ、いまゝしい、一番はぐらかしやアがつた子ども、あほうよ、ワハ、ハ、ハ、喜「こいつはいゝ業曝らした、サアいきやせう、(ト吹矢の錢を拂ひ出かける。向うに又煙管一本落ちて有る故 喜「ソレ彌次さん又拾はねえか 彌「イヤ、もう其手はくわぬ、アレあとからくる親父が拾ひをるだらう(トゆき過ぎてふりかへり見れば、あとより來たる親父かの煙管を拾ひて懐におしこみ、さつゝと行すぎる)彌「ハアだましてもなかつたさうな 喜「ハ、ハ、ハ、おめえどうぎにまんが悪いせ、(ト打笑ひつゝ行く程に、やがて上野の宿に至るこゝに此あたりの人を見え羽織ばつちにて小野郎を供につれたる男、あとより來たりて彌次郎兵衛に近づき)「卒爾ながらあなた方アお江戸でござりますか 彌「アイ左様さ、かの男「私

んかいな 京「パツくくく」ごま汁「何ぢやお前にや煙管に煙草が付て無がな、ハ、ア聞
 えた、吸ひつけるふりして人の煙草をのむぢやな、モよさんせ、ノウお江戸の先生、
 京の衆はあないに吝いのねつこぢやわい、ハ、ハ、時に先生、もう一ふく下さりませ 彌
 京の者を吝いといふが、おめえもさつきにからわしが煙草ばかりのんでゐるごま「イヤ私は
 煙草入を持ちやせんもの 彌「忘れて出なされたのかごま」ナニ忘れもせんが、有様は全體が
 無いのぢやわいな、その譯は私はえらい煙草好き、一日に拾匁では足らぬ位ぢや故、コリ
 ヤ自分で買うて呑んでは、たまらんと思つて、それから炳草入はやめて煙管ばかりもて歩
 き居ります 彌「そこで人の計り呑みなさるのだなごま」さよぢやわい、彌「そりや京の人へ
 覆輪かけて、おめえがあたぐけねえといふもんだごま」ハアさうかいな、ハ、ハ、時にい
 かうおそなつた、ちと急ぎましょか（ト、足を早めて行くに、程なく月もとにいたり、此
 邊よりからすの宮へまゐる道有りと聞きて

照りわたる秋の月本ならば今うかれ参らん鳥御前に

かくて雲津にいたり、南瓜のごま汁、おのが家に案内するに、これも旅籠屋と見ゆれど、
 折ふし相客もなく、奥の間に請じ入れ、彼是ともてなしければ、彌次郎兵衛はあらぬ名を
 偽り、斯るめに逢ふも一興なりと、北八諸共心の内に可笑しく、やがて湯にも入りしまひ

悠々座しゐるに、亭主ごま汁いでて「コレハお草臥れでござりましたよ、ようこそお入
 り下されました、然し折悪しく此頃は不漁で何もお肴がござりません、夫故何も御馳走が
 できぬいが、當所は至つて蒟蒻がござりますから、マア是でも上げましょと存じて申
 し付けおきました 彌「もうお構ひなされな、イヤ御主人この者はいまだお近づきにならぬ
 げなごま汁「いかさま貴方は 喜「私は十返舎の秘藏弟子一片舎南嶽と申します、不思議な御
 縁で御厄介に預りますごま汁」ナニサ、とつとねからお構ひは申さんぢやて、イヤ先生ちと
 お寛ぎなされまいか 女「御膳がよござりますごま汁」早うあげんかい、御ゆるりとめしあが
 りませ（ト、亭主は勝手へ立つて行く。 女「膳をもち出で彌次郎へ据ゑて行く。 彌「まんざ
 らでもねえの 喜「いゝ女だ、然しこゝぢやアおめえも先生株だ、おとなしくせざアなるめ
 え（ト、此内又十一二ばかりの小じよく、膳をもち北八に据ゑる。 兩人箸を取りてくひか
 かり見るに、膳の向うにひらめなる皿の中に福餅の大ききの如き黒きもの、のせて出せ
 り。 平には蒟蒻を盛り、味噌は別に小皿にあり。 彌次郎小聲にて、ナント北八、この皿に
 ある丸い物は何だらう 喜「されば、なんであらうか、（ト、箸にてつゞき見るに、至つて堅
 く、挟めども動かす。 よくくみれば石なりける故、きもをつぶし） 喜「コレヤア石だ石
 だ 喜「ナニ石なものか、ノウ女中 女「それは石でござります 喜「それ見なせえ 女「蒟蒻を

おかへなざりませ 彌いかさま、もうすこし。(ト、平を出して女の立てゆくを待ちかね)
 彌「コウ、なんと馬鹿くしい、どうして石が喰はれるものか 葦「イヤ、夫でも食はれる
 仕法があれやアこを出したであらう、先刻當所の名物をあげませうと云つたア、何でも此
 石のことだ 彌「それだとつて、ついぞ話しにも聞かねえ 彌「イヤ待ちなよ、江戸で團子の
 ことをいしくいふから、大方コリヤ團子であらう 彌「ハ、アなる程そこもある、よも
 や本統の石ぢやアあるまい、(ト又箸をもつてつき見るにやはり石也。これは不思議と
 煙管の雁首にて叩き見ればかつちりく) 彌「どうでも石だく、コリヤどうして喰ふもの
 だと聞くもごう腹だが、ごうもねつかから合點がいかぬ。(此内ていしゆかつてより出で)
 「是は何もござりません、よろしうめしあがりませ、イヤ石がさめは致しませんか、コリ
 ヤく温暖い石をかへてあげ申せ。(トいはれて二人はいよくぎよつとせしが、いかにし
 ても此石のくひやう知らぬといはれんもごうはらと、彌次郎兵衛これをくひたる顔にて
 「イヤもうおかまひなさるな、石も最早よろしうござる、扱々珍らしい物を賞翫致しま
 した、江戸表などで折ふし小砂利を唐辛子醬油で煎つけるか、又は煮豆などのやうに致し
 てたべる事がござります、それに又石塔なども嫁をいぢる姑婆々などにはせれたが薬だと
 申してたべまするが、私も随分好物でござります、今度府中に逗留致した時、馬蹄石をす

つぼん煮にして振舞はれましたが、ツイ私四ツ五ツたべました所に、お聞なさい、腹が重
 くなつて立たうとした所が、一向立たれず、仕方なしに兩方の手を棒しばりのやうに致し
 て擔いで貰つて、やうくと手水に行きやした、御當所の石ころは格別風味もようござり
 やすから、又食べ過ぎたらば御厄介になるだらうと存じてお氣の毒でござりやすこま汁「ナ
 ニ、その石をあがりましたか 彌「たべましただんかこま汁「イヤそれは滅相かいな、石をあ
 がるといふはけしからんお齒のお達者なことござります、然し火傷はなさりませんかい
 な 彌「それは何故なこま汁「イヤ、あの石は焼け石でござります、すべて蒟蒻といふものは
 水氣の取れぬものでござりますから、あの焼け石にてお叩きなると水氣がとれて格別風味
 がよござります、そのための焼け石でござり升、あがるのではござりませんわいな 彌「ハ、
 アなる程く、聞きましたこま汁「マアさうしやあがつて御覽なされ、コレお鍋よ、石がぬ
 くと(暖)なつたらもて(持)こんかい、早うく(ト此内更に石の焼けたるのをせて、
 女もち出で引きかへてゆく) 彌次郎北八ていしゆがことばの如くして、かの蒟蒻をはさみ
 件の石にうちつけ見るに、シウ引というて水氣とれたるところを、味噌をつけてくらふは
 風味格別軽くしていはん方なければ、大きに感心して) 彌「誠に珍らしいお料理、御仕法感
 心致しました、そして斯様に同じやうなる石が早速によく揃ひましたこま汁「イヤ夫はかね

て貯へ置きます、おめにかけてませう。(ト勝手に駈けいり、吸物椀をいり、様な箱をもちいで)「御覽くだされませ、こないに二十人前は所持致して居ります(ト、かの箱を見する、二人は可笑しく、其箱の横の方に何か書付てある故、讀んでみれば蒟蒻の叩き石二十人前とかきつけたり、此の内近所の狂歌よみ追々來たりて「御免下さりませ ごま汁」ヤこれは小鬘長元成様、サアくごなたもこれへく「ハイく、是は十返舎先生、はじめてお目に蒐りました、私は富田茶賀丸と申します、次は反齒H屋呂、水鼻垂安、金玉の嘉雪、いづれもお見知り下さりませ ごま汁」時に先生おやかましようはござりませうが、(おむづかしからうといふことを、おやかましからうといふ國言葉也)扇面短冊など願ひ申したいが、何なりともお持ち合せのお歌をお認めくださりませ、(ト扇短冊をつきつけられ、彌次郎しかつべらしくとり上げて何の放題、やらかしてくれんど、いろく考へても我よみし歌にはこれぞといふ歌もなく早速に思ひつきもなければ、是迄さ、覺えぬたりし人の歌をかざて差出せば、ごま汁これを頂き見て)「これは難有う御座ります、お歌は時鳥自由自在に聞くなり、酒屋へ三里豆腐屋へ二里、ハ、ア成程、ごうか聞いた様なお歌だ、後朝のなさけを知らば今一つ嘘をもつけや明六ツの鐘、イヤこれは千秋庵大人のお歌では御座りませんか彌ナニ、私がよみ歌、しかも江戸中大評判の歌、誰知らぬものはござらぬ ごま汁」イヤさ

よぢやあるが、先年私お江戸へ参じた時、三陀羅大人、芍薬亭大人などにも、お目に蒐りまして、乃ちお短冊も戴いて歸りましたが、御覽なされ、その屏風に張つてござります、(トいふ故、彌次郎ふりかへりて見れば成程屏風に三陀羅と書きて右の歌あり。北八可笑しく氣の毒なれば)「イヤ私の先生にそつかしいが癖で、人の歌だの、わが歌だのといふ差別は一向ござりませぬ、コウ彌さん、イヤ先生是まで道中筋で詠みなさつた、おめえの歌を書なさればいゝに、(ト氣を付けられて彌次郎面目なけれご押し強い男なれば、いけしやアくとしてあとの短冊へは道中筋の歌をかく。此内北八も手持ければ張交の屏風を見て)「ハ、ア戀川春町の畫がある、モンあの畫の上にある讀はなんでござります ごま汁」イヤあれは詩でござります 葺こちらの布袋の繪の上にあるは詩と見みますが、誰がいたしたのでござります ごま汁」イヤあれは語でござります、澤庵和尚の、(トいふ故、北八心のうちに、こいついまくしい奴だ、さんかといへば、したといふ。しかといへば、ごだといふ。何でも今度は一ツ餘計にいつてまごつかせてやらうと、そこら見廻し)葺モン、お掛物の畫の上に書いてあるは、大方六でござりませうなご「六か何かしりませぬが、あれは質にとつたのでござります、(ト此内勝手より女たち出で)「ハイひげつらさまからお手紙がさんじましたごま汁」ドレく何ぢやあるな。(ト此手紙を開きて、高々とよみて見れば

この二人がはふくのていにてそこへに仕度し出で行く容姿を見送り、家内の者共手をうちたつき、ごつくと笑ふ。彌次郎は終始膨れ面して力みかへり出で行くをかしさ。北八あとに従ひ

いとほまし通り一べん旅の恥かきすて、ゆく扇短冊

斯く詠みて、あとは笑ひを催し、出かけたれど、最早亥の刻過ぎたりと見え、家並に戸を閉ちてひそまりかへり、いづれを旅籠屋とも見えわかたず。とまるべき方もなくして。うかくと辿り行く程に、あはや軒下の犬どもが、起き立ちて吠えかれば、彌次郎兵衛きよろしくして「エ、この畜生奴らア悪くふざきやアがる、(ト石ころを拾ひて打ちつければなほく)犬はおこりたちて取り捲く」喜構ひなさんな、犬までが馬鹿にしやアがる、オヤ彌次さん、おつな手つきをしておめえ何をする 彌「イヤ犬に取捲かれたときは、宙へ虎といふ文字を書いて見せると、犬が逃げると云ふことだから、さつきから書いてゐるが、ねつから逃げやアがらぬ、こいつらアみんな無筆の犬ださうな、シッシ、(トどうやらかうやら追ひ散らかして、ゆくとともになしに思はずこの町を出離れて) 彌「コリヤつまらねえものだ、まよ北八夜通し歩かうちややねえか、きつい事アねえ、やらかせ」彌「おめえとんだ事をいふ、まだ九つにやアなるめえ、又どこぞへ泊りてえものだ 彌「それだどつ

て今頃起きてゐる家はなし、イヤ有るぞ、遙か向うに火が見える。アノ火を目當にいつて宿を頼まう 彌「オ、サ、それがい、併し提灯の火ぢやアねえか 彌「とんだことをいふ、戸の隙間より洩れる火だものを 喜「ほんに家の内で焚く火だ、なんでも是非あそこを頼んで泊りやせう、(ト足に任かせて急ぎ行く、やがてそこに近づきたるに、かの目當の火はおのれとだんく先へ歩み出して行く體に驚き) 彌「ヤアく、あの家がどうか歩いて行くやうだ 喜「ほんになア、こいつは可笑しい 彌「イヤをかしくない、氣味が悪いぞこの國にか家が歩くといふは只事ぢやアねえ 喜「ナニサ、これも赤坂の泊り位でみんな狐めがすることだらう、弱みを見せると猶つきあがりをする、構ふことアねえ、さつとあよびなせえ、(ト態ど力み返つて、足早にくだんの火に追ひつき、暗まぎれに透しみれば、甍の車なり。小屋のうちにて火をたき茶をわかしながら、車を押して行くのなり、二人はをかしくこゝをすぎ行くに、折ふし月は出でたれども、草木もねぶる眞夜中のうそ淋しさに。後にも先にも只二人、うはへは我慢につよばつても、心は至ての臆病者、こはごわ辿りゆくあとより一人来るもの有り。彌次郎ふりかへり見れば、小山の如き大男、長脇差を腰に横へ来るは唯者ならず、われくをめがけつけ来るならんと北八に呷きて) 彌「コウ、あとからをかきな奴ついて来る、ちと急いでやらかさう、(ト足早に走ればあどの男も

又走る)喜「待ちなよ、呑口外れさうだ。(ト小便をすれば、その男も立ち止り待つてゐる故彌次郎聲をかけ)「モシおめえ今頃何處へお出でなさる、(トこはく)云へば彼の男存じの外優しき物いひにて)(ハイ)わたしは松坂へ戻りをるものぢやがな、夜さら一人、恐うて、モごうしよいなと思ひをつた所へ、おまい方が通らんす故、コリヤよい連れぢやと、後から二人を心だよりに参じたわいな、喜「イヤおめえ風姿には似合はぬ弱い音を出しなさる、そしてそんな長いやつをさしてゐながらの男ハ、ア是かいな、コリヤあとで拾うて来た竹切れぢやわいな、(ト腰から抜いて杖について行く)彌ハ、ハ、ハ、脇差ではねえの、わつちらア又おめえが恐くて、先刻にからコリヤひよんな奴に見込まれたと思つたが、マアおめえ臆病者でわつちらもおち着いた、喜「もう、これから三人といふものだから大丈夫だ、男「イヤ、この先に、とつとえらいことがあるがな、彌「なにがえらい、男「聞かんせ、わしや今日戸江橋まで往て、歸りにきつう遅なつてな、今のさきこの松原に來をつたことが、なんぢややら向うに大きな白い物が立つてゐをつて、それがあつちやへ行たり、こつちやへ來たり、ぶうらり、もう、わしや恐うてコリヤ死ぬかと思つたわいな、そぢやもの、ごうして向うへ行かれる者で、コリヤならんわいな、後戻りしてごうぞよい連れがほしいと思ひをつた所へ、おまいがたに行逢うのぢやわいな、彌「エ、そ

四四

の白い大きな物がゐたといふは、ごころに、男「イヤ直きにこのさきぢやわいな、彌「エ、何が出るもののおいらが、先へ行かう、おれについて來な(ト、打つれてこの松原を一丁ばかりも行きたる時かの男)「アレ、向うに、ア、コリヤたまらぬ、(ト、がた、ふるへる。二人も怪しく遙か向うを月あかりにすかし見れば、何とも分からぬ白き物およそ一丈ばかりも高く、街道一ばいにひろがりたつてゐる様子。是はなんたらうと、さきへも進まず、たちごまり見れば、又消ゆる様にはつたり無くなるかと思れば又すつくりと立ち、大きくなつたり、小くなつたり、その形わからず)彌「マアなんたらう、喜「裾がねえから亡魂にちげえはねえ、男「コ、コレ、あれぢやもの、ごうして先へ行かれましよいな、彌「しやう體が分からにやア猶氣味が悪い、コリア行かれぬ、あとへ戻らう、男「わしもおまへ方をたよりに又参じたが、ごうも恐うて行かれんわいな、あとへ戻つて又連の人が出來をつたら、又爰迄來うわいな、二三度そないに行たり戻つたりしをつたら、恰度夜が明けうわいな、彌「なんでも白装束だから、何ぞの亡魂に違えはねえ、喜「アレ、青い火が見える、男「エ、ごうかこつちへ來をる様ぢや、彌「コリアごうしよ、とても先へはいかれぬ、(ト、三人ながら色青ざめで、がた、ふるう折から、向うより人の來ると見え)「一戀の重荷をナ、積んだらおまにえ、いく駄あるやら知れぬ、ナアンアエ(ト、唄ひながら來るは助

四五

郷の人足四五人、彌「モシ、おめえ方アごつから來なされた人そく」ハアわしらア此の道に
 ぢやが、役にあたりをつて津まで行きをるのぢやわい 彌「ソレ、い、が、此處へはごう
 して來なされた人そく」ハテこな人は其役で津へ行くのぢやと云ふのに 彌「た、しお前方も
 幽霊ぢやアねえか、ごうも人間なら此程迄生きて來よう筈が無い人そく」何言はんすやら、
 根から葉から分らんわい 彌「イヤ向うに化物が居るのに、ごうしておめえ方アその前を通
 つて來なされたといふ事さ人そく」コリヤこなさんたちは三渡の藤九郎狐が、いこいたのぢ
 やな、ハ、ハ、ハ、 彌「ナニサ向うを見なせえ人そく」むこに何か居るぞい 彌「アノ白い物が、
 アレ、人そく」白い物とは、あれか、ありや道なかで、おまのくつや草鞋が燃えてを
 るが、其煙が月にうつつて、白くなつて見えるのぢやわいな 彌「ハ、ア、さうか、ハ、ハ、
 ハ、コリア有難うござりやす（ト、人足に別かれて三人ともほつと溜息をつき、打笑ひつ
 ）、やがてその所に辿り着き見るに、成程草鞋履などを積み重ねて火をつけ燃したるにて
 其煙白く立ち昇り見えたるなり。此の所を過ぎて松阪に至り、まだ夜深ければ道連れのか
 の男を頼み寝るばかりのことなれば、あたりまへの旅籠を出すも費なりと、町の入口に木
 賃宿を世話して貰ひ、そこに泊りて一夜をこそはあかしける。斯て月落ち鶏なきて、時の
 鐘明六ツを告げわたるに、彌次郎北八早くも起き出で、此所立出づるとて

齋も輪になりて舞ふ日ぞたび人のをどり出でたる松坂のやど
 右のかた、小山の薬師を打すぎ、櫛田といふに至る、こゝにおかん、おもんといへる二軒
 の茶屋あり。餅の名物なり。
 旅人はいづれに心うつるやとおもんおかんが賣れる焼もち
 それより叡川を打ちわたり、齋宮をすぎて、明星が茶屋に休みたるを、こゝに上方と見
 えて派出な大綱の引まはしをきて、帳面と風呂敷包みを背負ひたる男、馬のねをつけてゐ
 たりけるが馬士「モシ、お前方ア其荷を付けて、お一人此旦那と二はう荒神に乗らんせん
 かいな 上がたもの」おまい方も大かた參宮ぢやある。わしも古市まで掛取に行くさかい、一
 所に乗りなされ、はなしもて行こわいな 彌「いかさまゆうへの夜道で大疲れた、北八、お
 らア乗つて行くぞ 喜「そんなら此荷をつけて貰はう（ト、此所にて馬の相談が出来、上方者
 と彌次郎と二はう荒神にて出かける）馬「ヒイン、上がた」おまい方ア江戸衆ぢやあるな
 彌「左様さ上がた」江戸はえらいとこぢやが、ちしや去年行て、えらい目に逢うたが、ア
 ノ江戸に似合はん何處へ行ても手水場が、とつともう、えらい穢しうて、わしや百
 日ほどをる内、頓と手水に行たことがないがな、それから江戸を立つて鈴が森たらいふと
 こへ來て、ヤレ嬉しや、こゝでこそ小用してこまそと、海の中へ溜め、た小用を一氣に

三斗八升ばかりしをつたが、えらうよかつた、あしこは奇麗でえらいおつきな小用擔であつたわいな、ハ、ハ、ハ、彌京では小便と菜と、交換にすると云ふことだから、小便も大切なもんだに、おめね海の中へ惜しいことをした、その三斗八升で取りけえたら、菜が馬に五駄や六駄は来るだらうに、それだから京で尻をひるにも出さうになると、ちやつと裏の畑へ駈けて行つて、生えてある大根や菜の上へ尻をひりかけるといふことだが、成程是も肥料になるなら上がった「さようぢやわいな、其尻をひりかけた菜を、よう刻んで土にまぜて壁を塗りをるがな、京ではその土をへなつちといふわいな、彌總體京と言ふところはあたじけねえ所よ、めえご（前度）わつちが行つた時分は三月で、花見の、てんぐに幕を打つて、結構な高時繪の重詰なんごを取り散らした所はい、が、その中のうちに何が有ると思へば、かくやの香の物に雪花菜の煎た奴は恐れる、上がった「イヤそれよりかお江戸の衆が吉原は櫻えらいと、いかう自慢せらるゝさかいで、わしや態々吉原へいつて見たが、何の櫻は有りやせんがな、彌「そりやおめえ何時頃行なすつた上がった「わしが行たはたしか十月時分、彌なんの十月櫻が有つてたまるものか上がった「ハ、ないかいな、それでも京の小室嵐山はは年中櫻がちんと有るがな、彌「それぢや木ばかりだらう、花は年中有りやアしめえ上がか「左様ぢやわいな、イヤ又江戸衆は長唄をよう唄うてぢやが、京の宮園や國

太夫はまた格別なもんぢやわいな、彌「國太夫といふはどの様にうたひやす上がった「國太夫はかうぢやいな（ト、眞面目に聲を張り上げて國太夫）上がった「頓てわたしが年明けて、お前と夫婦になるならば、肩を裾へはまだな事、足を耳にかけてなりとも添ひませう、（チン／＼）チンチリツン／＼）彌「イヨ／＼おもしろえ／＼、ナントわつちに／＼さきり教へてくんなさらねえか上がった「そりや易い事ぢやわいな、わしについてやりなされハ、此内北八は細長き竹一本を拾ひて上方者が餘りに高慢くさいことを云ふ故、つゝき落してやらんと馬の後から狙つて來ることを知らず、上方者は夢中になり、又國太夫節）上がった「チンチリツン／＼、チンチン、ほんに女子は執念の深いといふは、うそぢやない、死んでも呵責の夜叉羅刹、杖ふりあげてうと打つ（ト、いふ所にて北八手を延し、かの竹にて上方者のあたまをびつしやり）上がった「ヤアコリヤ、ごやつぢやい、人のあたまへ磔うちをるがな、彌「ハ、ハ、ハ、もう一遍今の文句を上がった「ほんに女子は執念の深いと云ふは、うそぢやない、死んでも呵責の夜叉羅刹、杖ふりあげて、（北八うしろより又びつしやり）上がった「アイタ、ハ、ハ、ごやつぢやい、ご滅相な、えらう磔うちくさるがな（ト、ふりかへり見れども、北八はちやつと彌次郎が乗りたる方の馬の蔭に隠れて一向見えす、彌「面白いがどうも節がむづかしい、もう一遍やつてくんせえ上がった「ソリヤなんぼでもやるが、又つむりを打ちやしよ

まいか 彌「ナニサわつちが見てるよう上がった」そんならま一度やりましょかい、死んでも呵責の夜叉羅刹杖ふりあげて、てうと打つト、今度は北八うろたへて彌次郎があたまをびしや〜〜〜（彌「アタ、北八おれだが、コリヤどうする上がった」ハアさつきから、わしがつむりを打たんしたのも、こなさんちやな、何として打たんした 喜「わしは打つた覚えはない上がった」ナニ無いとは云はしやせんわいな 喜「ハテおいらア知らねえ、いけしつこい野郎奴だは上がった」野郎とは何ぢやいな、こなさんはえらい 願「た〜かんすな 彌「なんだこの笹棒め、さつきから總體氣にくはねえ野郎めだ、あんまりたはことつきやアがるとひきすり下ろすぞ上がった」面しろい、サア下ろして見やんせ 喜「オ、眞逆に落してやらうト、馬の尻をびつしやり。馬驚いてはね上る」止が「ヤアコリヤたまらん、何するのぢや 彌「おれもたまらん、コリヤ〜どうする〜」エ、畜生め、ドウ〜ト、此内しんちや屋、あけの原をうち過ぎ、小ばたにつく。此所より馬をおりて三人とも茶屋に休む上がったもの北八にむかひて）「コレおまいは、なんとしてわしがつむりを打たんした 彌もういゝにしなせえ、おたげえに旅ぢやア色々なことがあるもんだ、了簡しなせえ、わつちが一杯買ひやせう、モシ女中、何ぞ肴があらばこけへ（此處）へ一ぱい出してくん（ト、これより酒盛となり、上方者もひとつなる口故、だんだん酔がまはりて）「コリヤえらう酔う

たわいな、コレ彌次さんとやら、わしや御前がえらうすきぢやが、此わろはいかんぞや、とんどいかんけれど、おまいの連れぢや、しよことがない、斯しよぢやないかいな、これから山田の妙見町にいつしよに泊つて、古市をおごろかいな、わしやあこではえらうきれるがな、千束屋の鼓の間、柏屋の松の間、わしが案内するさかい、いかんせんか、どうぢやいな（ト、やたらにおほふ うな事ばかりいふ故、彌次郎こいつをおだてあげて遊ぶつもりに胸算用して）彌「奇妙〜、どうぞお供致してえの上が」是から世古の松坂屋で支度して妙見町の藤屋としよぢやないかいな、サア〜もういこわいな 彌「ドリヤ出かけやせうト、この酒代を拂ひ立出る。此町の出はなれにみや川といふ舟わたしに至りて）
宮川や神に奇縁を結ばんと掬へる水のかげの白木綿
是より中河原をうちすぎ、堤世古をうちこえて山田の町にさしかりける。

東海中道 藤栗毛五編卷之下 終

東海道中 膝栗毛五編卷之下後序

旅人のすなる日記といふものを、作者のして見るひざくり毛、筆の歩みの抄りて、早くも伊勢路にさしかりぬ。いでや天地は古市の宿屋の如く、光陰は道者に似たり、人間行路の難きことは、宮川の川にあらず。相の山の山にあらず。たゞ襟もとの錢かけ松こそたふとさき神のほくらには比すべけれ。末社めぐりの十返舎、こゝに感ずるところありて、天の岩戸のおあなただね、ふたみの海の底を探りて、かひある言葉を選びつとりつ。あつばれ明星が茶屋にはねたる三寶荒神。その尾にとりつくおかげ参。賓導堂に筆をとりて、ひがごとすなる伊勢街道。島さんこんさん仲成しるす。

東海道中 膝栗毛五編追加緒言

荒海の障子に手脚を屈め、乗合の寶船に天窓を搔く。忠綱が齒磨しく齒磨を費し、眉間尺が額徒らに剃刀を勞す。話長ければ、棕櫚箒鏡立をして、災害穿物に及び、幕長ければ、蜜柑の皮羽翼を生じて、餘波留場を騒す。古人いらぬ物を指して長物と呼ぶ、宜哉。唯長くして美なる者は、頭飛鬘、長くして奇なるものは、膝栗毛なるべし。今既に五編追加成りて長袖よく舞ふ古市の樂しび、長舌巧に囀る宮雀の滑稽を盡せり。實に二子が鼻の下に長より出でたる滑稽の骨にして、價良馬の骨より貴し。卿が文さんげくの提灯と光を争ひ、卿が名法性寺入道とともに長く傳ふべし。

文化丙寅仲夏

喜三二書于芍藥亭

憚りながら口上でなし自序ともつかぬ 附言

氣のきつたる化物は足を洗ひて引つこむ時分、膝栗毛の作者、圖に乗りて、又しても彌次郎兵衛北八が、洒落も無駄も洗濯頃、この五編目追加に至つて、足許の明るさうち、先づ今日はこれまでの筆をおくに如くことなしと、漸う満尾し、こちつけたれど、御見物の痺をきらせし所に附け込み、京へ上るの一段を、拾遺に書けよと書肆のもとめに、是非なくとは嘘の皮、やつぱり作者も慾の皮、ひつぱり爪の手を組み、工夫せし後の、二冊は京大阪の穴さがし、なちくりかへして御覽に入れんと、しこたま趣向は取つて置ききの正月物、それは晴着、此一冊は不蘭櫻の伊勢道中、をほりかと思へば拾遺の始まり、こゝはざつと致しませうと、後をはらんでそのためお断りさやうと、例のなまけものが云ふ。

東海道中膝栗毛五編追加

川崎音頭に伊勢の山田とうたひしは、和名抄の陽田と云へるより出でたるにや。此町十二郷ありて、人家九千軒ばかり、商賈を並べ、各質素の莊嚴濃にして、神都の風俗おのづから備はり、柔和悉鎮の光景は、餘國に異なり、參宮の旅人絶え間なく、繁昌更に云ふばかりなし。彌次郎兵衛北八は、かの上方ものと打ちつれ、此入口に到ると、兩側毎に御師の名を板に書きつけ、用立所と云へる看板竹葦の如く、こゝに袴羽織引つかけたる侍旅人どなく馳せちがひて、往來旅人の御師にいたるを迎ふと見えて、一人の侍、彌次郎兵衛に近附き、御師の手代「モシ貴方は何れへお越でござりますな、彌次郎知れた事、太神宮様へ参りやす手代「イヤ太夫はどれへ、彌次郎太夫は竹本義太夫殿さ、手「ハア義太夫と申すは、どこもどちやいな、彌次郎其義太夫と云ふはな大阪にては道頓堀、喜京は四條、お江戸は葺屋町川岸に於いて、永とく御評に預りましたる手代「不具者はおまい方であつたかいな、喜嚙語ぬかすと引つばたくぞ、手「えらいあぢやな、ハ、ハ、ハ、上方もの「ちと休んで行こかいな、彌次郎こゝらはきたねえ、みな御師の雪隠と見えて、用立所と書いてある、彌次郎おきやアがれ、ハ、ハ、ハ、(ト、三人共、ある茶屋へ這入り、暫くやすむ。此内向うより、上方道者大

勢揃ひのなり、女交りに聲張り上げ「うた」ござれ夜は、順慶町の通り筋から、ソレ瓢箪町を、ヤアとこさア、よいとさア、(チ、チン)素見ぞめきは阿波坐の鳥(ソリヤサ)かわいもヤアレ格子先、ヤアとこさ。ヨウいとナア、ありや、こりや、コノなんでもせ、(チ、ンチン)ト、此一群れ通り過ぎたる後から、太々講と見え二十人ばかり、いづれも御師より迎ひの駕に打ち乗り来るが、おしの手代さきに立ち「サア」これぢや、まづぎなた様も是で御休息なさりませト、駕は残らず茶屋の門に下す。此太々講は、江戸と見えて、いづれも小袖ぐるみに、みじかいおちをきめた手合、めい、駕を出で、座敷に廻る。此内一人の男彌次郎を見つけて、「イヤこれはどうだ、彌次殿、貴様も参宮かト、聲をかけられて、彌次郎びつくりし、見れば町内の米屋太郎兵衛なり。江戸を立つとき此米屋の拂をせず立ちたる事なれば、何となく彌次郎しよげかへりて、「ハア太郎兵衛様か、よくお出かけなさいました、併し爰でああなたのお目にかゝつては、面目ない太郎「ナニサ、わしも仲間の太々講で、その癖講親と云ふものだから、據なく出かけましたが、よい所で逢つた、旅へ出ては、兎角づうくに(同國)が懐しい、奥へ来て一杯遣らつし、彌有難うございます太郎「連は誰れだ、ハ、アまんざら知らぬ顔でも無い、ナント貴様たち幸のことだ、太々講拜まぬか、それも飛入と云

やア、ちつとばかり金が出るから、無様ながら、わしらが供になると、一文も入らず、しこたま(大分)馳走になつて拜まれると云ふものだから、どうだらう「彌それは願つてもない有難い事でございやす、しかしそれが出来やせうかね太郎「ハテわしが講親だもの、どうでもなる、マア何にしる奥へ来さつし、彌「ハイ左様なら、モシ上方の、ちと茲に待つてくんなせえ(連の上方もの)「よいわいの、行てごんせ太郎「サア二人とも来さつしト、此太郎兵衛にいざなはれ、彌次郎も北八も、草鞋を取つて奥へ行くと、上方ものは、ひとり店先に酒など飲み待つてゐるうち、奥は太々講の事なれば、御師よりの馳走にてさいつおさへつ大騒ぎの最中、又表に一群れの駕十四五挺計り、これは上方の太々講と見えて御師の手代さきにたちて「カニ「ホウよい、えつこらさ、ト、これも同じく此茶屋にはいる)手代「サア御案内、茶屋「お早うござります、奥へお通りなさんせいなト、此内皆々駕よりおりて、奥へ通ると、すぐに酒肴を持ち出し、太々講二組の大騒ぎ、座敷のしやれ、いろ、あれどもあまりくだくしければ、略す。やがて奥の酒もりも終りて、サアお立ちと云ふと、二くみの太々講が一所になり、ごさくさして、奥より出づると、江戸組の御師の手代、いちはなだちて奥より出で「サアお駕の衆、これへ、ごなたもサアお召しなされませト、あつちこつちを駆けまはり、駕にのせる。此内又上方組

の御師の手代も同じく驅け廻りて、「こちらのお駕はこれへ〜ト、横づけにして、皆々を乗せる。米屋の太郎兵衛生酔となり、彌次郎が手を取り」太郎「コウ彌次公、貴様おれが駕に乗つて行かねえか 彌「イヤとんだことをおつしやる太」ハテわしはこれから、歩くは慰みだ、貴様洒落に乗つて行かつし 彌「さやうならへ、こりや奇妙々々ト、駕に乗れば、サアお立ちぢやと、兩方の駕が一時にかきあげ、混雜して彌次郎が乗りたる籠の人足とんだ、間抜けと見えて、上方ぐみの籠の中へ紛れ込みたるに氣も附かず、さつさどかいて行く。かゝるごさくさまぎれに、人もそれと心附かねばだん〜と、急ぎ行くほごに、山田のまん中すぢかひと云へる所にて、江戸がたの〜くみは、内宮の御師なるゆゑ、左の方へ別れ行く。上方組は外宮の御師にて、此所より右の方へ別れ田丸街道の岡本太夫の方につく、門前の箒目、盛砂に水打ちきよめ、玄關に幕打ちまはして、馳走の役々羽織袴に出迎へば、講中皆々駕をおりて玄關より打ち通る。この時彌次郎もかごかきのそ〜うにて上方ぐみの中へまぎれ込み、こゝに來たれど十四五挺もある籠、それがどれやら分からず。彌次郎籠を出て同じく座敷に打ち通り、そこらをうろ〜見廻せども、みな知らぬ顔ばかりなれば 彌「ハテ合點のいかぬ、モシ〜米屋の太郎兵衛様は、これにお出でなさいます。そばにゐた男」なんぢやいな、太郎兵衛さんとは、こちや知らんわいな、そしてお前は根から

見ん顔ぢやが誰さんぢやいな 彌「ハイわつちは、ソレ太郎兵衛さんの町内のものぢやが、ハテどうか違つたやうな、北八はさうした知らんト、むしのやうに、うろ〜きよろ〜と、まごつき歩けば、みな〜臆を潰し、互に袖を引きあうて、荷物など片寄せ呷きあふ内、此講中の内二三人立ち向ひて「コレ〜こなさん、見なれぬ人ぢやが、誰れぢやいな 彌「ハイ〜講中」ハテこなわろは、何をさよろ〜さんすぞいな、誰ぢやと云ふのに 彌「イヤわつちは、米屋の太郎兵衛さんにお眼にかゝれば分かりやす講中」ハテそないな人は、こちの講の内には無いもせぬもの、なんぢややら氣味たの悪い人ぢやわいな 御師手代「ハアこな人は、あなた方のおつれてはござりまんかいな講中」さよぢやわいな手代「イヤそれはごしたもんぢや、とつと〜出て行んせ、えらいへげたれぢやな講中」道中じら（盗）てあるぞいな、ほり出してやらんせ、あたけいな 彌「エ、そんなに云ひなさることアねえ、ほり出すとはなんのこつた、とはうもねえ講中」ハ、アお前のもの云ひはお江戸ぢやな、それでよめたわいの、今のさき、お江戸の太々講と一所に落合うたが、其時おまいの乗らんした籠がこちらの中へ紛れ込んでござんしたのぢやな 彌「成程左様、そんならわつちの行く御師ごのは、どこでございやすな手代」ナニおまいの行く所をたれが知ぞいな講中「めん〜の行く御師ごのを知らんと云ふことがあろかいな、コリヤわりさま（汝）はわざと此方の仲間へす

ぢやさかい 彌「イヤそんな物のぶらさがつたのぢやアございやせん往來」ハテまあ行て問うて行んせ、あこも宿屋ぢやあろわの 彌「ハイさやうなら」ト、走り行くうち、かの家の門に立つてゐた人も、何處へかついで行つてしまひさつぱり知れなくなり、まご／＼して、ある家の前に立ちて 彌「モシ／＼ちと、物が尋ねたうございやす、去年首をおく／＼りなつたは、あなたでございやすか（この家の亭主居舎はせ、膽を潰し、飛んで出て）「イヤわしや首つたことはないがな 彌「そんなら、何處でございやすていしゆ」こゝらに首つた家は知らんがな、此二三軒さきに柵から落ちた牡丹餅喰うて、咽をつめて死んだ家があるが、もしそれぢやないかいな 彌「いかさまアな、何でも柵からぶら下つた様な家であつた（ト、又二三軒先へ行き或るうちの角にて）彌「モシ柵から落ちたうちは、おめえぢやアございやせんか（ト、とんだことを云ふ、此家の女房と見えて）「イ、エナ私かうちは、もどから爰でいつしか、柵へあげて置いたことはおませんわいな 彌「ハア外にはござりやせんか」女「ソリヤ、おまい聞き違ひぢやあろぞいな、山から落ちた家ぢやおませんかいな、それぢやと相の山の與次郎の小屋が、此間の風で谷へ吹き落されたと云ふことでおますがな、大方それぢやあろいな 彌「イヤそれでもねえが、コレヤア困つたもんだ、何だか彼だかさつぱり分からなくなつて、元も子も失なつたやうだ、わつちも先刻から尋ねあぐんで、もう

／＼がつかりと草臥れやした、どうぞ一ぶく吞して下さりやせ（ト、此店さきに腰を懸ける。亭主氣の毒さうに煙草盆をさげて奥より立ち出で）「サア一ぶくあがらんせ、一體お前は何處を尋ねさんすのぢやいな、參宮ぢやあろが、おひとりか、但しはお連れでもおますかいな 彌「さやうさ、道連ともに三人の所、わつちはその連にはぐれて、こんな困つたことアございやせんてい」イヤそのお二人のお連は、お一人はお江戸らしいが、今お一人は京のお人で、目の上に此位な痰瘤のあるお方ぢやおませんかいな 彌「左様々々てい」夫ぢやとこちらの内にお泊りなされたさかい、すぐにお前様のお迎ひを出しましたわいな 彌「そりや本當にか、ヤレ／＼嬉しや、そしておめえの所は何屋と云ひやすてい」アレ御覽なされ、掛札に藤屋と書いておますがな 彌「ホンそれ／＼、柵からぶらさがつたやうだと思つたが、その藤屋よ、さうして連のやつらはどこに居やすてい」ソレ奥へお連様がお出でだと云うてかんか（ト、此聲を聞くより奥から出る道づれの上方もの飛んで來り）「コリヤやうとんした、定めて其所らうち尋ねさんしたである、こちもえらう尋ねまふたこつちやないわいのマア／＼奥へ 彌「これはお世話になりやす（トすぐに奥へ行く、上方ものと北八は、江戸ぐみの太々講について御師の方へ行きしが、彌次郎兵衛見えざるゆゑ、知らぬ人ばかりにて手持なく、いろ／＼聞き合せても分からず、詮方なくその御師の方を出で尋ね度もあて

ご無く、かねて妙見町の藤屋へ泊らんといひたることも承知の事なれば、大方尋ねて来る
 である。借こそのところに泊りて待ちうけしなり。彌次郎は太々講の駕が間違ひたる
 いちぶしどうを物語り大笑ひとなりける。北八は髪結を呼びにやり、髻をそりてゐたりけ
 る「まあ、お互に別條なくてめでたい」彌「いやもうとんだ目に遇つたといふは己れ
 が事よ、時に髪結さん、其後でわつちも一つやらかしてくんなせえ 喜お前マア湯に這入
 つて來なせえ 彌「そんならさうよ」ト、彌次郎は湯に入りに行く。北八髻をそりかゝりて
 「時に髪結さん、おいらが髪はぐつと根をつめて結てくんな、何だか上の方の髪はたぼ
 が出て鬚がおつに長くてとんだ氣のきかねえ頭つきだ、そして女の髪もどうせえに大きく
 結つて、何のことはねえ、筑摩の鍋かぶりと云ふものだ、かみゆひ」そのかはり女子はとつと
 えらい綺麗でおまじよがな 喜「綺麗はい、が、立つて小便するにはあやまるかみ」イヤお江
 戸の女中もおつきな口を開かんして欠伸さんすには根から色氣がさめるがな 喜「それでも
 女郎は又江戸のことだ、江戸は意氣張があるから面白い、こつちのは誰が行つても同じこ
 とで根つから振ると云ふことが無えから、信仰が薄いやうだかみ」イヤこちの方ではお前の
 様なお方か行かんしても振らんさかい、それでえいぢやおませんかいな 喜「貴様己を安く
 云ふなコレほんのこつたがかみ」オット仰向かんすと切りますがな 喜「イヤ切らなくてもご

うせえに痛え剃刀だかみ「痛い筈ぢやわいな、この剃刀はいつやら磨いだまゝぢやさかい
 喜「エ、めつさうな、なぜそる度毎に磨がねえのかみ」イヤそないにとくと剃刀がへるさか
 い、ハテ人さんの頭の痛いのは、こちや三年もこらへるがな 喜「道理こそ痛くて一本
 づゝ抜くやうだかみ」なんぼ痛いとて、たかで命に障る事は無いがな 喜「エ、そりや知れた
 事よ、もう一月代は好い加減にしてくんなかみ」お前逆剃はお嫌かな 喜「エ、その剃刀で
 逆剃に遣られてたまるものか、頭の皮がむけるだらうもう、そこはい、から、ぐつと髪を
 詰めて結つてくんなかみ」ハイ、コリヤえらい雲脂ぢや、この雲脂のとれることがおます
 がな 喜「どうすると取れるかみ」坊様にならんすとえいがな 喜「エ、いめえましいことを云
 ふかみ」根はこない（此様）でようおますかい 喜「イヤ、もつと引つ詰めてくんな、兎角
 こつちの方へ來ると髪は下手くそだ、根を堅く詰めて結ふことを知らねえ無器用なかみ」さ
 よなら、これではどうでおます（ト、此髪結これ見たかと云ふ程ぐつと根をつめると、月
 代に三つほど鬘積が出来て、目は上の方へ引きつる位にかたく引つ詰められ、北八髪の毛
 が抜ける程痛けれども、負惜しみにて顔をしかめながら 喜「これでよし、ア、い、心持
 ちだかみ」ナントそれでよござりまじよがな 喜「餘りよすぎて首が廻らぬやうだ（ト、此内
 彌次郎湯より上り來る、かみゆひ）」サアあなた、髪なされませんかいな 彌「イヤどうか湯

に入つたらぞくくして風でもひいたやうだ、わつちはマア明日の事にしやせうかみ」さよなら御機嫌よう（ト出て行く。此うち女膳を持ち出で、めい／＼へ直す。上方ものは先刻より寝轉び居たりしが、起き直りて）「ドレ飯食をかいな 女「今日は不漁でお肴が何もおませんわいな 彌「これは御馳走、サア北八どうだ 彌次さんわつちが箸は何處にある 彌「エ、此男は、ソレ膳に附いてあらア 喜「取つてくんない、さうも俯向くことがならねえ 彌「なせならねえ、オヤ／＼手めえの顔はさうした、目が引きつって狐憑を見るやうだぜ 喜「あんなまり髪結めがごうぎに根を詰めて結やアがつて、アイタ 首を動かす度に、めり／＼と髪が抜けるやうだ上方「ソレお前、お汁がこぼれるわいの、アレお飯の上にお汁椀を置かんすかい、アレこぼれたわいの、コリヤもうとつとやくたいぢや 彌「彌次さんごうぞ拭いてくんない 彌「いめえましい男だ、ろしてマア俯向かれぬほごに、なせそんなに堅く結はせた、もうちつとゆるくすればい／＼に、手めえ大「髪結をいぢめたらうから上方「そぢやさかい、そないな目に遇はんしたのぢやあるぞいな 喜「イヤもうものを云ふさへ頭へ響けてならぬ、彌次さん、ごうぞこの難儀を助かるしやうはあるまいか 彌「ドレ己れがちつとゆるくしてやらう（ト、髪を根を持つて、いやと云ふ程ぐつと引たてる） 喜「アイタ、どうする／＼ 彌「これでよからう 喜「ア、ちつと首が廻つて來た、エ、とんだ目に遇はしやアがつた。

侮りし報は罰があたりまへ油断のならぬ伊勢の髪結

自ら斯く詠みて打笑ひつゝ、支度仕舞ひ、はや膳もひけたるに、いつれも打ちくつろぎて嘶の序に上方「ナント今宵これから古市へ行こかいな 彌「まだ宮めぐりもせぬさきに、勿體ねえやうだが、儘のかは、やらかしやせう 上「行て見やんせ、わしやあこで年々捨てた金が千や二千のこつちやないさかい、なんぼなどわしがうけこみぢや、サア早う行かんせんかいな 彌「エ、そんなら、己も髪月代すればよかつた 上「御亭さん／＼、ちよと來ておくれんかいなこの宿のていしゆ「ハイ、御用でおますかいな 上「お江戸のお客が、これから山へのぼろといな（妙見町の通言に、古市へ行くを山へのぼるといふ）てい「よござりませう。お供して参りませう。アノ牛車樓か千束亭にしよぢやないかいな 喜「太鼓の間とやらは何屋にありやすてい「太鼓ぢやおません、鼓の間の事かいな、ソリヤ千束屋でおますがな 上「その千束屋がよござりませう（ト、皆々仕度するうち、はや日も暮れて、時分はよしと亭主を案内として三人とも出かけゆく程に、此妙見町の上はすぐに古市にて、娼家軒をならべ、弾きたつる伊勢音頭の三味線勇ましく、浮かれ／＼と千束屋と云へるに至れば、（女ども皆々走り出で）ようござんした、すぐにお二階へ（藤屋のていしゆ）「お連れ申し

てもよいかな、サア御案内いたしましたしよ（ト、亭主を先におのゝ二階へ上り、座に着く
 上）上時に彌次さん、かうしよぢや無いかいな、お前方をお江戸でえらい大なたなの番
 頭衆にしよぢやないなふぢや」そないなことがよござりましょ（ト）しかし訛らんしては
 あかんわいの、上方と云ふもんぢやさかい、京談でやらんせにや、工合が悪かるが、どう
 ぢやいな彌次」そんな事はもつて來いだ、すつぱりとわつちが上方でやらかしやせう、コレ
 女子衆、ちよと來ておくれんかいの、わしやなんぢややら、とつともうはやえら
 う咽が乾くさかい、茶々ひとつ持て來ておくれんか（ト）彌次「ナント京談えらいか
 く、へ、畜生めが（ト）イヤきよといもんぢや、でけた（ト、此内女酒肴を持ち出し
 すゝめる、藤屋始めてだん／＼に廻すと、京の人引きうけて「コレお仲居、おやまさんは
 どうぢやいな、此お方はな、お江戸のえらいおたなの番頭様ぢやさかい、なんぢやあろ
 と、おやまさんをありたけ出さんせ、お氣に入ると百日も二百日も御逗留で、お金の入る
 事は根から葉からとんとおかまひないお方ぢやふぢや」さよぢやわいな、私が去年お江戸へ
 參じた時、おたなの前を通しましたが、成程えらい御大家ぢや、あなたの御支配なさる方は
 兩替みせと見えましたが、之も大きなみせでおますわいの（ト）彌次「ナニサ格別えらいみせでは
 無わいの、間口がやつと三十三間あつて、佛の数が三萬三千三百三十三人暮しぢやさかい

えらい賑かなこといなふじや」京のお店はたしか六條珠數屋町であつた（ト）彌次「サイノ、わたし
 が父さん母さんは、さぞや案じてゐさんすぢやあるに、こないにおやまばかり買うて、と
 つともうえらいやくたいぢや（ト）女「これいし皆お出でんがいな（ト、呼び立つる聲に四
 五人立ち出で）「ごなさんも、ようござんした（ト）彌次「ハ、アこれもえらい出來ぢやな（ト）番頭
 さん盃をちと彼方へさゝんせ（ト）彌次「アイもし一つあげうかい（ト、其中で一番美しいやつへ
 さして、にこ／＼してゐる）喜「おいらは太鼓の間が見たいがどうだ（ト）また太鼓の間と云
 はんす、鼓の間ぢやわいな（ト）女「鼓の間には、これもお江戸のお客さん方が子供衆寄せて踊
 らせてぢや、アレ聞かんせ（ト、此内奥の鼓の間にて踊が始まると見えて三味線の音聞え
 る、チテチレ／＼チ、ト、トテチレ／＼いせおんど／＼すい風や、塵も拂うて木隠れの、池
 に浮べる月の顔、けはひは遊里のいろ／＼にヨイ／＼ヨイ／＼よいやさア（ト）イヤア奥で
 踊を始めをつたさうぢや、こちもコリヤ面白なつて來た、ちとおつきなもんでやろわいな
 彌次「さうさ、とんだおつに浮れて來た、もう京談も何郎も面倒になつた、ヨイ、ヨイヨ
 イ、よいやさア（ト）イヤ／＼トチン／＼（又おくのぬた）「目立つ浮名も面白き、やはらく
 唄や三味線に、足もしごろに立ちかへり、またも今宵の約束は、ヨイ／＼ヨイ／＼よい
 やさ、トチチレ／＼（ト）コリヤえらい／＼、時にと、下拙の私めが相方のおやまさんは、

コレお前名は何と云ふぞいの、なんぢやお辨、有難いの、誰あらう勢州古市千束やお辨、女郎と云ふ美しい可愛らしい女の辨財天女様は、忝なくも尊くも、京都千本通り中立賣ひよいと上る所、邊栗や與太九郎様の相方ぢや、ちと傍寄らんせんかいの（ト、手を取り引き寄せる、此京の人は酒に酔ふと何でも丁寧にくごく云ふことが癖にて、だん／＼管を巻きかける、彌次郎は始に我が盃をさしたるおやまゆゑ自分の相方と思ひるたりしに、京の男わが方相のやうに云ふゆるゑやつきとして、上「コレ京のお客、ソリヤわしが相方のおやまさんぢや、」イヤ何云はんすぞいの、コレ女中のお仲居、お前名は何といふてぢや、女「ハ伊きんと云ふわいな、上「ソレ／＼勢州古市千束やの仲居おきん女郎に、京都千本通り中立賣ひよいと上る所、邊栗や與太九郎が、先刻内々ひきあうて置いた、アノ美しい可愛らしい辨財天女のおべん女郎と云ふおやまさんは、則ち京都千本通中立賣、上「エ、やかましい、千本も百本もいるものかえ、何でもかうしよ、てつぺんに己が盃をさして置いた（ト、いふは江戸にては女郎の座敷になほると、すぐに盃をさして相方を定むれども、此邊にてはさやうの事はなく、唯ない／＼にて茶やの女房或は女などに囁やきて、あれは誰れ、これは誰れと相方をきはめて置く故、京の人先刻仲居へ渡りて、此中にていつち上しるものを自分の相方と定め、残りを彌次郎北八と己れが策略してきはめて置きしゆるゑ、彌次郎はそ

の事を一向知らず、江戸の格にて盃をさしたるおやまを我が相方と思ひるたりしゆるゑ、さてこそこのいさくさ起りたり、仲居彌次郎をなだめて「これいし、アノおやまさんはな、此人さんの相方、お前さんはこちらの鳥田鬚さんぢやわいな、彌「馬鹿ア云ふな、此中でアノおやまが目付いたから、それで己が盃をさしたに違ひは無い、ろこで私がおやまかいな、上「ハテ悪い合點ぢやわいの、こなさんはアノ江戸はごこちやいな、彌「江戸は神田の八丁堀とち面やの彌次郎兵衛様と云つちやアちとひねくつた奴さまだ、上「そのお江戸の神田八丁堀、とち面やの彌次郎兵衛殿と云ふひねくつた奴様が、京都千本通中立賣ひよいと上る所邊栗や與太九郎が相方のおやま勢州古市千束やの、彌「エ、何をぬかしやアがる、邊栗やの與太九郎も呆れらア、上「イヤこゝな、お江戸神田八丁堀柄めんやの彌次郎兵衛殿京都千本通中立賣上る所、邊栗や與太九郎を京都千本通中立賣上る所、邊栗や與太九郎殿と云へばまだしも、夫を京都千本通中立賣上る所、邊栗や與太九郎と呼び捨てにさんしたの、其處でもつてからに、京都千本通中立賣、彌「エ、やかましい、よく饒舌る野郎だ、上「己アそんなことより、太鼓の間が見てえ、太鼓の間はごこたぐ、女「太鼓の間とは何ぢやいし、鼓の間の事かいな、女「オ、そのつゞみ／＼、上「イヤ鼓ぢやあらが、何ぢやあらが、此邊栗や與太九郎が相方ぢやわいの、彌「コレ悪く洒落るな、何でも鼓の間は己がのだ、悪い敵役ぢや

アねえが、嫌でも應でも抱いて寝るふちハ、あの廣い鼓の間をかいな彌オ、廣くても狭くとも頓着はねえ、己がものだ「イヤ〜〜〜そりやさんわい彌ナニさんん
 ことがあるものか、誰が何と云つても、京都千本通中立賣とちめぢや彌次郎兵衛様が相方
 だは彌イヤ此お江戸神田八丁堀上る所、邊栗や與太九郎の買うたのぢや「ハ、ハ、ハ、お
 前方は何を云ふやら、ごつちがごうだかさつぱり解ら無くなつた」女「そして此お方は京の
 お方ぢやと云はんしたに、物言ひがいつの間にもやらお江戸ぢやわいな彌「籠棒奴、こ、慌
 しいに京談とつかつてゐられるものか」女「餘りお前さん方が争うてぢやさかい、ソレ見さ
 んせおやまさはん方は皆逃げて行かんしたわいな彌「思えましい、もう歸るべい」女「マア
 ようおますがなふち」モシかうしよかいな、これから柏やの松の間をお眼に懸けうわいな、
 たゞし麻吉へお供しよかいな彌「厭だ〜、己ア是非けえ歸る〜ふち」ハテよござりま
 す彌イヤ留めやアがるな、思えましい（ト、すつと立つてかへらうとする。中居ども立
 ちかゝりて、いろ〜挨拶し留めてもとまらず、振り放し出かける所へ、相方のおやま初
 江立ちいで）「これいし、何ぢやいし彌」とめるな、よせえ〜「初」お前さんばかり其様は
 なア歸る〜と云はんすがな、私がお氣にいらんのかいし彌イヤさうでも無えが、こゝ
 を放せ〜「初」わしや否いし（ト、又駈出しさうにするを引き捕へ無理無體に羽織をぬが

せる）彌イヤ羽織をどうする、よこせ〜（ト、言ひながら又紙入煙草入を取られる）
 彌「コレサおらア歸える〜」初「情の強い人さんぢや（ト、云ひながら帯をぐつと引きほ
 ごき着物をぬがせようとする。彌次郎は垢じみたる越中襦袢を締めてゐたりしゆる、裸
 にされてはたまらぬと大きに辟易し着物を兩手に押へて）彌「コレ〜、もう堪忍してくれ
 初」そぢやさかい、こゝに居さんする彌「居るとも〜」初「初江さん、もう堪忍してやら
 んせふち」サア〜よござります、これ〜（ト、彌次郎が手を取りもとの所に引き拵ゑ
 る）彌「ハ、ハ、面白〜、彌次さん斯うもあらうか。
 ひくつけき客も今宵はもてるなり名はふる市のおやまなれども
 此一首に皆々笑ひを催し、藤屋の亭主仲居どもが、そこら取り片附けて、それ〜に坐敷
 を設け、酔ひ倒れたる上方ものを引きたて、案内するに、北八も俱に出で行けば、後に彌
 次郎兵衛一人残りたるに、女「サア〜、お前さんもちと彼方へ」彌「ドレ行きやせう、ごこ
 だ〜」（ト、云ひながら立つて行く。此彌次郎至つて見得者にて、かの煮しめたる如き犢
 鼻糰締めたるが、殊の外氣にかゝり、ひよつと見付けられたら耻のかきあげならんぞ、懐
 中のうちにてそつとはづし、連子の窓より庭の方へ投げ出し、あとさきを見廻し、人の見
 ざるに安堵して、仲居の後に引き添ひ行く）かくて夜も更けわたるに、奥の間の川崎音頭

も自ら鎮り、旅客の軒の聲喧しく、鐘の音もはや七ツひびきて、鶏の聲萬戸にうたひ、夜も白みかゝる。明り窓の障子に驚き、起き上りて目をこすりながら「サア、どうちやいな起きさんせ、もう去のわいな」彌次さん日が出たア、歸らねえか（ト、兩人彌次郎が寝て居る所へ來り起す、彌次郎起きて）「ヤレ、ぐつと一寢入りにやらかしたおやまこれいし、今日もゐさんせ」彌「さほうも無え歸る（ト、皆々仕度して出懸ける、おやまごも送りて廊下に出で、一人のおやま連子の窓より庭の方を覗き）「これいしく、アレ見さんせ、庭の松に湯文字が懸つてあるわいなア（彌次郎の相方女郎初江）」のいてかんせ、ほんに嫌いな、誰ぢやいな」彌「ハ、アこいつは可笑しい、羽衣の松ぢやアねえ、憤鼻禪懸の松も珍らしい」喜「彌次さんおめえのぢやアねえか」初「ホンニそれいし、あのさんの廻ぢや無いかいな（ト、彌次郎が顔を見て笑ふ、彌次郎は背に連子より捨てたる憤鼻禪庭の松に引つ懸りてぶらさがりゐるを可笑しく思ひながら、道それとも云はれず、平氣にて）「ナニとほうもねえ、あんな汚ねえ憤鼻禪を、ナニ己がするものか」初「そぢやて、ナ昨夜わしやこのお客さんの着物を脱がすとてなア、よう見たが、あないな色の廻ぢやあつたわいな上」

「オ、さうちやあろぢい」彌「馬鹿ア云はつせえ、己ア木綿憤鼻禪はさらひだ、何時でも羽二重を締めてゐる」上「オホ、、嘘やの、あれぢやいし」喜「いかさま己も見覚えがある、

確にあれだらう、それが嘘なら彌次さんおめえ今裸になつて見せなせえ、今朝ア宿入の奴様でふつて居るに違えはねえ」初「さうちやいし、オホ、、これいし、久介ごん其廻はお客さんのぢや、取て下んせ（ト、庭に掃除をしてゐる男を呼びかけ指圖すると、此男竹箒の先にて、かの憤鼻禪を突つ懸けて取り、連子の前へぐつとさし出し）「さあらば憤鼻禪をまゐらさう、ソレ取らんせ、どうちやいなはつ」オ、くさ」喜「ハ、、彌次さん手を出しなせえ」彌「エ、情ない事を云ふ、己がのぢやねえと云ふに」喜「そんならお前のを捲つて見せなせえ（ト、彌次郎が帯を解きに懸れば、振り放してその儘逃げ出して行く）みなく」オホ、、ワハ、、（ト、大笑ひして送り出る、三人とも此所を立ち出ると）彌「エ、思えまし、北八めが己に赤耻をか、しやアがつた」喜「松に」憤「のぶらさがつたも珍らしい。」

憤「を忘れて歸る淺間嶽萬金玉をふる市の町

かくて妙見町に立ち歸りたるに、其日は空の景色いと長閑なれば、急ぎ内外の宮めぐりせばやど、支度あらましにして立ち出づるに、行く程なく今戻りし古市のあがりくちに、はや見世いたして、めい、小屋に引きたつる古のお杉お玉が影面をうつせし女の二上り調子）「ベンベラ、チャンテン、（ト、無上に弾き立つる唄の唱歌は何とも解らず、往來の旅人、此女の顔に錢を投げ附くるをそれ、顔を振りよける）彌「彼方の新造

が腰へぶツ付けてやらう(ト、錢二三文投けると。ちやつと避けて當らず)「ペンペラ〜喜
 「ドレ己が當て、見せよう、ハアこれはしたり」ト「なんとして、お前がたがごないに投り
 付けさんしても、てきらがさすもんぢやないわいの」彌「今度は見なせえ、ハアこれはいな
 喜「オヤ〜、縋ぐるみやらかしたな、それでも當らぬ、コリヤしやうがある、餘り面が
 憎い(ト、小さな石ころを拾ひて投げ附くると、かの女撥にてちよいと受け投げ返せば、彌
 次郎の顔へびつしやり 彌「アイタ、ハ、ハ、ハ、こいつは大笑だ 彌「ア、痛え〜
 どんだめにあひの山とや打ち附けし石返したる事を可笑しき
 かくて爰を打ち過ぎ、中の地藏町に到る、左の方に本誓寺といふ勝景の地あり。また寒風
 と云へる名所もありの、五知の如來、中河原、さまざま記すに違なし。夫より半谷坂道にか
 ければ、女を食ごも假粧飾りたるが、往來に錢を乞ふ。又十一二三の女子ども、紙にて張
 りたる笠の色どれるを被りて「やてかんせ、お江戸さんぢや無いかいな、さきな島さん、
 花色さん、頬被りさん、やてかんせ、投うらんせ 彌「喧しい附くなく〜」ト「アノ云は
 んすこといな、お江戸さんぢや、ちやつと下んせ」エ、引つ張るな、ソレ撒くぞ〜(ト、よ
 い加減にばら〜と錢を投うり出せば、乞食ごもめい〜拾ひて)「よう下んしたや(ト、
 ひとり〜禮を云ふ、此先に又七八才ばかりの男の子、白き鉢巻をして袖無羽織に裁著な

ぎを穿きたるが、手に采配扇などを持ち踊る後に編笠著たる男、影をすり〜「ヤレふれ
 ン、五十鈴川、ふれや〜千早ふる神のお庭の朝清め、するやさ〜らの、えいさら〜、え
 いさら〜、ソレてんちうちや、はりひちちや、やてかんせ〜 喜「ソリヤやてかんすぞ、
 しかも四文錢だ、を四文せになら、つりを三文下んせ 彌「こいつ盡のい〜ことを云ふ、時
 にこの橋は宇治ばしと云ふのか」ト「さよちや、アレ見さんせ、網で錢をよう受けてぢや喜
 「ドレ〜(ト、橋の上より覗き見れば、竹の先に網を附け、旅人の投錢を受けとめる)ト「
 彌次さん小錢があらば、ちくと貸さんせ(ト、彌次郎が錢をかりて、さつ〜とほうり投げ
 る、下には皆受けとめる)ト「えらう面白いな、よう受けくさる、もちつとほつてこまかい
 コレ北八さん、お前もちと貸さんせ、ソレ又ほるぞ〜、ハ、ハ、ハ、えらい〜 彌「コレ
 京のお人、お前人の錢ばかり取つてなげる、ちとお前の錢をも投げなせね」ト「よいわいな
 お前方の錢ぢやて、わしが錢ぢやて、變りやせんわいの 彌「それだどつて、餘りあた
 じけねね」ト「ナニわしが此前參宮した時はな、きかんせ、えらい阿房ぢやあつたわいな、
 こ〜で錢五貫か十貫投つたわいの、餘り面の憎い程よう受けをるさかい、何ぢやると、今
 度は網破つてこまそと、懷中に丁銀一枚あつたを、ツイト投つてこましたら、やつぱり
 網で受けくさつたさかい、コリヤごうちやいな、丁銀投つたら網が破りよかと思つたに、

根からたわいぢや、ごして網に、留りくさつた知らんと云うたりや、下に居る奴めが、ソ
リヤ留る筈ぢやと吐しくさる、なぜぢやと云ふと、ハテ網の目に金留るぢやと、えらうわ
しをへこましくさつたはいの、ハ、ハ、ハ、サア〜行こわいな〜

七八

投げ銭を網に受けつゝ往來の人を茶にする宇治橋のもと

是より内宮、一の鳥居より四つ足の御門、さるがしらの御門を打ち過ぎ、御本社に額づき
奉る、是天照太神にて、神代よりの神鏡神劍をうつて、鎮座し給ふ所なりと。

日にまして光照り添ふ宮柱ふさいれ給ふ伊勢の神風

こゝにあさひの宮、豊の宮より始めて、河供屋、ふるごの宮、高の宮、土の宮其外末社悉く
記すに違なし。風の宮へかゝる道に、御衣裳川と云ふあり。

引きずりて幾代かあとをたれ給ふ御衣裳川の流れ久しき

すべて宮めぐりのうちは、自然と感涙肝に銘じて、有難さに眞面目となりて、洒落もなく
無駄も云はねば暫くのうちに順拜をはりて、もとの道に立ち出で、頓て妙見町に歸り、こ
ゝにてかの上方面ものと別れ、彌次郎北八兩人のみ、藤屋を盡立として外宮へまゐる。是す
なほち豊受太神宮なり。天神七代の始め、國常立の尊と申せし御神なり。神聖の宮、寶劍
の宮、其外數多の末社を拜みめぐりて、天の岩戸に登りたるに、彌次郎兵衛如何しけん、

頻に腹痛みて惱みけるゆる、忽々に此所を下りたち、傍に休みて、丸薬など用ひ、兎角
するに堪へがたければ、急ぎ廣小路に到り、宿を借らんと、其處此處を見廻すうち、ある
宿屋の亭主「モシ〜御泊ぢやおませんかいな 喜アイ連の者が少し虫がかぶりさうだか
ら、宿をお頼み申しやすていしゆ」サアお這入りなさんせ、ソレお鍋、奥へお供せんかいや
い 女「ようお着きておます 喜サア彌次さん、上んなせえ、彌アイタ、ハ、ハ、喜エ、汚ね
え顔をすする、お前コレヤア何ぞの罰が當つたのだ 彌ナニお罰をくつた覚えはねえ、大方
今朝の飯があたつたのだらうてい」お飯も、あがりつけなさんせ、あたることがおましよ
わいな 喜ア、コリヤ意氣地のねえこつた、サア〜奥へ〜 彌アイタ、ハ、ハ、(ト、北八
に介抱せられ座敷に通る、亭主も荷物を運び「さぞ御難儀でおましよ、お薬でもあがりま
したか、幸ひ、私所の妻が今月臨月でおますがな、昨日からちとすぐれませぬので、今醫
者様を呼びに参じたが、あなたも見てお貰ひなさんせんかいな 彌それはどうぞお頼み申
しやすてい」長りました(ト、勝手へ立つて行く、彌次郎は頻に苦しがる様子に「喜どうだ
湯でも茶でも酒でも、飲みたくはねえか 彌馬鹿ア云ふな、アイタ、ハ、ハ、無上に腹がこ
ろ〜、鳴る、北八雪隠はごこにある、尋ねてくりや 喜お前何所に置いた、袂にでもね
えか 彌阿房つくせ、ナニ雪隠が袂にあるもんだ、ごこにあるか見てくりやと云ふことよ

七九

喜「ハアさうか、ドレ見てやらう、あつたく、アレ椽側の先におちてある彌「まだ吐しやがる、アイタ、ト、漸やうのことに立ち上り、用たしに行く、此うち宿の女勝手より出で」ハイお醫者様がお出でたわいな彌「サア、これへ」ト、此内近所の醫者の弟子と見えて焦茶の木綿紋付に黒縮緬のかたのひけたる羽織を引つ懸けたる坊様「エヘン、これは不順な天氣あひでござる、ドレお脈をト、北八の傍へ座り北八が脈を見ようとする」喜「イヤ私ではござりませぬいしや」ハテ達者な人の脈から見較べねば、病人の脈が分らんわいの、先貴様お見せなされト。北八が脈を取り暫く考へ」ハ、ア成程貴様は何とも無いやうぢや 喜「左様でござりますいしや」お食はごうぢや 喜「ハイ今朝程飯を三膳、汁を三杯食べましたいしや」さうである、平は大方一杯ぢやある、換へてはまゐるまい 喜「左様でござりますいしや」さうぢやある、此脈體では、何所も何とも無いやうぢや 喜「左様でござりますいしや」ナントよう當りましたらう、凡そ醫は意なりと申して、脈體をもつて勘考いたす所が第一でござる、氣遣ない、最早お暇いたさう 喜「モシ、病人を御覽じて下さりませいしや」ほんに、さうぢやあつた、私は變つた癖で、とかく病家へ參つても、病人の脈を見ることを、ごうも忘れてならんわいの、しかし見すとも知れたことぢやが、ついでに見てしんじよ病人はどれにござる 彌「ハイ、只今雪隠へ參つてをりま

す、コレ、彌次さん、お醫者様がござつた、早く出なせえ」ト、大きな聲をすれば彌次郎雪隠の中から「イヤまだ出られぬ、お醫者様、ごうぞこれへお出で下さりませ 喜「エ、滅相な、お醫者様が其所へ行かれるものか、無様なことを云ふ 彌「そんなら今出る」ト、漸う雪隠より出れば、醫者しかつべらしく彌次郎の脈を見て「ハ、ア貴公はコリヤ血の道ぢやわいの、兎角臨月などには起るものぢや 彌「イヤ私孕んだ覚えはござりませぬいしや」ナニ懐胎でない、ハテめんような、イヤコリヤわしが師匠が悪い、廣小路の伊賀越やから呼びにおこしたが、彼所の病人は産月ぢやさかい、大方血の道が起つたのぢやあるその積りで藥盛るがよいと、教へておこしたが、そりや貴公のことでは無かつたわいの喜「左様でござりませいしや、血の道は、この内儀のことでござりませう、此男はそれではござりませぬいしや」さよぢや、コリヤ私が間違ひぢやわいの、併し何なら貴様もそれにしておかんすと藥盛るにも一所にして面倒になうてよいがな 喜「成程コリヤお醫者様のおつしやる通り彌次さんお前も血の道にして置くがい、ね 彌「とんだことを云ふ、男に血の道があつてたまるものかいしや」イヤ、外の病氣も面白から、何も私が稽古の爲ぢや、一體貴様は何病ぢや 彌「私は先刻から蟲がかぶつてなりませぬいしや」大方ソリヤ腹のうちでかぶるぢやある 彌「ハイおつしやる通り、腹の外ではござりませぬいしや」さうぢやある、コレ

「女中、供の者に薬箱おこせと云うて下んせ」女「ハイ」
 畏りました、イヤもしお供の人は見えませんわいなし「見えんはづちや、連れて来んさかい、薬箱は私が持て来たわいの」ト、提げて来た風呂敷包を開き、薬箱を取り出す「女、オ、をかし、あなたは竹の匙で煮豆盛るやうにしてぢやわいな」喜「ハア聞えた、葺醫者様だから、そこで竹の匙をおつかひなさると見えた、そして貴方のお薬袋には、繪が描いてござりますが、どういたしたことでござりますねいし」イヤお尋ねて面目ないが、生得手習をいたしたことがないさかい「喜」ハ、アあなた無宿ぢやないし「左様々々皆目字が讀めぬむしくぢやさかい、それで斯様に薬の名を繪に描いて置きますぢやて」喜「これは面白い、左様なら、道成寺の繪はなんでござりますいし」コレハ桂枝ぢやて「喜」閻魔様は大方大黃でござりませうが、此の犬が火にあたつて居るのはいし「陳皮」喜「産婦の傍に小便してゐるは」知れたこと山梔子「喜」印判に毛のはえたはいし「半夏」喜「鬼が尻をひつて居るのはいし」それはキコク「喜」ハ、面白く時にお薬はいし「煎じ様常の如し、生薑は一剝お入れなさい」喜「山葵では悪うござりますか」彌「馬鹿ア云ふな、これは有難ござります」ト、此内何やら勝手の方俄かに騒がしく、人の足音どん／＼響き、亭主の聲として「コリヤ」おなべやい、取揚婆殿へ人を遣れ、ソレ久介は湯を沸せ、催生薬はあるか、早う早う」ト、騒ぎた

つうち、此方では又彌次郎が頻に腹痛みだして「アイタ、ハ、ハ、喜彌次さん。どうしたぞうしたいし」コリヤ堪らん／＼、病人の傍には居られぬ」ト、早々逃げ出して歸ると、勝手の方では、ヤレ取揚婆様のお出だど、下女のおなべが狼狽て婆の手を取り、之へ／＼と彌次郎が布圍被りて寝て居る所へ連れて来ると、とりあげば「これはしたり、寝て居さんしてはならんわいの、サア」起きやんせ／＼ト彌次郎を引きすり起せば、顔を擧めて「アイタ、ハ、ハ、辛抱さんせ、コレそこな人、菰はごうちやいな」彌「アイタ、ハ、ハ、」
 「そこぢや」ト、この婆も狼狽た上、一體眼が少し疎く、うちの産婦と間違へ、彌次郎が腰を引つ立て「サア」皆来せんかいな、コレ／＼こゝへ来て、誰れを腰を抱いて下んせ、さあ／＼早う／＼ト、急き立つるにぞ、北八は呆れ返りてをかしく、こりやごうしをる知らんと、さぼけ顔で、彌次郎が腰を抱いて引つ立れば「彌」コリヤ北八どうする、ア、痛え／＼ば「そないな氣の弱いことではならんわいな、ぐつといけませんいけません」彌「此處でいけんで堪るものか、雪隠へ行ってえ、放したく」ば「こゝかへ行ってはならんわいの」彌「それでも此處でいけむと、此處へ出るば」出るから、いけませんと云ふのぢやわいの、ソレウ、ンウ、ハ、ン／＼、そりやこそ、もう頭が出かけた」彌「アイタ、ハ、ハ、そりや兒では無え、それをそんなに引つ張らしやんな、ア、コレ痛え／＼」ト、

八四
 悶躁くをかまはずばとはぐいと引張れば、彌次郎腹を立て「エ、此はどあ奴(ト、横面を張り飛す、ばいあ呆てこの血違は(ト、武者振り着く、かゝる騒ぎの最中勝手の方には早女房の安産と見えて、赤子の泣く聲する)「おぎやア〜〜〜」ばば「そりやこそ生れた、イヤこゝちや無い、何處ぢやいな〜(ト、狼狽へ廻るうち、彌次郎も頻に痛み、雪隠へ走り込む、亭主は勝手より飛で来り)「コレ〜ばあ様先刻にから尋ねてをるに、もう生れたわいの、早う〜(ト、ばいあを引立てつれ行ば、勝手の方にはざんざんの聲)「めでたい〜」三國一の玉のやうな男の子が生れた(ト、喜びの聲、共に亭主にこ〜〜して立ち出で)「コレハお客様お喧しうござりませう、先づ私、妻も安産いたしました(ト、云ふうち、彌次郎も雪隠より出で「さて〜おめでたい、私も今雪隠で思入れ安産したらば、忘れた様に快くなりましていたいの」それは貴方もおめでたい、喜お互えにめでたい〜(ト、これより喜びの酒酌み交して、ばいとの間違やら、何やら彼やら嘶し合て、大笑ひとなりける。めでたし〜。

東海道中 膝栗毛五編追加終

東海道中 膝栗毛六編序

長いは〜此作者のながきこと、肢體は心と俱に長く、鼻の下は禪のさがりと等しく長し。酒のあとをひくことは行坐を飛脚に遣りたるよりも長く、借金をひきする事は、痲病やみたる牛の小便よりも長し。去るに仍て膝栗毛の尾に尾をひいて、長道中の今に歸らず漸く五編目に至つて伊勢路に筆をおくと雖も、例の長尻痺をさらして、京へ登るの趣向を考へ、下手の長話を六編とし、御見物が長喜世留の掃除し給ふ紙屑を賣出しても、固より爪の長き熊手性。長居はおそれも承知之助、ひとつ長屋の佐次兵衛とは、隣同士の彌次郎兵衛、せめて四國は廻らすとも、京大阪は巡たまへ、是だけの所御辛抱、御一覽のほど、ハイおたのみ申しますとしか云ふ。

維時文化丁卯春正月

十返舎一九識

附言并凡例

或人子に謂つて曰、此膝栗毛、追々足下の骨折見ゆれども、五編目伊勢琴宮迄にて、大かたは事足れり。夫れ花は半開に詠め、酒は微酔に飲むがよいと譬の通り、ものは十分ならざるを却て壯觀と心得べし。不肖は足下が最負ぢやから云ひますが、今年も六編を書いたといふことぢやが、よしにすればよいになア。足下が胸の奥行も、もう大概は知れてある此うへ掃き出さば鼠糞やら鼻かんだ紙やら、色々の穢い物引出して、はては人の鼻に袖襪はするの罪にあはん。予答へて曰く、趣向は塵芥のごとく、今日掃いて今日積る、胸中掃溜にひごしければ、狗の糞のしやれたるも南瓜の花のむだなるも、作者が智恵の肥料にして、葛西船に積むとも盡きす。そは御見物の最負組から、ここの塵も掃いたがよい、あそこも埃だらけぢやと、こちの氣のつかぬ所を致へて下さる岡目八目、すかさず是へと反古張團扇に受留めた、塵埃の中から趣向はさまぐ。既に五編目凡例にいへるが如く、彌次北八が髪月代をせし所なし。東都を立ちしより日數を経て、其事なきは如何にぞやと、或人の批したまひしことありしを、オットまかせとすぐさま追加妙見町泊の趣向とせし事御存知の通りなんでも人の懐をめてにする、そこが金ぢやと版許の慾心房が一つ穴の狐

化あらはした所が三文が智恵もない作者の鵬かくのごとし
 借又此書伊勢路より大和廻り御約束の所、一足飛に伏見から京大阪とやらかしたるは、和州名所巡覽の滑稽、其趣き珍しからず。こちつけ餘りくだしくしければ、此所縫上をせしうへ、ぐつと端折る。
 大和路より大阪へ出る道順なれども、予思ふことあれば、先づ花浴見物を前とし、大阪を後にす。
 京名所盡く記すに際限なければ、只祇園清水知恩院、大佛様御覽じたかえ、金閣寺拜見あらば、よい傳があるぞえと云つた位の事を記す。故に此次七編は、京都見物終り、千本通りより淀に出で、八幡山崎に參詣し、佐田守口の邊にて終る。

東海道中 膝栗毛六編卷之上

諺に云ふ旅の恥は書さ捨てゆく落書の國所は欄干にとまり、おのづから往來同國の人の目を慰め、被り行く、髯の笠印は、わざと己れひとりの心を悦ばしむるも、みな俱に驛路のわざくれ、相宿の木枕に結ぶ縁は出雲の帳外、二方荒神の隣同士は長家附合の外にして、其の心々に出る儘をしやべり、あくまでに喰掛取道づれにせざれば二十日の愁にあはず。米櫃背負て出でざれば鼠追ふ世話もなく、名にし負ふ東男も薩摩芋に髭を撫で、花まだき京女郎も團子のくしにつぶりをかき、しらぬ火のつくすたはけに駈落して走るあれば、雲井路の路草くふ遊山旅のゝろつくあり。並松の根に腰打かけて金毘羅参りの樽をひらき、街道の真中にひよぐり出して諸社順拜の鈴口をふる。霧中の有様まことに命の洗濯もの引ばり、股引草鞋に何國までも足にまかす雲水の樂み得も言はれず、こゝに東の都神田の八丁堀邊に住む彌次郎兵衛北八といへる二人づれの怠もの、神風や伊勢参宮より足曳のやまご路をまはり、青丹よし奈良街道を経て、山城の宇治にかゝり、こゝより都に赴んと急ぎけるほごに、やがて伏見の京ばしにいたりけるに、日も西に傾むき、往來の人足はやく、下り船の人を集むる船頭の聲々やかましく「サア〜今出る船ぢや、乗らんせんか、大阪

の八軒家舟ぢや、のてかん（乗つて行かん）せんかい 彌ハ、これが彼の淀川の夜船だな、ナントきた八、京からささへ見物する積りで来たが、いつそのこと、此舟に乗つて大阪からささへやらかさうか 喜「それもよからう、モシ乗合もありやすかせん」さうさかいの、乗るなら早う乗らんせ、いつきに（急に）出さかい、コレ〜、草鞋解いて乗らんせ、えらいへげたれぢやな 喜「エ、何をぬかしやアがる、氣の強え笹棒だ 彌「コレ北八、手めえの包みもいつしよにおれが風呂敷に包んで置かう 喜「船頭さん、コレヤア何處えすわるのだせん」そこな坊様のねきへ割込まんせ 彌「御免なせい、ヤアえいとな（ト二人ながら艫の間へわりこみすわる）のり合「コリヤえらう詰めくさつた、船頭さん、蒲團一つ貸さんせせん」ソレとらんせ、サア〜皆えいかいな、下にゐてくだんせ、苦茸くさかい あきん人「錢かひなされ、錢はよござりまするか 彌「昆布、砂糖餅〜 彌「燗酒よござりまするかいな、鹽梅よし〜」（ト此うち船頭共舟に苦を嘗いてしまひ棹さし出して）うた「ふねは追風に帆かけて走り、われはこがれて身をあはせる、ソウレ、ソレ〜〜なんぞい、コリヤ、えらう空がわるなつた、ふろ（降る）かしらんわいのり合「船頭さんゆうべはちうじやう島ぢやあろ、精進が悪いさかい、コリヤ雨ぢやあろぞいの、ハ、ハ、ハ、時にごなたもじよらかいて（平座）あなさらんか、今の内あんぢよう（味能く）せんと、後に工合がわる成るさかい、

京の人「コレおまい、ちと退いてかさんせ。粽の上にいしかつてぢやわいな 大阪の人「コリヤ不調法、とかく乗合はお互に何ぢやろと不肖してくれなされ 京「よいわいな、おまい大阪は何處ぢやいな 大阪「わしや道頓堀 京「かいな、ごさん堀のしゆは、皆塾子ぢや、ナントこゝで何なと一つやりなさらんかいな 長崎の人「コリヤよかたい、船中のねぶり目ざましに、おんた(彼方)衆一つツツ藝能やらしやつたらよかたい、うんごもは長崎のもんぢやが、能毛川島のぼうぶら(南瓜)まくらてかみさし(舞)ぼつきりでもやらうばいよウ 越後の人「コリヤ、えいことんし、わしごもはいちご(越後)のもんだが、長崎のおんにやさ(兄)がやらしやつたう、わしも國風のおけさ松坂でもかたるべいしこと 京「こいつは面白え、マア長崎のお客から始めなせえ 長き人「よかく、これしこやらうばい (トむしやうに手をうけたゝき) うた「おまへよかはた、わしよ振り捨てゝ、よんによしやんす(大分色女)と契らんす、コリヤごんく(蛙)が飛ぶなら桶かぶせ、それでも飛ぶならさねおけく、コリヤく、なんぢやいな のり合「イヨくえらでけぢや 越後の人「わしごもやるべい、みんなそれからトコトンくど嘶してくれさつしやい 長き「よかく合點あらう (のり合皆々手を打たゝき) トコトンく (あちごうた) 「お長よつばらんかんだ(良久)まへでたかおちよな(のり合みなく) 「トコトンく (あちごうた) 「にがた(新潟)一ばんするぎゆ(水牛)の櫛を

のり合「トコトンく (あちごうた) 「にし(主)にさつくれべいと六百文で求めたのり合「トコトンく 彌「ハ、面白えく 京「イヤ江戸のお客に何ぞ所望しよぢやないかい 彌「ソリヤもう琴三絃鼓弓なんでもちつとぶはやりやすが、こゝにやアそんなものはねえから、はじめらねえ 京「おまいの口跡では聲色が出るぢやある、誰など江戸役者やりなされ 彌「聲色も二十や三十ばかりは遣ひやすが、誰にしよう、源之助か、三津五郎か、イヤ高麗屋にしやせう、併し江戸役者はおめえ方にやア分らねえから、つまらねえ大阪「ハテえいわいの、一つやりなされ 彌「手前味噌ぢやアねえが、聲色は江戸でも一番といふ男さ、誰でもうしろを唄ふ人があると、すつぱりやつて見せるがなア 京「うしろを唄ふとは呼出しのことかいな、わし、やろわい、口三味線ぢや、チ、ツンチンシャンラ「これはお江戸の堺町や、葺屋町に名も高き役者聲色はごうぢやいな、誰れぢやいな 松本の泰四郎でせい、チ、チ、チンのり合「イヨ松もどウ 彌「まんまと奪ひ取つた此一巻、是さへあれやア出世の手が、大願成就かたじげない 京「コリヤやくたいぢや、わしや江戸に五六年居て此間戻つたわいな、高麗屋はそない(其様)な口跡ぢやないもせんもの 大阪「あし一つやろわいわいの 京「うた「是はねつからでけませぬ、さて又つぎの役者名は誰ぢやいな 大「やつぱり今のぢや (ト此大阪ものは江戸にも居て聲色もまんざらでなければ、わざと文句もその儘にいふ)

んまど奪ひ取つた此一巻、これさへあれやア出世の手が、り大願成就かたじけない、トハ無調法のり合「イヨ高麗屋ア 京」コリヤきよとい、大阪のお方がほんまぢや、おまへのは高麗屋とは聞えんわいな 彌「聞えん筈だ、コレヤア信州松本の者で、幸四郎が弟子の 洞四郎が聲色だ 京」そんなこつちやあろぞいな、ハ、ハ、ハ、(ト舟中彌次郎のへこんだのを可笑しが、ごつと笑ふ。彌次はしよげてだんまり。此内舟は、や淀を過ぎて) 彌「とき
に北八、とんだことを忘れた、舟に乗る前に小便すればよかつたものを、例の通り舟では
どうもあぶなくて爲にくい、困つたものだ、コレ船頭さん、ちよつくり船を着けて貰ひて
えの せんどう」あがるのかいな 彌「小便」 せんどう「エ、舷へちよつくりこなつて、ひよぐら
んせ」 彌「それが出来れやア言ひ分はねえ、ア、もう」出さうになつて來た(トうろ
くする、此彌次郎きた八艘の間と洞の間と居たるが、洞の間三人前借り切にし
て、十二三の前髪連れたる隠居らしきぢい様、宵より彌次郎きた八と咄しなごしてゐたり
けるが、先刻より蒲團かふりて寝ころびながら)いんきよ「モシ」 おまい小便にお困りなら
ぶしつけながら、わしが搜瓶貸してあぎよかいな、コレ」長松よ、イヤこいつ、も
う寝くさつたさうぢや、モシそこらにあるぞいの、だんない、そつちへ持てかんせ 彌「そ
れは有難うござりやす(ト暗がりまざれに隣を探りまはせば、箱火鉢のうしろに一つの土

瓶あり。上方にては、これをきびしよと云ふ、今江戸にもたまさか見えたり。彌次郎此を
搜瓶と心得、とりだして「ハア此處にござりやした、こいつは尋常な搜瓶だはえ(ト持
つ手の所を口と心得、前にあてがへども、穴なければ、さては口にこめてある栓が奥の方
へひつこんだものであらうと、指を入れてつゝき廻すうち、しきりに小便がもるやうにな
り、心はせく、蓋の落ちたを幸、ハ、アこゝにも口が有ると、上の方からシウ」と小便
をしてしまひ)「ハイ有難うございやした(ト隣へそつとやつておく。隠居やがて起き直り)
(コリヤえらう寒なつた、長松起きて火イともさんかい、酒なごやろわい、コレ目イさまさ
んか、コリヤやくたいぢや(ト、そこら探り廻して、火鉢の火をつけ木にうつし、小
提灯をともして、船梁にぶらさげ、きびしよをとつて)「ヤア、コリヤ何ぢやい、ハ、ア、
茶をたくつもりで、水かな入れておきをつたさうぢや(トいひつゝ、苦の間からきびしよ
を出し、彌次郎がしこんだ小便を川の中へうちあけてしまひ、すぐに樽の酒をあけて、か
の火鉢の上に加ねながらいんきよ「モシ江戸のお客、酒一口ごうぢやいな 京」コレハお嗜み
でございます いんきよ」もう出來たさうぢや(ト菜籠の煮しめなど出し、隠居盃に少し注い
で)「ドレお燗見ましょかい、イヤこれはけたいな香がする、ベツ」コリヤ酒がわる
なつたのか、よもやそぢやあろまい、一つおまい飲んで見てくだんせ(ト北八へ盃をさす)

彌「ハイこれは、オト、(ト引うけてぐつと飲んでしまひしが、何とやら蒸ばゆきやうにて、變な匂のする酒だと、心に思ひながら、胸をわるくして撫でさすりく)」「ハイ頂きやした いんきよ」お連のお方へあげてくだんせ 彌「そんなら彌次さん、(ト盃をまはす。彌次郎は先刻よりこれを見て不思議に思ひ、なんでもあれはおれが小便をした洩瓶だが、それ酒の畑をするといふはどうしたものだ、但しはおれが兎相で洩瓶と思つて小便したのか、何にしても、とんだことをしたと心のうちに二人が顔をしかめるを見て可笑しさこらへられず。それと知らずに、あの内の酒を北八が飲みたるをふき出すほど可笑しくちつとこらへ居たりし所へ北八盃をさしければ 彌「イヤおらア御免だ、なぜか今宵は酒が飲みたくねえ、お盃ばかり、ハイそれへあげませういん」あがらんのかいな 彌「ナニあびる位さ、彌次さんなせ飲まねえ、酒といふと一番に咽をぐいぐいするおめえが、コレヤア何でも變ちきだはいん」ハ、アきこえた事があるわいの、今そつちやのお方が暗がりて洩瓶と間違へて、このなかへ小用しこみやさんせんかいの、どうも小用臭いと思うたが、コレヤおまいそちやさかい、飲まんのおちやあるぞいな 彌「ソリヤ知れやせん桑名の渡しでも、此人が船の中で小便して大騒ぎをやりました、その位の兎相はしかねん人さ、エ、きたねえ、ゲエイ〜い」道理こそきびしよに何か一杯あると思うたが、わしや又此わい(童め

が水入れて置きをつたと思つて、川へほつたが、どうでも小川のおごもりが残つてあつたものちやあるぞい 彌「とんだこつた、胸がむか〜するい」ア、こりや、ゲエイ〜、長松よ、背中叩いてたも、ア、むさやの、ゲエイ〜 彌「これはお氣の毒な、モシ何ぞ薬でもあがりやし、然し小便のあたつたには何がよからうしらん、モシ〜なごたぞ丸薬でも御所持なら少し下さいましたのり」ハイどうも小便のあたつたによい薬は持ちませんわい 彌「ソレヤア困つたものだ 彌「彌次さん苦をらつとまくつてくんな 彌「どうする 彌「小便を 彌「するのさ 彌「吐くのだけはな 彌「ドレ舷へぐつと顔を出してやらツし、おれがつかまへてゐてやろう、ソレよしか、シイ引〜、どうだ未だか、エ、川の中だから犬が居ねえでわりい 彌「ナゼ、犬が居るといふする 彌「てめえ小便をはくのに、白コイ〜〜〜と叫んでやるは 彌「エ、馬鹿アつくす、ゲエイ〜 (ト此内隠居はやうやうに吐いてしまひ、川の水にうがひし、口を洗ひて)「どうちや、そつちやのお方えいかいの 彌「どうやらかうやらよくなりやした(トくちをろゞぎてまじめな顔、彌次郎は心の中に可笑しさを隠して居る。隠居結構人と見えて格別腹も立てずいんイヤモウお互にござらい目に逢うたこつちや、口直しにあとの酒やりたいが、畑をするものが無うなつた、どうせうぞいの長まつとしたら、こつちやにあるほんまの洩瓶で酒の畑いたしましよかいん」ホンニさう

ちや、ほんまの渡瓶の方が綺麗ちや、藤の森で今日買うて来た儘で、また一度も小用せん
 さかい、それで畑せうわい 喜めつさうな、あやまりやすね 馬鹿アいふな、茶は土瓶
 の茶がうまし、酒の畑は渡瓶の事だは 喜ナニ渡瓶の酒が飲めるものか 喜「そんならモシ
 御隠居様やつぱり今のきびしよとやらになさいませいん」きびしよは川へはつたはいの、渡
 瓶の方が新しいさかい、きれいちやはいの（ト樽の酒を渡瓶にあげて火鉢の上にかけて）
 いんきよ「長松そこの茶碗おこせ、サア」ほんまの酒ぢや、ソレおまい方さそかい（ト茶碗
 を差出す彌次郎ちやつと引とり「頂きやせうい」むしのえいお人ぢや、肴あぎよかい、煎
 亮あがるかいな 喜「ハイ」これはなんでござりやすいん「ソリヤ鯨の油取つたあどの身ぢ
 やさかい、煎がらと云ふわいな 喜いゝものでございやすね、サア北八さうか（ト北八
 へ茶碗を廻し、渡瓶をとりてつぐ。新しき渡瓶を聞きて、なるほど大事もあるまいと、一
 杯ひきうけてぐつと飲んでしまひ） 喜「小便のらぬ混らぬ酒はまた格別だ、ハイあげやせ
 うかい」皆乗合のお乗へ一つづゝあげてくだんせ 喜「さやうならお隣の（ト次に居た越後
 の人にさす） 喜「ヤレふとつ頂くべいとこと（ト茶碗をさる。北八しびんから注ぎにかゝ
 る） 喜「ソリヤ小便のする、やきたごちやアござらないか 喜「ナニ、この渡瓶は新しいから
 綺麗さ（トついでやればぐつとほして） 喜「ア、え、ことんし、サア長崎のあんじや（兄貴）

さ、やらつしやるか（ト茶碗を廻せば長崎の人うけて）「ナイコリヤ、氣のどんくうなこと
 ばよウいん」だんくそつちやのお方へあげてくだんせ 長「しから、あんたへさんじますた
 い（トそのつぎの人へさす。是は病人と見えて、色の蒼さめたる垢だらけの男、襟に綿を
 巻きて、蒲團によりかゝり、尤も四人前ばかり借り切にして介抱のおやちと二人連れにて
 居たるが商人「わしや酒はいかんさかい、こなん一つ頂かんせ（ト供のおやちに譲る。先刻
 より渡瓶のきれいな事も聞き居たる事なれば、一向構はず） 喜「モシ」憚りながら
 その渡瓶こつちやへくだんせ、手酌にやりましょかい（ト此おやち酒好きと見えてついで
 て二杯やらかし、だんく茶碗をもとへ送り返せば、彌次郎兵衛取次ぎて） 喜「サア隠居
 様あげませういん」イヤおまい一つ飲んでおこさんせ 喜「ハイ」左様なら、モシそのしび
 んこちらへ、病人の所のやおぢ「ハイ」それへ（トしびんを送り戻す。北八取つて、彌次郎へ
 なみくそついでやる。彌次一息にぐつと飲んでちやわんを投げだし） 喜「エ、、、こり
 やとんだこつた、ゲエイ」 喜「彌次さんどうした 喜「どうした所か、コリヤ酒ぢやアね
 え、小便だく」おやち「ハ、アこれははしたり、危相しました、わしらがとこの御病人の渡瓶
 と取りかへました、サア」酒のは此處にある、ソレ取り換へてくだんせ 喜「ハ、、、こ
 いつ大出来」 喜「エ、もうどうしたらよからう、此位なら己が小便を飲むはまだしも、

アノ病人めがエ、わる臭い、ゲエイ〜、ベツ〜、喜ハ、あの病人の顔を見な、瘡と見えてあたまから首筋のあたりまでく〜、**彌**エ、もう言つてくれるな。咽が裂けるやうだ、ア、苦しい、ゲエイ〜、**喜**兎角おめえは小便が祟る、船ではもう禁便にするが、そこで一首浮かんだが、どうだ〜、

小便を人に飲ませしその報いおのれも飲んでよいきびしよなり

此騒動に船中おの〜ねぶりをさまし、大笑ひとなるうち、船は早ひらかたといへる所近くになりたるを見、商ひ船此處に漕ぎ寄せ〜、**商人**「飯くらはんかい、酒飲まんかい、サア〜みな起きくされ、ようふさる奴らぢやな（ト此船につけて遠慮なく苦ひきひろげ、わめきたつる。このあきなひ船は、もの言ひがさつにいふを、名物とすること、人の知るところなり。賣言葉に買言葉なれば）のり合「コリヤ飯持てうせ、えい酒があるかい、喜いか様腹がへつた、爰へも飯を頼みます商人」われも飯くふか、ソレくらへ、そつちやのわるはごうぢやいやい、ひもじさうな面してけつかるが、錢無いかい、**彌**「イヤこの籠棒めら何をふささやアがるのり合」この汁はもむ（味）ないかはり、ねからぬるうていかんわい、**商**「ぬるかア水まはしてくらひをれのり合」何ぬかすぞい、そして此芋も牛蒡も腐つてけつかる**商**「その箸ぢや、えい所は皆うちで焚いて食てしもうたわい、長きの人」イヤこやつふとう（大膽）

な奴よウ、いかなちうつるばつてん（ドウシタモノヂヤ）その吐しやうばい〜「づくにうにやして（天窓打つて）やつくれべいか、**商**「猪口才ぬかさずと、早う錢おこせやい、コレをこなおやぢ、錢ごうぢやいおやぢ」このがんどう（奸盜）めらは、たつた今とりくさつて、コリヤ早う往ねやい、さだめしおぢれがげんさい（女房）は、晝は袖乞して生米かな食らふさかい、今頃はぶつ〜と腹ふくらして、白い泡吹いてるよぞいあきんど「オ、われがうちは、大かた四條の蒲鉾ぢやある、雨が降りさうぢや、水の出んさき、早う往にくされ、**彌**「イヤこいつらア、言はせて置きやア途方もねえ奴等だ、横ッ面アはり飛ばすぞのり合」コレ〜おまい腹立てさんすな、アリヤこゝの商ひ船は、あないに物をぞんざいに云ふのが名物ぢやわいの、**彌**「それだどつてあんまりな、**商**「ワイ、あほうよ〜」（トこぎ出して行く）

彌「コリヤ待ちアがれ、あほうとア、だれがこつた（トひとり〜きんで思はずたちあがる拍子に、のり合の膝をふんでごつさりこける）まちこの人「あいた〜、コリヤわしがぶしやかぶ（膝頭）踏んだ、長うんどもがべん（額）ふう、よんによう（大分）打つた、アイタ、〜、**彌**「コリヤ御免なせえ（トやう〜にすわる）かくて船はひらかた過ぎたる頃、雨催ひの空俄に暗くなり降り出し、あはやと見る間に篠をつく大雨となり、苦を漏れば、乗合は上を下へと騒ぎたち、船頭もかくては働き自由ならず、やがて堤に船を漕ぎ寄せ、しばらく

かゝりて見合せけるが、こゝは伏見と大阪の半途にして、登り船も下り船も皆落合ひ混雑し、がたひしと岸によりて、今やと霧を待ち居たるに、およそ一時餘り過ぎたるとおぼしき頃、漸く雨やみ雲きれて、月の影八幡山にさし出でたるに、船中おのゝ勇みたち、彌次郎北八も苦ひきあけ、顔さし出して此景色を眺め居たるが、彌ハアもう何時だらうな、ときに北八、又困つたことがあるはい、雪隠へ行きたくなつた、喜エ、きたねえ事はつかりいふ、彌「さうも船では出来ぬ、イヤ幸こゝにかゝつてゐるうち、ちよつくり土手へあがつてやらかしてこよう、喜「ホンニ、よその船でも、人が手水にあがる様子だ、早くさうしなせえ、イヤわつちもお相伴がしたくなつた、モシ船頭さん一寸あがつて來たいがい、かねえ、彌「用達しになら早う往てごんせ、わしらが今飯食てしもふと、いつき(直)に船を出すさかい、彌「草鞋は何處だ、喜「ナニサはだしであがらう、乗る時足をすゝげばいゝに(ト兩人船より堤にあがりて)彌「ナントいゝ景色だな、ごころでやらかさう、喜「オットそこは水溜りがある、もつとそちらへ、ア、なるほごいゝ月だ、

一刻を千金づゝの相場なら三十石のよご川の月

斯くちささみて思はず勝景に見され居たるが、このうち岸にかゝりたりし船ども、追々漕き出す様子に、北八彌次が乗りたる船も、今出ると見えて、船頭ども舳ひ綱を解き、

棹さしのべて二人を呼びたつるに、仙れの船にも、乗合の内、土手にあがりたるものごもいちごきにおりたち混雑し、彌次郎北八、やうゝのことに人をおし分け飛乗りたる大坂八軒家の登り船なり(此二人あまり船頭に呼び立てられ、大きに狼狽へ、今まで乗つて來りし伏見の船と心得、その次にならびてかゝりたりし大阪の登り船にとびのりたるが苦の内暗く、間違ひたる船とも心付かず。殊更此船にも乗合のうち堤にのぼりたる者も三人あれば、それかと思ひて、船中にも互に顔もかたちも知れざれば、これを咎むる者もなく、そのうち船は出るに任せ、おのゝ背より話し疲れたるにや、おし合ひへし合ひ、互に足をやりちがひとなし臥したりけるが、彌次郎北八も暗がり紛れ、其處ら探り廻して手ざはりよく似たればとて、人の風呂敷包みをわが包みと心得、引よせて直にそれを枕として打臥し、それよりは前後も知らず高軒なり(さるほごに船は右に棹し左に綱引き登るに、はやくも八幡山崎を後になし、淀堤を打過ぎ、夜も明け近くなりたる頃、伏見にこそは着きたりける。苦漏る影も白く、鳥の聲告げ渡るに、船着きたりと乗合皆々目をさまし立騒げば、北八次彌次郎苦打開きて笠風呂敷包を手に引さげ、船頭が歩み板渡すを打渡りて岸にのぼり、船宿に至るに、乗合の人々ついで爰に來るを見れば、見知りたる顔一人もなし。是は不思議とそこらうろゝ見廻ながら、彌「ナント北八、おいらに酒を飲ませた隠

居ごのはどうしたの 喜「さればの、そしてアノ長崎者や越後道者ごもは来さうなものだが
 大方爰へ寄らずにいつたに見える、おいらはゆるりと爰で支度して出かけようさ(ト、もと
 の伏見に着いたこと一向に気が付かず、船宿の女)「ごなたもお支度あげよかいな 彌「オイ
 爰へ二膳頼みます 女「ハイ(ト、焚きたての飯に入はい豆腐の平をつけて持つて来る。
 これは伏見の船宿のおさだまり也。此兩人はじめてなれば、こんなことは知らず、元より
 大阪へ着いた事とはかり心得、平氣にて)彌「けふは斯致す、是から長町の分銅河内屋とや
 らいふ宿屋へいつて、あれも大和の初瀬が茶屋でよこした書付の所だから、あそこへ泊つ
 て、すぐに芝居でも見ようぢやアねえか 喜「おいらアまた新町とやらを早く見てえ 彌「オ
 、それもまんざらでねえの、ア、アツ、、、、こうてきに熱い汁だ、ベツ(ト、此傍
 にも船あがりの三四人連れ同じく仕度をしながら)「太兵衛さん、おまい虎屋の饅頭はどう
 したぞいの 太「六兵衛さん聞かんせ、けたいなこつちや、きのふわざ(ト、あこ(彼所)へ
 いてこう(買)て来て、とんと大佛屋に忘れたわいのつれ(ト、ついで一走りいて取てこんせ、茲か
 らわづか十里ほかないもせんもの 太「ハ、、、、さういうてもくれんがよい、ハ、、、、
 (此咄を聞いて彌次不思議さうに)「モシあなた方が今云なされた虎屋といふは、たしか大ぶ
 つでございやすね 太「さよぢやわいの 彌「その虎屋のまんぢう忘れたとおつしやつた大佛

屋とやらは何處でございやす 太「コリヤ新町橋西詰を南へいくとこぢやわいの 彌「その新
 町橋南へいく所迄は、爰からいくらほどございやすね 太「こゝからは十里ぢやわいの 彌「は
 てな大阪は思ひの外広い所だ、ノウ北八 喜「ナニサ、いゝかげんに聞いてゐなせえ、わつ
 ちらをひやかすのだけはな、爰から十里有つてたまるものか、途方もねえ 太「イヤおまい、
 此處を何處ぢやと思つてぢや、こゝは伏見の京橋ぢやがな 彌「ナニ伏見だ、コリヤ北八が
 いふ通り貴様達やア人をはぐらかすな、おいらアゆうべ伏見から船に乗つて来たのだけはな
 喜「何云はんすやら、桃山のけつね(狐)にかな、つまゝれたもんぢやあるぞい、みなこち
 退いてゐやんせ 喜「のいて居るもすさまじい、そしておいらを狐憑とアなんのこつた、江
 戸つ子だぞ、つがもねえ(トいさくさなれば、此大阪ものつれと見えて二三人駆け来り)
 「なんぢやいゝ、何せりあうてぢや、そんな事より、こちやとえらい目に逢うたわいの、
 こつとら包を船で失うたさかい、いんまのさきまで、そのせいらくしてをつたが、ねか
 らはから知れんわいの(トいふうち一人 彌次郎の傍にある包を見つけ)「イヤ權介さん、
 あこにあるわいの、そぢやさかい、わしがいふまいことか、さきへあがつた衆を問うて見
 やんせと云うたぢやないかい(ト「ホンニこれぢやわいな(ト取りにかゝれば彌次郎ちやど
 ひかへて)「コリヤ何ひろぐ、此包みはおいらがのだけは(ト「ナニぬかしくさる、おどれら、

やばなこと働さくさるな、コリヤ見い、風呂敷の端に名が書いてあるい（ト云はれて彌次郎びつくりし、よく見れば自分の包でなし。きもをつぶして）彌（ホンニコリヤ間違つた、コレ戻すぞ、おいらがのは何處にあるごん）あんだらつくせ、ナニおそれらが包みを誰が知るぞい 彌「こいつは詰らねえ北八どうした 喜「おめえおれがのも取つて一所に包んでるばに置いたぢやアねえか、どうしておいらが知るものだ 彌「ハテめいような、モシいよ（こゝは伏見に違ねえかね みなく）ハ、ハ、ハ、何ぬかしくさるやら、アノ面見やんせ、けたいな面ちやな 喜「イヤこいつらは太え奴等だごん「太いも細いもいるこつちやないわい、たかでおそれらア好盗ちや、つゝみに別條無さかい、ゆるしてこます、とつと出て往にくされ 彌「コレヤアさんだ目に逢ふが、さつぱりわからぬ、北八どうしたのだらう 喜「さればわつちも分らぬ、全體ゆうべは何日だつけ 彌「ム、かうと、ゆうべあの時分に月が出たから、大方廿四五日あたりだ 喜「今月は太か小か、きのふは何の日だねえ 彌「されば、かうと、此間ソレ何處でか泊つた時、甲子だと云つたぢやアねえか 喜「ソレ／＼あの茶飯はうまかつた 彌「ひらの牛券の大きさ、あいつは珍らしい みなく「ワハ、ハ、ハ、コリヤどうでも、てきらは本氣ぢやないわい、ワハ、ハ、ハ、（ト腹筋をよつて大笑する。この中では年ばいの太兵衛暫く考へて）ハ、ア聞えたことかあるわいの、成程餘り賢うも見えんわ

ろ達ちやさかい、人の物手まへる（盆）ほどの働きはありやせんわい、コリヤかうぢや、コレ其處なわる達、ゆうべ伏見から乗らんして、途中で船のかゝつたとき、用たしにかな、堤へでもあがらんしたことがあるがな 彌「左様でござりやす 太「ソレ見やんせ、こつとらに乗つた船ぢも、あの時あがりをつた人が大分ありをつたが、やがて船が出るといふと、皆うろたへて乗りをつた、其時こなん達は下り船と上り船を取り違へて、めん／＼の乗つて来た船と心得、こちらの舟へ乗らんしたものでかなあろぞい 喜「ホンニ左様でござりやせう、わつちらも船に乗つた時は、暗がりではあるし、取り違へたことは知らず、どうやら居所も違つた様でございやしたが、乗合の事だから、まゝのかはと、それなりに草臥れ紛れにツイ寝てしまひやして、今朝此處へ来て見りや、乗合の衆のうちに見知つた顔が一つもねえは不思議なことだと云つてゐやしたのさ 彌「さう云へば成程今のさき船のあがり場で、ハテ見たやうな所だと思ひやしたが、見た筈だ、やつぱり初手の伏見だもの、ハ、ハ、ハ、畢竟それ故おまへ方の包みを、わつちらがのだと思つて倉相致しやした 喜「これで物がさつぱり分つた 彌「イヤ分ることア分つたが、おいらが包みはどうしたらう 太「それも分つてあるわいな、おまい方の乗らした下り船に包みばかり残つて、今頃は大阪の八軒屋に風呂敷包みがうろ／＼とおまい方を尋ねてゐよぞいな、ハ、ハ、ハ、喜「さんだ目に逢つ

た、いめえましい 彌「まよ、どうするもんだ、金 胴巻に入れて持つてゐるから、たか
い包は手めえとおれが着代ばかりだ、うつちやつてしまへ、そこらは江戸つ子だは(ト借
しけれども詮方なく、これから又船に乗つて、大坂へ尋ねに行くも、馬鹿々々しいと、す
ぐに京へ行くつもりに相談さめて立ち出づれば、この人々もそれ／＼にこゝを立ち出でけ
るに、北八彌次郎氣抜けのした顔付にて、ぶらり／＼と京街道にさしかり、

伏見出て淀の車か又あとへまはりまはつて來たは何事

それより伏見の町を打過ぎ、墨染といへる所にさしかりけるが、爰は少しの遊所ありて
軒毎に長簾懸け渡したるうちより、顔のみ雪の如く白く、青梅の布子に黒天鷲絨の半襟ま
で白紛べた／＼つけたる女走り出で、彌次郎が袖をとらへ「もしな這入りなされ、ちよと
遊びんかいな 彌「なんだ、よせえ／＼(トふり切れば又北八をとらへ) 女「おまいさんどう
ぢやいな 喜「かうぢやいな(トベツかこうする) 女「オ、すかん、こちや厭いな 喜「厭いな
の三郎義秀でも、泊らんのだ、エ、放しやアがれ 女「オ、こは(トおつばなして内へ這入
る) 喜「ハ、アこゝがあとで聞いた墨染だな、

すみぞめのおやまのかほの眞白さは石灰藏のねすみごろもか

深草の里は家毎に焼物、土細工を商ふ見ゆれば、

やきもの、牛の細工に買ふ人も涎たらして見とれこそすれ
かくて藤の森に至りけるに、

稻荷山松のふぐりにかゝれるはふごしのさがり藤のもりかな

こゝに稻荷の社を伏し拜みつゝ、喜「ナントそこらで一ツぶくやらうぢやアねえか 彌「よか
らう／＼(ト段簾たて懸けたる茶店にはいりて彌次郎)「オヤ甘酒があるの、婆あさん一杯
くんばば「ハイ／＼、温うしてあぎよわいな 彌「コウ彌次さん、こゝの婆あさんがおめえ
に氣があると見えて、アレこつちばかり見てをかきな目つきをすらア 彌「馬鹿アいへ、婆
あさんどうだ、早く／＼くんばば「まちつと待つておくれんかいな(トいひつゝ、此婆彌次郎の
顔を見ては泣き、見ては泣きする故、不思議に思ひ) 彌「婆あさんどうぞしたか、おめえ
目が悪いのかねばば「わしやおまいの顔を見ていから悲しうてならんわいな 陸「ソリヤどう
してばば「ワアイ／＼ 喜「こいつは可笑しい、婆あさん何が悲しいばば「わしや此間一人の息
子を失うたが、その息子にアノお方が似たとこそいへ／＼ 彌「ハアおいらに似たと見え、
それぢやおめえの息子もいゝ男であつたらうに、惜しい事をしたばば「ソレそのどうまん聲
のものいひから、おまいの様にやつとあらい、痘痕があつて、色が黒うて、鼻は獅子鼻と
やらで、目のいつかい所までが、其ま／＼ぢやわいな／＼ 彌「それぢやア、わつちが顔のわ

るい所ばかりが能く似たの、喜わるい所ばかりも氣がつえ、いゝ所は一つもねえもせんものをばど、そればかりぢやないわいの、アノ片小鬘の禿げさんしたま所で、あないにも似るものかいな、彌人の顔の棚卸しが濟んだら、その醜を早く、んな、「ほんに忘れたわいな（ト茶椀二つにあまざけを酌んでさしいだす。二人ながらこれをのんで）喜「どうぎに薄い醜だばど」薄うも成りましたぢやある、わしや悲しうてツイ涙をその中へ落したわいな、彌エ、とんだことを、涙ばかりならまだしも、見れやアおめえ水鼻を垂らしてゐるが、それも此中へ落ちやせんかねばど」わしや見なさる通り三ツ口ぢやさかい、鼻水と涎を一つに其中へ落したわいな、喜エ、ソリヤ情ないことをいふ、こいつはもうのめぬ、彌「おらアついのでしまつた、いめえましい、サアいかう、喜婆アさんいくらだばど」ハイ六文ヅ、下んせ、喜水鼻はおまけたの、アイお世話、ペツ（トこゝをたち出てふりかへりながら）

線言に涙をませて水ばなもすゝり込んだるうばが甘酒

かくて二人は足に任せて辿り行くほごに、だんく都江くなりて、往來殊に賑しく、人の風俗も自然と温順にして、しかも衣装は花やぎたる女のよそほひに、うつゝ抜かして見とれ行くうち、早くも大佛前に至りて、喜「オヤ、どうせえなお寺だ、アレ山門の上から佛

東海中道 膝栗毛六編卷之上 終

様が覗いてゐる、彌「ハ、アこれがかの大佛だはえ、成程話しに聞いたよりは、どうてきたものだ、そしてこの石を見や、えらいく

大佛の御堂は雲に入るとかやこれは大きなものゝ天上

かくよみて山門のうちに入り、やがて御堂にのぼりける。

東海道中 膝栗毛六編卷之下

大佛殿方廣寺本尊は盧舍那佛の座像、御丈六丈三尺、堂は西向にして、東西廿七間、南北は四十五間あり。彌次郎きた八こゝに法施し奉りて、彌ナント話に聞いたよりか、ごうてきなもんぢやアねえか、アノかうしてござるお手のひらへ、疊が八疊敷かるげな、喜狸の金玉と同じことだな、彌「勿體ねえことを云ふ、そして、アノお鼻の穴からは人が傘をさして出らるゝと、喜ソレヤアまだしも人がさして出るからいゝが、己がはうのぼうだら八が鼻の穴からは、瘡が自然にふき出したは、彌馬鹿ア云ふな、お後へ廻つて見よう、オヤお背中に窓が開いてゐらア、喜あれは大方、汐を吹く所だらう、彌ナニ鯨ぢやアあるめえし、喜「オヤ、アレ皆が柱の穴をくゞつてゐるは、彌ほんにこいつは奇妙、(ト此御堂の柱の下には丁度人のくゞるだけ切り抜き穴あり、田舎道者共戯れにこれをくゞり抜ける北八も同じく、いゝり)「コリヤ面白え、併し己等はくゞれるが、彌次さんは肥つてゐるから、抜けられめえ、彌おれだつて、ナニこれが(ト、北八を引き退け、四ツ這ひになつて、柱の穴へ體半分ほど這入りかけて、一向に抜けられず後へ戻らうとするに、脇指のつばが横腹に間へて痛み堪へられず、彌次郎顔を眞赤になし)「アイタ、、、、コリヤひよんな事

をした、喜「オヤどうした、抜けられねえか、彌「コレ手を引ツ張つてくりや、喜ハ、、、、こいつは可笑しい(ト、彌次郎が兩手をぐつと引ツ張る)「彌「アタ、、、、喜「弱い男だ、ちつと辛抱すればいゝ、彌後の方から足を引いてくれる、喜承知々々(ト、後へ廻り、兩の足を捕へ)「ヤアえんさア、彌「アイタ、喜ちつとこらへなせえ、餘程出かけたやうだ、ヤアえんさア、彌「ア、待つてくれ、腰骨が折れるやうだ、コリヤ矢張前の方から引出してくれ(ト、云ふ故、北八又前へ廻り、兩手を捕へて引く)「喜「ヤアえんさア、ソレ又此方へ餘程出て来た、彌「コリヤ堪らぬ、アイタ、、、、北八これではいかぬ、初手のやうに又後へ引き戻してくれ、喜「エ、色々なことを云ふ(ト、又後から足を捕へ)「ヤアえんさア、彌「待つて、、、、コリヤどうでも前の方から引いて貰はう、喜「エ、そんなに前へ廻つたり、後へ廻つたり、引き出しては引き戻し、何時までも果しがねえ、コリヤいゝ算段がある(ト傍に見てゐたりし參詣の人を頼みて)「喜「モシどうぞ此方からおめえ引ツ張つて下さいませ、私が彼方へ廻つて足を引き摺り出しますから、彌馬鹿ア云ふな、兩方から引ツ張つては出る瀬がねえ、喜「出る瀬がなくても、兩方から引ツ張ると、前へ廻つたり、うしろへ廻つたりする世話が無くていゝわな、參詣の人「イヤ兩方から、あさんの體を引き伸ばしたら、ツイ出られさうなもんぢやあるぞい、喜「コリヤいゝことがあ

る、酔を一升も買つて来て、彌次さんおめえに吞ませよう 彌「なぜ、酔を吞むと、どうする 喜「ハテ酔吞むと、瘦せると云ふことだからさんけいの人」ハ、、、、、そないなこと云うたて、今(いま)の間に合ふこつちやないさかい、斯(か)うさんせ、何處(どこ)ぞへ往(い)て、樋借(ついか)つて來(き)さんして、頭(かぶ)を後(あと)の方(かた)へ打ち込(こ)まんだがよいわいの 喜「成程(なるほど)こいつが早い理窟(りく)だ、併(しか)しそれで命(いのち)があるめえ參(ま)罷(ば)されば其處(そこ)はごうも請合(うけあ)はれんわいの(ト、此内田舎道者(このうちのかたがみちのち) 一人(ひとり)「コリヤハア氣(き)の毒(どく)なこんだアのし、私(わし)はハア遠國(とんこく)のもんだアから、あに(何(なに)も知り申(ま)さねえがふと(ひと)の難儀(なんぎ)さつせるこんだア、愚意(ぐい)のう云(い)つて見(み)ますべいか 喜「ごうがあの人の助(たす)かることがあるなら云(い)つて聞(き)かしてくんなせえ どうしや」ハアそれだアからのこんだアよ、何(なに)でもあのふと(ひと)の足の先(あし)きを切割(きり)つせえて、山椒粒(さんしょうつぶ)のう、はさまつせえたら、ふとりでに突(つ)ん抜(ぬ)けべいのし 喜「ハ、、、、、そりや蛇(へび)が女(おんな)に見(み)こんだ時(とき)の事(こと)だらう、ごうせそんなことであらうと思(おも)つたさんけい」コリヤ私(わし)が智恵借(ちゑか)そわいの、何(なん)ぢやると彼(かれ)さんの體(からだ)を和(や)かにして引(ひ)き出(だ)すがよかろさかい、斯(か)うさんせ、土砂(どしゃ)取(と)て來(き)てかけさんせいのゐな」すんだら、土砂(どしゃ)のウ打(う)つ懸(か)けすと、一番(いちばん)の桶(か)さア買(か)つて來(き)なさろ、手足(てあし)をちとべしおん曲(ま)げたら這入(はい)るべいのし 彌「エ、思(い)えましいことを云(い)ふ、無駄所(むだところ)ぢやアねえ、北八(きたやち)早く(はや)ごうぞしてくれぬか 喜「待ちなよ、ハ、アお前(まへ)脇指(わきさし)の鐔(つば)が横(よこ)ッ腹(はら)へこだはつて痛(いた)えのだ(ト、手を差

し入れてひねくり回(まわ)し、漸(おそ)う脇指(わきさし)を抜(ぬ)いて取る) 彌「如何様(いかさま)これでどうか寛(くろ)きがあるやうだ 喜「ドレ、イヤ、時(とき)にござなたぞ前(まへ)の方(かた)かう押(お)し出して下(くだ)さいませ、私(わし)が足(あし)を持つて此方(こちら)へ引(ひ)き出(だ)しますから、ヤアえんさア」(參詣(さんぎ)の人(ひと)「ソレ出(で)るわいの、まちつとぢや、いけまんせ」喜「ア、ウ、、、、、喜「ハ、、、、、出(で)る奴(やつ)がいけむから大笑(おほはな)ひだ 彌「ア、痛(いた)え」喜「締(し)めたぞ、えテヤア」ソリヤ出(で)たぞ」(ト、漸(おそ)うのことにて引(ひ)き出(だ)せば、彌次(やじ)郎(ら)大汗(あせ)を拭(ぬ)き」ほつと溜息(ためいき)をつきながら)「ヤレ」有難(ありがた)え、コリヤごなたも御苦勞(ごくろう)でございやすした、わつちやア伊勢(いせ)の泊(とまり)で産(う)をしやすしたが、産(う)むよりか生(な)れる身(み)は、體程(たいぢやう)せつねえ、コレ着物(きもの)が摺(すり)り切(き)れて肋骨(かたはね)が今(いま)にひり」する。

傘(かさ)さして出(で)るお鼻(はな)より柱(はしら)なる穴(あな)恐(おそ)ろしや身をすばめても

斯(か)く詠(よ)み興(きよう)じて大笑(おほはな)ひとなり、それより御境内(ごけいだい)をめぐり、蓮花(れんげ)王院(おういん)の三十三間堂(さんじさんかんだう)にて、

いや高さ五重(ごじゆう)の塔(た)にくらべて見(み)ん三十三間堂(さんじさんかんだう)の長さ(ながさ)を

これより、この御門前(ごもんぜん)を北(きた)へさして行(い)くに、往來(わうらい)殊(こと)に賑(にぎ)しく、げにも都(みやこ)の風俗(ふうぞく)は、男女共(なんにょとも)に何處(どこ)となく柔和(にやわ)温順(おんじゆん)にして、馬士(ばし)荷歩(にからち)持(もち)までも、洗濯布子(せんたくふこ)の粘強(ねりかた)きを、折(か)りめ高(たか)に着(き)なして、あのおしやいすことわいななど、なまめきたるも司笑(つか)しく、二人(ふたり)は興(きよう)に乗(の)り、殊(こと)に見(み)る物(もの)毎(ごと)に珍(めづ)らしと、通(た)り行(い)くうち、俄(にわか)に往來(わうらい)騒(さわ)ぎ立(た)ちて、老若(らうじやく)打(うち)交(か)り走(は)り行(い)く人(ひと)毎(ごと)に

「ホウホ、よい〜、えつこらさつさ、ホウホ、よい〜、えつこらさつさ、彌むしやうに人が駆けるは何だ、イヤ向うに何かあるさうで、凄まじい人だ、モシ〜何でございやすね 向うよりくる人」彼所にえらい争があるわいの 彌京の喧嘩も珍しからう (ト、足早に行きて見るに、見物山の如く、往來もならぬ位なるに、二人は人を押し分け、これを見れば、かの喧嘩の一人は肴屋と見えて、そこに盤臺など卸してあり、相手は職人體の男いづれも屈強の若者なり。されど都は人の心も悠長にして、喧嘩と見ゆれど、さのみ頭から叩き合ひもせず、日當のよき所に二人向ひ合ひて) さかなや「コレイノ、わが身の方から行き當りくさつて、そないなこと云ふもんぢやないわい、おのれのうてん(天窓)たや(打)いてこやそかい 相手職人」おきくされ、こなんが手の動くのに、こちやちつとしてゐやせんわい (ト云ひつゝ、手拭を丁寧に折りて鉢巻をする) さかなや「よう 願鳴らすわろぢやな、一體わりや(汝)何所の者ぢやい、しよく人」己かい、おりや堀川姉が小路下る所ぢやわい、さかなや「名は何と云ふぞい、しよく人」喜兵衛と云ふわい、さかなや「年齢は幾歳ぢや、しよく人」廿四ぢやわい、さかなや「おきくされ、おのれ廿四にしちや、わらう若い、嘘つきくさるな、しよく人」何云ふぞい、ほんまぢやわい、前厄で今年唄めを死なしたわい、さかなや「ソリヤえらい力おとしをつたぢやあろええい氣味晒したな、しよく人」イヤそればかりぢやない乳飲みくさる餓鬼奴があるさ

かい、えらい難儀な目に逢うたわい、さかなや「そぢやあろわい、己や汝に二つ上ぢやわい、しよく人」さう吐しくさりや、われも若い、家は何處ぢやぞい、さかなや「一條猪熊通東へ入る所ぢやわい、かいはいあこに盲目で目の見えん寸伯と云ふ針醫があるがな、さかなや「オ、針醫がありや、どうすりや、しよく人」イヤこちの一家ぢやさかい、おのれ去にくさるなら言傳してこまそ、さかなや「厭ぢやわい、何のわれが言傳、誰がいを(言)ぞい、えらい阿呆めぢやな見物の人缺伸しながな」十兵衛さん、もう去のかい、十兵衛「待たんせ、今に打ち合ふぢやあろ見物」イヤわしや家に客放つて置いて来たさかい、十兵衛「そしたら其お客連れてごんせ、序に薄縁など一枚くさんせんかい、(又此方の方にある見物、軒下につく這ひ毘を抜き〜)「見なされ、あつちやのわろが、どうしてもえらい奴ぢやわな見物」イヤこつちやの男もえらい願ぢやわい見物」ホンニその願で思ひ出した、お家はどうぢやいな、痛所はえいかいな見物」ハイお忝なうござります、さんと快いやうであつたがな、昨日からえらう悪なつて、ツイ昨宵死にしましたわいな見物」ソリヤおま御愁傷ぢやあろ、御葬禮は何時ぢやいな見物」今出しをります所ぢやあつたが、えらい喧嘩があると、人が走るさかい、私もツイ往て見て戻るほごに、それまで待てと云うて待たして置きましたわいの (ト、各氣の長い者ばかり、悠々と見物してゐると、かの職人の男)「コリヤヤイ、まちつと此方へ寄りくされ、日向が

無うなつて寒なつたさかい、オ、寄つたが、どうすりや、しよく人「おのれ今己がこ
 を阿呆とぬかしをつたが、何で己が阿呆ぢやぞい、さかなや「阿呆ぢやさかい、阿呆ぢやわい
 しよく人「何ぬかしくさる、さう云ふわれが阿呆ぢやわい、さかなや「イヤこちや阿呆ぢやない、
 賢ぢやわい、しよく人「われが賢なりや、己も賢い彌次、さかなや「オ、われも賢いか、そしたら
 此喧嘩止めにせうわい、しよく人「サアひよつと互にせり合うて、着物でも引き裂いたら損ぢ
 やさかい、止めにしてこまそうかい、さかなや「えらう遅なつた、もう去んでこまそしよく人「己
 もわれが去にくさる道ちや程に、連れ立つて去んでくりよわい、今日はえい天氣ぢやあつ
 たな、さかなや「暖うてえいわちやい、ト、互に挨拶して、この二人連れだちて歸る。見物も
 こそ〜と散り、く〜に皆歸りければ、ト次郎北八腹を抱へて、彌「ハ、、、成程上方者は
 氣が長い、あんな薄鈍い喧嘩が何處にあるもんだ、彌「あの中で、損徳を考へて止めにした
 から大笑ひだ。

公家衆のいます都はおのづから喧嘩やめるもうたとよみなり

斯く打ち馴じ、早くも清水坂に到るに、兩側の茶屋軒毎に煽ぎ立つる田樂の團扇の音、喧
 すきまで呼び立つる聲々「モシナお這入りなされ、茶々あがつてお出でんかいな「名物難
 波温飽あがらんかいな、お休みなされ〜、彌「何を食つてもいゝが、もつと先へ往つてか

らの事にしよう、ト、程なく清水寺に到り、境内をめぐり、音羽の瀧を見て

名にしおふ音羽の瀧のある故か上りつめたる清玄の戀

本堂は十一面千手觀世音なり。むかし沙門延鎮が夢中に得たる靈像にして、坂上田村麻呂
 の建立とぞ、北八彌次郎兵衛暫く此寶前に休みながら、

境内に植ゑし櫻は隙間なくとも澤山な千手觀音

傍の小高き所に机を控へたる老僧參詣を見かけて「常山觀世音の御影はこれから出ます
 ぞ、誠に、靈驗あらたなる事は、盲が物言ひ、啞の耳が聞え、歩いて來た甍が直る。一度
 拜する輩は、いかなる無病達者なりとも、忽ち西方極樂淨土へ救ひ取らんとすの御誓願ぢや、
 ごなたも戴いてお歸りなされ、冥加錢は澤山にお心持次第、御信心の方はござりませぬか
 な、彌「よく饒舌る坊主めだ、時に彌次さん、かの噂に聞いた傘をさして、飛ぶと云ふは此
 舞臺からだな、彌「昔から當寺へ立願の方は、佛に誓うて是から下へ飛ばれるが、怪我せん
 のが有難い所ぢやわいな、彌「爰から飛んだら、體が微塵になるだらう、彌「折々は飛ぶ人が
 ありやすかね、彌「さよちやわいな、えては氣の狂れたわる達が來て飛びをるがな、此間も
 若い女中が飛ばれたわいな、彌「ハア飛んでどうしやした、彌「飛んで落ちたわいな、彌「落ち
 てそれからどうしたね、彌「ハテ根問ひするわろぢや、此女中は罪障が深いさかい、佛の罰

で目を廻したわいな 喜「鼻は廻さなんだかね 僧「イヤ瘡と見えて、鼻は無かつたわいな 喜「そして、氣がつきやしたか 僧「氣がついて去んだわいな 喜「去んでどうしたね 僧「さ てくしつこい人ぢや、それ訊いて何さんすずい 喜「イヤわつちが癖として、聞きかけた 事は、金輪際聞いて罪はねば氣が濟まぬと云ふもんだら 僧「それなりや云うて聞かそか い、それから其女中が全體其下地もあつたかして、俄に氣が違うたあいの 喜「ハテナ氣が 違つてどうしたね 僧「百萬遍を始めたわいの 喜「百萬遍始めてどうしやした 僧「鐘を叩い て 僧「鐘を叩いてどうしたね 僧「南無阿彌陀佛 喜「それからどうだね 僧「南無阿彌陀佛 喜「コレサ百萬遍の後はどうしやした 僧「南無阿彌陀佛 喜「その後はよ 僧「ハテナ忙しな い、百萬遍ぢやわいの、マア念佛濟ましてからのこといの 喜「エ、その念佛百萬遍濟むま で、待つてゐるのか、途方もねえ 僧「イヤこなさん、聞きかけた事は、根掘り葉掘り聞か ンせにやならんと云うたぢやないかい、ま少と辛抱して聞かんせいな、退屈なりや、こな さん達も百萬遍手傳うて下んせ 喜「コリヤ面白からう、彌次さんおめえも此所懸けなせ えサア、南無阿彌陀ア念佛 僧「とてもものに鐘入れてやろわいな(ト、無上に鐘を打ち 鳴し)「ハアなまいだア、チヤンチヤン 喜「コリヤ、どうせきに面白くなつた、なまだア、 僧「わしや手水して來るうち頼みます(ト、北八に鐘を突き付け、何處へやら行つて畢ふ。

北八は夢中になり「ハア、なまだア、チヤン、チキチヤン、チヤンチキチヤン、手前 鐘の叩きやうが下手だ、此方へよこせ 喜「ナニ如才があるもんか、チヤン、」「なまだア 」「チヤン、」(ト夢中に叩き立て騒ぐゆゑ、内陣の番僧出て來り、此體を見 て臆をつぶし)「ばん僧「コレナ、」わごりよ達はごしたもんぢやぞい、勸化所にあがつて無 作法な(ト叱られて二人は心附き、よろしくして)喜「ハア今の坊様は何處え往つた、まだ 中回向も濟まぬうち 番「ナニ嚙語云ふのぢや、爰を何處ぢやと思つてぢやぞい 喜「ハイ爰 に清水敦盛さんの墓所とけつかる番僧「コリヤおのれ氣が間違つてをると見える、喜「氣違ひ ゆゑに此百萬遍番僧「ナニぬかしくさるやら、とつと出て往なんかい、爰は御祈願所ぢや ぞ(ト、聲高に云ふうち、勝手より棒突きて出で、追ひ拂ふに、二人は早々この坂をおり立 ちて 喜「づくにうめが、さんだめに遇した。

舞臺から飛んだ嘶は清水にひやかされたる身こそ口惜しき 此山内を下り行く先に、清水焼の陶造、軒をならべて往來の足をとむ、此所の名物な り。

天道の恵みもあらんすゑもの師大日山の土を裂せば かくて、其日も早七ツ頃を思しければ、急ぎ三條に宿を取らんと道を早め行く向うより、

小便擔と大根を荷ひたる男「大根小便しよ〜」
 見たが、大根の小便するのは、つひぞ見た事がねえ 彌「あれがかの大根と小便と、つけえ
 (取替)にするのだらう、えとリ」大きな大根と小便しよ〜(ト、呼んで行く此方より、お中
 間らしき、しみたれの男が二人)「コリヤ〜私等二人が爰で小便してやるが、その大根三
 本おくさんかいな、えとリ」マア此方来てして見さんせ(ト、此所の辻子へ二人を連れて行く
 辻子は江戸でいふ新道なり。彌次郎北八これを見てどうするのだ知らんと、後より跟いて
 行き、立ち留り見れば)「えとリ」サアやらんせんかいな(ト、小便擔を卸し直すと) 一人「ア
 リヤ私先やるわい(ト、此擔の中へ二人ながら小便して畢ふと、肥取、擔をかたげ見て)「も
 う是限で出んのかいな中間」うちごめに屁が出たから、もう小便はそれぎりぢやわいな、え
 とリ「コリヤあかんわい、ま一度よう體を振つて見さんせ中間」ハテ小便くすねて置いて何せう
 ぞえ、有りたけ醜んでのけたわいな、えとリ「それぢや大根三本はようやれたわいな、二本
 持てかんせリ」コレ小便は少なうても、こちらがのは、代物がえいわい、餘所の茶粥は
 せり喰てをるのとは違うて、こちや肉ばかり喰てをるかな、えとリ「それぢやて、餘りぢ
 やわいな中間」ハテやかましよう云はんすな、家へ持ていんで、水交りやア三升許りにはなる
 ぞいな、早う三本くさんせ〜、えとリ「ぞないにくせ〜と云うたて、これてくさるも

んぢやないわいな、そこらへ行って茶など飲んで来て、まちつとやらんせ〜(ト、ヤツつか
 へしつ云うてゐるを、二人は可笑しく見てゐたりしが) 彌「モシ〜、幸ひわつちが小便し
 たくなつたから、無駄ながら、おめえ方に上げやせう、これを足して大根三本取りなせえ
 中間」お心ざしは忝なうござりますが、それぢやお氣の毒様ぢやわいな 彌「ハテいゝわな
 ござせわつちも有合せたもんだから、あまり輕少なれど中間」さよなら、お小便戴きましよ
 かいな(ト、小便擔を北八の前へ持つて來りなほす) 彌「イヤ〜矢張り夫に置きなせえ、わ
 つちがのは一二問づゝ向うへ走ります、えとリ」コリヤさよとい〜、イヤお前のは地では
 ないわい、兎角小便は關東がよござります、地のは薄うて價値がない 彌「もちつと早いと
 まだ出たものを、わつちは生れついて小便近いから、不斷小便桶を首に懸けて歩いた男さ
 中間」そりやお羨ましいこつちや、えとリ「さよなら、お前此擔を首に懸けておいでないな、
 わしや何處までもお供して行こわいな 彌「イヤ近頃は其やうにも無えのさ、えとリ」お連様
 もあるさうぢや、モシお前も尻に手水してお出でんかいな 彌「イヤ私しは前方は、一時に
 小便の一斗や二斗する分は根から苦にも思はなんだものだが、どうしたことやら、近年は
 小用づまりで薩張出ぬには困り果てる、えとリ」ハア小用づまりなら、えいことがあるわい
 な、いつさにようなるこつちや 彌「どうするとよくなるの、こいとリ」アノ酒屋などで、酒の

樽の呑口から思ふやうに酒の出んことがあるもんぢやわいな、そないな時は、樽の上の方へ錐揉みして穴あけると、直に下からシウ〜と酒が走るものぢやさかい、お前の小用のつまらんしたのも、額ぐちへ錐揉みさんしたら直に小用が通じるぢやあるぞいな 喜ハ、
 、、こいつは出来た、時に遅くなつた、サア往きやせう(ト、二人は引別れ行く向うの方より被衣を着たる女の二三人連れ、さすが都女郎の風俗しなやかにて、いづれも色白く透き通るばかりの代物、北八現を抜して)「ヒヤア〜、生きた女が来る、綺麗〜」彌元談な女ごもだ、皆着物を被つて来るは 喜あれが被衣と云ふものなの、アノ美しくし奴と、己が物を云つて見せようか(ト、やがて彼の女中の傍へ走り行きて)「モシちと物がお尋ね申したい、これから三條へはごうまわりやすね(ト、聞くに此女中御所方と見えて、とんだ横柄なり)「わが身三條へ行きやるなら、この通りを下がりやると、石垣と云ふ所へ出やる程に、それを左へ行きやると、ツイ三條の橋ぢやわいな(ト、一體御所方の女中は、人を何とも思はず、ちと利いた風の男と見ると、悪くひやかす風ゆる、五條の橋を三條と教へる喜「ハイこれは有難うござりやす(ト、何も知らねば禮を云つて暫く行き過ぎ)「彌次さん、アレヤア何だらう、ごうてきに大風な女共だ 彌ハ、、、とんだ安く取扱はれやアがつた、ごうさらしめ(ト、それよりやがて彼の石垣と云へるを打過ぎ、左の方へと教へられたる道

筋を三條へ行くぞ心得、早くも五條の橋に至りし頃は、早や日暮れて往來の人「モシ〜しか谷の方へはごう参りますな 喜「ハア汝しか谷へ行きやるなら、此通りを直に行きやると、ツイしか谷へ出やる程に、コレ轉んだら起きて行きや、牛の糞を踏ん附けたら、遠慮なしに拭いて行きやれわいなの人「イヤ此奴ぞんざいな物の吐しやうちやご、なあんたらめが 喜「ナニあんたらとア何の事だ道を聞くから教へてやるのだけは往來「イヤ細言吐すない、ごたまにやしてこまそかい(ト、此男の連れと見え、二三人立ちかざるを見れば、いづれも見上ぐる如き大男ごも、腰に長脇差を横たへ、物言ひ恰好如何様にも各角力取らしき者共なれば、北八忽ちしよげかへりて)「ハイ御免なせえ 彌「こいつは生酔だから、ごなたも了簡してくんなせね(ト、イ、ヤ了簡ならんわい、おごれら家は何處ぢやぞい、
 彌「イヤ旅の者でござりやす、すも「旅の者なら宿があらう、シレ吐かしくされ 彌「是から此三條に宿をさうと云ふのでござりやす、すも「何吐すぞい、此三條とは何のこつちやい、こつとらは今三條の編笠屋から出て来た者ぢや、こゝは五條の橋ぢやわい 彌「ヤア爰は三條ではござりやせぬか、ソレ見や北八、先刻の女共が、とんだすつぽかしを教へやアがつたせも「貴様達はごつから来たのぢや 彌「清水の方からすも「ワハ、、、てつさり狐にかな、つまゝれくさつたもんぢやあるぞい、えらい暇費しな、はつて置け〜、さり

とは阿呆な奴らぢやナト、打ち笑ひて行き過ぎる。彌次北八は思ひも寄らず五條の橋に來り忌々しい番狂はせな目に會うた、ぬ小言いひながら、橋を向うに渡り、其處此處とまごつくうち、往來の賑かなるに浮れて、思はずも橋の袂を左の方へ浮れ行くと、何かは知らず兩側に掛行燈軒毎に照し、三味線の音賑しく、ぞめき唄に頬被せし男共のちらつくに紛れて覗き歩く。この所は五條新地とて、少しの流れを酌む遊所なり。家毎に門の戸を閉てたるが、潜戸ばかりを開きて門口に立ちたる女の、さゝやかなる聲して、モシナ〜と彌次郎が袖を引くに、振り返りてくゞり戸の内を見れば見世つきのおやまならび居たりけるにぞ)彌「ナント北八、こゝはおやま屋と見えるが、いつそのくされに今宵はこゝに泊はさうだ 喜如何様何も荷物はなし、まんなほしにそんな事も野菜でねえ 女「サア這入りんかいな 彌「這入ることは這入らうが、こゝはいくらだ 女「オ、かたやの、お泊りなはるかいな 彌「勿論さ 女「まだ初夜前ぢやさかい、七夕づゝおくれんかいな 喜「上方のお山は値切つて買ふと云ふ事だ、半分にまからねえか 彌「何かなし、四百づゝなら泊つて行かう、それで出來すば御縁がねえと諦めようさ 女「よござります、お這入りなされ 喜「それでいゝの、丁度おやまさんも二人あらアト、この家へ上ると、女が二階へ案内するに、屋根裏の低き二階にて、彌次郎頭をこつとり)「あいたしこ 喜「どうした 女「オホ、、、お危うご

さんす(ト、煙草盆を持つて來る。此内おやま、二人、一人名は吉彌、今一人は金五、いづれも太織紬縞やうの着物に黒天鷲絨の半襟、梁につかへる程低き二階をしやんと立つて歩くしろもの、片手に着物の袂を横の方へ引あげて來りオ、しんど、云つて坐る)喜「とんだ暗い行燈だ、サアもつと此方へ寄りなさらんか吉彌「お前さん方はどこぢやいな 彌「さればどこやらであつて金五「オホ、、、六角の朝市にこないなお方がよう見えてぢやが、訛つてぢやさかい、大方旅のお方ぢやあるぞいな 喜「六條様へ御出でたのかいな 彌「マアそこらのもよ、吉「モシナ酒一つあがらんかいな 彌「さうさ酒が早く飲みてえの 吉「さう云うてやろかいな、お肴は何にせうぞいな 彌「角の鮓がおいしいぢやないかいな 吉「わしやナ、かちんなんばが、えいわいな 彌「かちんでも家賃でも頓着はねえ、早くしてくんな 吉「いつきに參じるわいな(ト、此おやま酒肴をいひつけに下へおりる。あとに残りしおやまは、此内帯の間から鏡を出し、行燈の傍へより、顔を直す。やがて下より銚子盃を出し、大平が一人前に一つづつ廣蓋に載せ持ち出す。彌次郎膽を潰し)「なんだ大平を人別割とは珍しい、京はあたじけねえ所だと聞いたが、こゝらは又どうせえだ 喜「四百には安いもんだ(ト、此二人は酒も肴も揚代の四百の中だと思ひ、むしやうに安いと譽める)金「サア一つあがりなされ 喜「始めようオト、、、ひらは何だ、ハ、ア葱に半平は聞えたが、こつち

では半平を焼くと見えて、眞黒に焦げてゐらア 吉「オホ、ソリヤ歌賃ちやわいな
 (ト、これは上方にてする難波餅とて葱をいれたる雑煮餅なり。此おやま下戸と見えておの
 れが好物ゆゑ、客に勧め取寄り寄たるなり、北八かちんといふことを知らず「ハアかちん
 といふは聞いたこともねえ、ごんな肴だの 喜「オ、笑止、あも(餅)ちやわいな 喜ム、
 鮎か、ドレ、ヤアこりや餅だ、 彌「おきやアがれ、上方者は氣が利かねえ、酒の肴
 に餅とはどうだ、是で酒が飲めるものか 金「外のお肴いうて参じやうわいな(ト、すぐに下
 へおりたるが、ほごなく井物を持つて來る中には上方に流行る鳥貝の鮓なり。此おやま
 の好きと見えて此鮓をいひつけやりたるなり 喜「なんだコリヤ馬鹿貝の刺身を酢につけた
 のだな 金「鳥貝のすもじちやわいな 彌「出す物も、變ちきな物ばかりで、もう酒も飲め
 ぬ、(ト、此内無駄も色々あれども略して、こゝに蒲團を敷きならべ、腰屏風にて間を割
 る。此うち四十ばかりの女、この女房見えて、揚代を取りに來り屏風をあけて「お許
 しな 彌「オイだれだ、ハイお揚代を頂きに参じました(ト、書付をいだす、彌次ひらき見
 て「なんだ四夕ツ、八夕の揚代は聞えたが、四夕かちんなんば、二夕すし、一夕八分御酒
 五分蠟燭、べて十六夕三分、コリヤとんだ咄だ、雑用は別に取るのか、おらア又酒も肴も
 揚代のうちかと思つた、コレ、北八この通りだ 喜「ドレ、なんだコリヤおめえ方ア

わつちらを他國者だと思つて酒代を別に取るさへあるに、どうてきに高えもんだ、此四夕
 がちんなんばといふは、アノ大平の事か、餅ならたつた三ツ四ツ入れて葱のちつとばかり
 さらへ込んだものを、一夕づゝとは、成程京の者はあたじけねえ、氣の知れた根性骨だ、
 蠟燭までつけることねえ、こんな物はまけにしておきなせえな 女「オホ、京の者を
 悪うおしやんす、おまいさんがしゆみ(者)ちやわいな、五分許りの蠟燭代、まけいのな
 んのと、おしやんすことはいないわいな、そして皆あがりなされた後で、高いの安いのと、
 おしやんしたてゝあかんこつちやないわいな、 彌「エ、面倒なソレ一分持つていきな、は
 した位はまけなせえ、(ト、金一分ほうり出してやる、女房ふせうぐにとつて下へおり
 ると、彌次郎あつけにさらし顔付ぐにやりとなり「ア、とんだ目に逢つたノウ北八、喜
 併しおらア惜しくねえ、ごうかおつにもてさうな臘梅だ(ト、此内北八のあひかた吉彌來り
 て「オ、しんきやの、あこにわたし一人置かんして、此處に何してちやぞいな、サア休
 んかいな(ト、手を取りておのが方へひきすつてゆく。喜「コリヤおれが帯を解いてごうす
 る(ト、わざと彌次に聞える様に聲高にいふ。女北八を引こかし「よいわいな、今宵はいこ
 う暖いぢやないかいな、おまいさんじつとしてゐなされ、わたしがあんちようするわいな
 (ト、すべて上方筋のおやまは初對面から帯紐を解きて打ちとけたる躰に容をもてなすこと

さだまれる旋の如し。中にも此吉彌は大年増にて如才のなきしろもの、北八に着物を脱がせてほうり出し、おのれも帯を解きてきた八におのが着物をうちかけ、さながら深き馴染の如く打ち解けたる躰にもてなしけるゆるる。北八うつゝを抜かしてうち伏しけるが、夜も次第に更けゆくまゝに、犬の遠吠のものさみしく、時の太鼓もはや丑の刻ばかりなるに、吉彌目さめし様子にて「モシナク、よう寝てぢやな」ア、ムなんだく、吉彌わしや手水にいて来るぞえト、起きあがりたるが枕もとにはうり出してある北八の着物をきて帯をひきしめ「おまいさんの着物ちよと貸しておくれや、わしやこれ着て戻達のふりして、下の衆をだまして来ませわいな」喜よく似合つた、奇妙く、吉頭がこれぢや、あかんわいなト、手拭を取つて打ち被り、下へおりたるが、北八はそれより寝もやりず、待て暮せどかの吉彌は一向に來らず。さては外に客にても有るやと、暫く待ち居たるに、はや七つの鐘も鳴り、程なく夜もあけなんとするに、北八こらへかねて、むしやうに手を叩くと、下より女房駆けあがりて「ごなたぞお呼びなされたかいな」オ、此處だく、コレわつちがおやまは先刻下へおりたが、それなりで顔出しもしねえ、ちよつくり呼んでくんせえ

女「サア、そのことで下は大騒ぎでござんすわいな」喜「なせく」女「アノおやまが男のきりもん着て走つたさかい」喜「ナニ走つたとは、逃げたのか、ソリヤ大變だく、その男の

着物といふはおれがのだ」女「かいな、ソリヤ又何としておまいさんのを着て行たぞいな」喜「イヤ下へいつて、みんなをだまして来るから貸して呉ると云つたによつて」女「それで貸しなつたのかいな」喜「さうさ、時にそのおやまの駈落したは、こつちにやア知らねえこつたから、何でもこの抱に違えはあるめえ、着物は是非とも爰の内からどうぞして貰はにやならねえから、下へさう云つてくんせえ、早く」女「マアなんに致せ、そないに申ませうト、下へおりて行くど、程なく此處の亭主と見えて、鬼太織のごてらを着たるでつくりとせし大男、料理番男ども二三人引連れ、ごやくと二階へ來り、亭主北八が枕もとに立ちはだかけ「コレ吉彌に着物貸したといふわろいは、こなはんかいな」喜「オ、おれだく」女「おれかい、ほてくろしい事さらしたな、マア起きくされ、ドレ面見せさらせ」喜「イヤこの才六めらは、何でおれをその様にぬかしやアがるていし」ぬかしたかどうすりやア、おごれ吉彌めにきりもん貸して駈落させをつたからは、行先きは知つてけつかるぢやある、ありていにはぎき出しくされ」喜「とんだことをいふ、なにおれが知るものかていし」イヤくそないにぬかしさらしても、われが人に頼まれて絲引きくさつたに違ひは無いわい」喜「コリヤささま達はおつに言ひかけをするなていし」願たかすな、しよびさ下ろせト、皆々立ちかゝり、北八を手込めにする。このごさくさに彌次郎目を覺し、

この體を見て刎ね起きとんで出で「コリヤおれが連れだが、うぬら此男をどうする(ト、亭主をつきのくると料番「イヤこやつも同盗ぢやあろ、二人共にひつくゝれ(ト、いづれも小力ある者ども、彌次郎北八を南方から引きたて、下へおろし、ほそびきを持つて、遂に二人をぐる／＼巻きに縛りたるに、彌次郎は一向合點ゆかず。委細の事を聞きて仰天し、北八も今更おやまに着物を貸したるおやまりを後悔し疑受けたる上、かゝる目に逢ひ、口惜しけれども、理の當然に言立たす。臺所の柱に繫がれたる面目なさ。ことに夜もあけはなれて所々の者ども追々見舞に来るうちに、これも此商賣屋の亭主と見えて、少し小口でもきかうといふ男、名は)十吉(わしや今聞いたが、吉彌めがきよとい事さらしたげなその手引した奴等はごしたたいていしゆ「あこにく／＼つておいたわいの十吉(店主呼んで預けさんせいでいしゆ「旅のもんぢやて、嘘つき晒してほんまのうちを言はんわいの十吉(ソリヤ氣の毒なもんぢやわい(ト、二人が縛られてゐる傍へ來り)十吉(コレこなん達は悪い合點ぢやわい、ソリヤはて、友達づくなら頼まれまいもんぢやないが、もうこないに露顯ては、しよことがない、有りやうに云うて、めん／＼の身ぬけするがえいわいの 彌「イヤわつちらは、からさし何も知りやせん、たゞ此男がほんの洒落に着物貸したばかりで、疑ひ受けたと云ふもんだから、ごうぞ貴方のお取做しで、わつちらを助けて下さいませ、コ

レ手を合せて拜みたくても縛られてゐるから、足を合せて拜みます、コリヤ／＼北八もお頼み申せ 喜「ハイ南無金毘羅大權現様、此災難を免れます様に、南無歸命頂禮／＼ていしゆ「エ、何ぬかすぞい、金毘羅様祈るなら、そないなこつちやきかんわい、幸おぞれ裸でゐるから、水浴びせてこまそ、垢離とつて祈りくされ 喜「イヤわつちは全體金毘羅信心でござりやすが、是まで願をかけやすに、人と違つて水を浴びて寒い目してはき／＼やせぬ、なんでも着物をたんとさきて、殼汁に熱燗をひつかけた上、巨隨へ首ツきりのたくりこんで願ふとすぐに御利生がござり／＼すから、せめて衣物はきさずとも一杯熱くして下さりませんかていしゆ「エ、尻ねづりくされ 彌「イヤ御尤でござりやす、わつちこそは此男めがまきぞへ、ほんの災難、そしてこんな目に逢ひますと、持病の癩が差込んで、アイタ、／＼、ていしゆ「癩が痛いなら、胸中の繩をもちと堅う締めてやろかい 彌「イエ／＼わつちが癩は甚句踊ると治まりますから、ごうぞ此繩解いて下さりませ十吉「ハ、／＼、コリヤねからやくたいな奴等ぢやわい、勘太さん許してやらんせ、たかで敵等はえらい阿呆ぢや、成程吉彌めにたらされくさつて、きりもん貸した迄のこつちやあろぞいなていしゆ「サイナ、そないに云はんすりや、いかさま賢うも見んわろ達ぢや、別しての事もありやせまい、去なしてやろかいな 喜「それは有難うござりやすが、わつちやア此裸の儘では歸えられやせんてい

し「いなれざ、去なんすなく、こちにも言分があるさかい 喜「イヤそんならめえりやせ
う十吉「サア〜去なんせ、あだあほらしい衆ぢやわいな（ト、二人が繩を解いてやると）
彌「北八手めえのお蔭でどんだ目に逢つた、喜「おめえよりか、おらア此通り衣物をとられ
てハアくつまめ、オ、寒む寒むていし「ハ、ハ、ハ、あんまり可憐いさうぢや、何など一枚
くれてやるかい 喜「有難うございやす、ごんた物でもごうぞ戴かして下さいやせていし「
エ、みだれめ（乞食）がいふやうなことぬかしけつかる、てきに似合うたやうに納屋の菰
一枚もて来てやれやい下男「イヤこゝに昨日の俵がある、これきていかんせ 喜「ナニそれを
さうとか、エ、情ないことをいふていし「折角のおれが 志「ぢやきていなんかい 喜「ハイ
有難うございやすが、私は矢張裸が勝手にござりやす 外聞の悪い男だ、おいらが合羽
を貸してやらう（ト、彌次郎が木綿合羽をとつて北八にうちきせながら）
うとましや搔いたる耻も赤はだか合羽づかしき身とはなりたれ
果は大笑ひとなり、二人はやう〜のことにて此所をのがれ立ち出でけるとなり。

東海道中 膝栗毛六編卷之下 終

東海道中 膝栗毛七編序

穆王八駿に御して王母が桃を甘じ、靈鷲の説法を聴くもひとへに名馬の功によれり。こゝ
に彌次郎兵衛喜多八は、心の欲する所に随ひ、膝栗毛にのりが来るまゝ、四方に奔走して
果もなきは、八駿にも勝りてたのしかるべし。かの生月、磨墨ならば、八十うち川の争ひ
もあるべきに、人喰ひ馬にも合口同士、勝手次第の道草は、これ此栗毛の徳ならずや。盡
きぬ趣向に七編の緒を、作者の乞ふに任せ、予も亦乗りかゝつて筆を揮ふ事然り。

文化辰春

龜山人蘭衣述

東海道中 栗毛七編之卷上

或人の句に花尊都に本寺く哉と詠みたりしは、實にも寺院堂堵の廣大無邊にして、其莊嚴麗秀なるいふも更なり。殊に花の春紅葉の秋は、東西南北に名たる勝景の地ありて、加茂川名酒の樽とにも、人の魂を飛ばしめ、商人のよき衣きたるは他國に異にして、京の著だふれの名は益、西陣の織元より出で、染色の花やぎたるは堀川の水に清く、釜もどのおしろい、川端の五倍子の粉は雪を欸き、御影堂の扇、伏見の團扇に風匂ふ香堂前の粽、丸山輕燒、大佛餅、醍醐、獨活芽、鞍馬の木芽漬は、庭訓往來に著く、東寺の蕪、壬生の菜は、名物選に鼻高し。其外名産奇製の品物あまたある都に、たましく入り込む騷客の商人、彌次郎兵衛北八とて、拔詣の刷毛序にまぐれ出でたれども、淀川の下り船に門違ひして荷物を失ひ、五條新地の一ツ杯機嫌に早呑込して丸裸となりたる、北八の名にも似ず、同行の彌次郎兵衛が木綿合羽を借着せしほどの仕合なれば、かゝる洛陽の地も面白からず、うかくと新地戻りの朝風身にしみわたり、五條の橋にさしかかりたるに、此所は古へ牛若丸の千人切したまふ所とあれば、きた八しほりと打かたぶきて、かゝる身はうしわか丸のはだかにて辨慶じまの布子戀ひしき

かくて東にわたりて、河原院の舊跡門出八幡も姿通りとなして、高瀬船の網に曳かれて辿り行く道すがら喜思へばく詰らねえことになつた、ごうぞ古着屋でも見つけたら、どんなでも綿人が一枚欲しいが、彌次さんいゝ智慧はねわかの「ナニ買はずともいゝにしたらが、江戸つ子の抜参りに裸になつて歸るはあたりめえだは」喜それだとして寒くてならねえ「そんなら幸こゝに湯屋があるナントちよつくりあつたまつていかねえか喜」「ホンニこいつは奇妙く、彌次さんおさきへありがてえト、一目散に或格子づくりのうち暖簾をくくりて、すつと入り、駄けあがつて裸にならうとすれば、そこのていしゆ」「モシくこなさん誰ぢやいな、何さんすのぢやく」ト、咎められて北八あたりを見廻し見るに湯屋でなし「エ、いめえましい、湯屋かと思つたていしゆハ、ハ、ハ、ハ、こちの暖簾に見るに湯屋があるさかい、それで錢湯かと思つてぢやの、アリア濟生湯といふ振出し薬の名ぢやわいな」彌「ホンニこいつは大笑ひだ」喜また一倍寒くなつた、いめえましい「ト、小言ひながら行く先に、しみたれの古着屋一軒あり。店頭に古布子古裕帛しあり。きた八彌次郎兵衛を口説きて、布子一枚求めんと、伴の店にたち、ひねくりまはして紺のぬのこを取つてすかし見」「モシこのぬのこはいくらだね」喜「ハ、ハ、ハ、こつちやへおかけなされ、コレお茶もて來んかいな、お煙草の火も無いわいな、赤いの一つ、ちやごくさん

せ「イヤ茶も煙草も入りやせん、コレヤアいくらだといふに「ハイ、ハイ、そりや、さやうとう善ござります、お安うしてあげうわいな」(こぞう)「ハイお茶あがりなされ長吉、そりやおぬるいちやないかいな、なぜ熱いちや」(茶)「あげんぞい」(こぞう)「イヤおえさまが、朝は茶粥ぢやさかい、茶ちや焚くなとおつしやつて、御ざります、それは昨日焚いたまんまのちや」でござりますわいな、強いかさま、昨日のお煮花ほごあつて、とんと河童の尻の様だ、イヤ尻のついでに尾籠ながら御亭主さん手水に行きたい、おうらをちよつとていし「ハイ、雪隠へお出でかいな」(こぞう)「せつちんはぬるうはござりませぬ、よう(能く)沸いてぢやあろぞいなていし「ナニ雪隠を誰が沸かしたぞい」(こぞう)「それぢや、今のさき、わたしが参じたさかい、すぐい(行)て見なされ、ポツポと煙が出てぢやあろていし「エ、むさい事いふ奴ぢや」(こぞう)「らんなことより、此布子はいくらだえ、早く決めてくんねえ、寒くて堪へられぬていし「お寒くばもつとそつちやへ寄りなさり、そないによう日がさしてぢやわいな、昨日も着物買ひにお出でた」方が、コリヤさやうとい(氣疎)ぬくい(暖)いうちぢやて、其處に一日日向ぼこしていなれ(歸)ましたが、そのお方がもう着物買うて着いでもだんない、毎日此處のうちへ日向ぼこしに(來)うわいななど、こ(ない)此(こ)に(云)うてぢやあつたわいな、喜、エ、じれつてえ、コレヤア賣らねえのかどうだ

なていし「ハイ、かうぢやわいな、喜、安くしてくんねえていし「その紺のおひえぢやな(ト、算盤)「三十五匁、とんどざり」くぢやわいな、喜、高い、わつちらは江戸者だが、古着は商賣柄で、いくらも取扱つて居るから、やるもんぢやアねえ、ほんたうの所を云ひなせえていし「ハア御商賣柄とあれば、おまい様も古着屋なされてかいな、喜、イヤわしは質商賣さていし「質とあれば何かいな、お取りなさるのか、置きなさるのかいな、強、置くのが此男の商賣さ、喜、それだから質に置く時の算用からして懸らにやア買はれやせぬ、此布子はごうしても一匁より外は貸すめえから、二朱ばかりに買はにやア損がいくていし「何いひぢやぞいな、後家の質屋へもて、金一分は物言はず貸すわいな、喜、とんだことをいふ、ごうして一分貸されやせうていし「ナニ一分つかん事はありやしよまいがな、喜、それともおめえ直に請けなやるかていし「請けるわいな、喜、さう云つても、あてにやアならねえ、それよりか此間の股引の出入はごうしなさる、そして裕の時貸しもあるし、それもおめえ、子供衆が脾胃虚して病つてゐるうへ、かみさまが疫病で死なれたけれど、佛かへて葬禮を出す工面が出来ぬと、たつてのお頼み故、貸してあげたものを、義理の悪い、いつそのこと、此布子はその裕のかたに只取つておきやせうていし「ア、これ申し、とつともう、やくたいこと云うてぢやわいな、なわしが鼻がいつ疫病で死んだぞい

な、あたけたいなこと云はんすわいな(ト、亭主大きに腹立てる。彌次郎兵衛可笑しく言さうも此男は口が悪くてなりやせん、了簡しなせえ、そして何角と面倒な、その布子も一貫にまけてやりなせえしていしゆ)よござります、朝商ちや、まけてあぎよわいな、シヤン
 〳〳 喜まづは布子にありついた(ト、彌次郎に代錢を拂はせ、かの布子を着て彌次郎兵衛に木綿合羽をかへし、此内を出ると暖簾を見れば、とらやとあるに思ひよりて、
 和藤内三貫あまりの古布子老一くわんに永めこそすれ

それより北八は忽ちに元氣を得て「ナント彌次さん、すさまじからう、古着屋のをちやらツばこで、はぐらかして、一貫に見おとしは安いもんだ、見なせえし、まだ捨垢も附かねえものを 喜紺の法被と見えて、おいらがお供の様で、てうごいゝの 喜とくに、こゝらは何といふ所だの、ごうてきに粹なたば(女)がちらくするは 喜「ハ、ア紫帽子の野郎どもが見えるから、大かた宮川町といふ見當た 喜來るぞく、美しい妓どもが来る、いゝ時おいらア着物を買つてよかつた、まんざら裸の上にその木綿合羽ちやア、あいつらに擦れ違つてもげえぶん(外聞)がわるい(ト、俄に襟かき合はせて、見えばりながら、向うより来るおやま藍子にすれちがひ通れば、一人のおやま振返り、きた八を見て「初音さん、見なませ、あの人のさきりもん(着物)におつきな紋が附いてちやわいな、オ、をかし、

オホ、はつれ「ホンにおほらしい人さんちや、オ、好かんやの、オホ、(ト、打わらひ行き過ぐる故彌次郎兵衛も心付いて「オヤ、きた八手めえの着物を見や、背中の横ちよに大きな紋所がく付いてゐらア 喜何處く(ト、振返りてよく見れば、幟を紺に染めたる布子放、一寸見では知れねども、日當りへ出ると、大きな紋所ありくと透えて見ゆる)「コリヤ大變く 喜ハ、ハ、ハ、裾の方には鯉の瀧のぼりが見えるから、こいつ幟のはぐらかしものだな 喜エ、古着屋めが、こんだ目に逢はしやアがつた、道理で安いと思つた、ぶんのめして来よう 喜ナニうつちやつておきやれ、皆手めえが籠棒から起つたことだ、先は商賣だものを、仕方がねえ 喜「エ、いめえましい(ト、眞面目になりて吃きながら、四條通りに出れば、名にし負ふ川東の生粹、祇園町の繁白は兩側の芝居、櫓太鼓を打ましへ、テンカラの音勇ましく、狂言の名代看板華やかに、對の派出模様着飾りたる東西の木戸番、鹽辛聲にて「サア、評判ぢや、今が三五郎の腹切ぢや、此後があら吉と友吉が所作事、評判く(ト、呼び立つる、江戸で火繩といふは京大阪にては皆女なり。北八彌次郎兵衛が袖を引いて)女「モシナおまいさん方一幕見てお出でんかいな 喜いかさま、ナント彌次さん京の芝居も、ひときり見ようちやアねえか 喜面白からう女中、いくらで見せる 女「よござりすわいな、わたしがどうなとするさかい、マアお出

でなされ(ト、兩人を兩方の手にひつぱり、引連れて芝居へはいり、二階へあがると、棧敷番來り、二人を向う棧敷の前側へ入れる。もつとも幕の中にて、中賣の商人聲々に「昆布宇治山く、饅頭よいかいな」茶アあがらんかいな。茶々どうちやいな「番付、繪本く」彌「どうきに大入だ、併し江戸の芝居の半分でもねえ」喜「ア、退屈た、一杯飲みたくなつた」彌「おらア腹がへりまの大根だ、菓子でも買つて食はう商人」みづから、宇治山 彌「なんだ手づからうちやる、勝手にさつせえ商人」饅頭「どうちやいな」喜「こいつがいつち分つてゐる、コレ饅頭三ツ四ツくんせえ商人」ハイく「三文ツ、でござります」となりさじきのけんぶつ「コレ饅頭屋さん、どうしたもんぢやぞい、こちの辨當へしつぶしぢや商人」ハイく「お許しなされ」彌「アイタ、、どうきに足を踏んば商人」ハイこれは、モシちとお許しなされ」喜「コリヤどうしやアがる、人の頭の上を金玉をひきすつて通りやアがる、エ、きたねえく」となりさじきのけんぶつ「オ、權兵衛さん、買うてお出でたぞいな」權兵衛「太郎兵衛さん待つてぢやあろ、わしや今あこの棧敷では、氣疎う甘いもの喰てぢやさかい、ソレ見てゐておそなつたわいな、サアく「こない(此様)なもんぢや(ト、竹の皮づゝみを出す)太郎兵衛「ハア鯖の酢もじかいな、コリヤきよといく、その飯は辨當の代りにして、肴は剝して酒の肴にさんせ、それがよいわいな」權兵衛「さよぢや竹の皮はもていんで、草履の鼻緒たてるわ

いな、イヤとさき一杯やろかいな(ト、小さな猪口を取出し、風呂敷に包みし徳利より注いで飲む。北八これを見て小聲になり)「彌次さん見ねえ、甘さうに飲みをるが羨ましい」彌「エ、いめえましいことをいふ男だ」彌「コレおぼうさん、おまん(饅頭)一つあげやせう(ト、おのれが食ひ残した饅頭一つ隣棧敷の子どもに遣る。これにて脚をつけて酒を飲まうといふ下心なり)太郎兵衛「コレハ有難うござりますわいな」彌「おめえ方ア、よい物をあがりなされる」太郎兵衛「おまいも御酒はお好きかいな」左様く、飯よりは好物さ」太郎兵衛「ソリヤよいお薬しみぢやわいな、コレ權兵衛さん、も一つ頂かかいな、オト、、コリヤ美しい酒ぢやな」權兵衛「さよいや、ホンニお隣のお客、御退屈ぢやあろ、是れなど一つあがらんかいな(ト、茶碗をさし出す。きた八手に取るより早く戴きて)「ハイ有難うござりやす」太郎兵衛「併し冷めはせんかいな、モシお銚子ごとそれへあきよわいな(ト、茶屋の土瓶をきた八に渡せば、もつけな顔してうけとり、ついで飲めばぬる茶なり)喜「エ、茶ださうな、ペツく」太郎兵衛「おぬるなつたぢやあろ」喜「とてもぬるい序にどうぞ是そこの徳利のをうめて下さりませ」太郎兵衛「これはしたり、コレ見なされ、こないになつたわいな(ト、徳利を逆にして見せる)彌「ハ、、業晒しなきた八小聲に」いめえましい、饅頭一ツ棒にふつた(ト、ぶつく口の内にこゝといひながら、ふくれてゐると、此内樂屋にて拍子木)「カツチく見物」

硯ぶたはといへば、二匁五分だといふ、よしか、大平が三匁、よしか、此鉢はと聞いた
 らこれが三匁五分と、ささまが云つたに違えはあるめえ、そこでた所が十二匁五分、渡し
 たから言分はあるめえ、女「オホ、、、、ようぢやらくと申戯いふお方ぢやわいな、オホ
 、、、」彌「イヤ、ホ、ぢやアねえ、ほんたうに持つてける（ト、まじめになつて風呂敷
 に包まうとする故、女きもをつぶし「モシナ、わたしの云うたはお肴のとでござりますわ
 いな、彌ハテ肴の値段きく氣なら、硯蓋に盛つてある肴はいくらださきやす、それを
 此硯蓋はと云つたら、二匁五分だと云つたぢやアねえか、」そぢやて、それがまあ、彌
 ナニ、いさくさがあるもんだ（ト、やつつ、かへしつ云ふところへ委細をきいて前垂したる
 男、勝手より出て「ハイこれはあなたの御尤も、よござります、お持ちなされませ、その
 代り道具の代物は戴きました、あがつたもの、お拂ひは、まだ戴きませんわいな、それ
 を御勘定下さりませ、彌「成程、食つた物は高が知れてある拂ひやせう、いくらだ、」
 ハイ七十八匁五分でござりますわいな、彌「途方もねえことをいふ、おいらを盲だと思ふか、
 コレエ、たつた五百か六百が物を食はせて置いて、大それたことぬかしやアがる、」イヤ
 私方では何ぢやあると、お肴は大阪から歩行荷で取り寄せますさかい、駄賃がえらうか、
 りますいわな、」肴はそれにもしてやらうが、青物は高が知れてある、アノ初めに出した

菜のしたし物はいくらにつく、彌「ハイあれはな七匁五分、」ヤアあれが七匁五分とア、あ
 んまり人をうつむけにしやアがる、三文か四文が物だ、」そないにおつしやりますな、あ
 りや京の名物で東寺菜と申しますわいな、私方では別に作らせまして、虫の喰た菜は除け
 ますわいな、そして莖も太い細いの無いやうに選出してあげるわいな、穢いお咄ぢやが、
 糞も絹ごしにしてかけますわいな、彌「とんだことを云ふ、そんなことがあるもんか、何で
 も食つたもの、代は二朱ばかりやらう、」イヤ「さよぢやなりませんわいな、ハテ高い
 と思召すなら、食つた物を残らすお戻し下されませ（ト、此一言に困り、彌次郎兵衛やつき
 どなりてせりあうた所が、理窟詰めにあひて、大へこみとなり、まじくじすれば、」エ、
 面倒な、彌次さん、はじまらねえせ、彌「いま、しい、云ひ分があれど勘定づくで恰好が
 わりい、了簡してやらう、よく覚えてるやアがれ（ト、睨み廻して立ち上り、はふくこの
 所を出づれば、」ようお出で、又お近いうちにえ、彌「糞をくらへ、ハ、、、」
 又しても祇園の茶屋にでんがくの味噌をつけたる身こそ悔しき
 それより境内を出で、もとの四條通りを行くは、日もはや七ツ下りとなれば、急ぎ三條に
 宿をもとめ、足休めんど辿り行くさきに立ちて、近在の女商人何れも頭に柴薪或は梯子、
 連木、槌などを頂きて四五人打連れ立ち「梯子買はしやんせんかいにやア、連木いらんか

いにやア 喜「コウ見ねえ、どうせえな物を頭へのつけて行くは 彌「アノまた尻を振るさま
 はい、ハ、ハ、ハ、女商人「薪買はしやんせんかいにやア(ト、行きくへて河原に出ると、かの女
 ごもおのくくこゝに荷をおろし、すり火打にて煙草などのみて休む(彌「ハ、アさすがは都
 ぢや、ごいつも小綺麗な面つきだ、ちと冷かしてやらうか 喜「またおめえ、へこまされよ
 うと思つて 彌「馬鹿ア云ふな、手めえぢやアあるめえし(ト、煙管を出し女商人のそばへ寄
 り) 御無心ながら火を一つ、パツパツくく、時におめえ方ア、とんだおもてえ物をよく
 あたまへさけ(置)てあきなさるの 女「さよぢやわいな 彌「ナニ、此位えな物を、おいらな
 んざア二十貫目や三十貫目ある石をあたままで振り廻したものだ 女「おまいさんは餓餓屋の
 粉なひさぢやあるわいな 彌「エ、手めえだまつでゐろえ 女「おまいさん方ア、ごうぢ此
 連木買うておくれんかいな 彌「ナニすりこ木、ア、買ひてえが、コレヤア細、いわつちら
 が所ぢやア、なんでも材木の様な、そして四角な連木でなくちやア間に合はねえ 女「オホ
 、ハ、ハ、四角にした連木でおむし(味噌)す(磨)らんすなら、大方摺鉢も四角ぢやあるわい
 な 彌「さうともく、おいらが所ぢや穴藏で味噌をする 女「オホ、ハ、きやうとい、ささ
 くなお方ぢやわいな、アノ連木おいやなら梯子買うておくれんかいな 彌「ハ、ハ、梯子面白
 え、いくらだ 女「今日は何もよう賣らんさかい、安してあぎよわいな、六匁下んせ 彌「二

百ばかりなら引受けようさ 女「アノぢやらくくいうてぢやことわいな、もぢと買うて下ん
 せ 彌「いやだく 女「おまいさん、こないにあぢようしてあるわいな、モシ五匁にあぎよ
 かいな 彌「いやく 女「よいわいな、是持ていんだらひか(呵)られよう、二百にまけてあ
 ぎよわいな 彌「ヤアまけるか、情ないことをいふ 女「きようとう安いもんぢやわいな 彌「
 いくら安くつても梯子を買つてごうするもんだ、内もねえ辯に 女「よいわいな、サアもて
 去なんせ 彌「こいつはあやまる、ありやうはおいらは旅の者で、今宵は三條に泊らうとい
 ふのだから、梯子を買つても仕方がねえ 女「何言はんすぞいな、入らん物をつけさんす事
 は無いわいな 彌「ソリヤもう値をつけたが不肖だから、いらねえ物でも袂か懐へ這入る物
 なら買つてもやらうが、何を云つても此梯子だから、恐れるく 女「そぢやて、わたし
 らを黽らしたのかいな、こちや商賣ぢやわいな、そないなこといやぢや、もて往なんせ
 (ト、女ども四五人口々にやかましくしやべりたちて、彌次郎を中にとり巻き責めたつる。
 すべて此女商人は皆至つて氣の強きもの故なかく合點せず。物見高い京の人達何事やら
 んど折重なりて、ぐるりと取捲くに、彌次郎兵衛逃げられもせず、大きに困り果て、さま
 くくに言譯し、又はりこみいつて見ても一向きく入れず。相手は皆女のことなり、喧嘩に
 もならず、せんかたなく錢二百文出してやり、たうどう梯子を買ひとり、人の見る前、捨

てられもせず見物はごつと笑ひて置く。四「こいつはいくちもねえ目にあつた。北八、そこらまでかついでくれ。五「エ、とんだことをいふ。おめえ特ちなせえな。強又一番へこんだ。ごうはらな。

いかにせん梯子の親とこのやうな厄介ものをひきうけし身は

かくて四條通りを寺町へさがりて行くみちくも、梯子を持ちあぐみて、つぶやきながら。六「ナントきた八、手めえ附合を知らぬものだ、ちつとばかり持てくれろえ。七「おめえ心がらとは云ひながら氣の毒なこつた、さぞ重たかろ、かうしなせえアノ女ごものやうにあたまへきけ。乘(り)て持つて見なせえ。八「成程(なり)く(ト、手拭を畳み、あたまへ載せその上へ梯子を載せ、兩手に持ち添へ行く。往來の人)「コリヤなんぢやいな。浮雲うてならんわいな。九「ハイ(ト、向うがさつぱり見えねえで、歩かれぬわうらゐの八)「コリヤぢやうもんが行くさうぢや、おひや水(みづ)持て出やしやせんかいな(ぢやうもんがいくとは火事があるさうなといふことなり)わうらゐの人)「どこにぢやうもんがいくわいな。アレあこへ梯子もていくわいな、あほよく。十「何ぬかしやアがる。わうらゐ)「ふぬけなわろぢや、ハ、ハ、ハ、ハ。十一「イヤこの籠(かご)さくめら(ト、梯子をあたまへ載せたなりに、ぐつと振返れば、かの梯子の後(あと)さきにて往來のあたまをこつり)わうらゐ)「アイタ、ハ、ハ、ハ、何ぢやい、とめつさうな、此人

中で長い物横たはしにしくさつて、えらいあんだら(馬鹿)ぢやな、のうてん(天窓)ごやいてこませやい。十二「ナニたはことぬかしやアがる。わうらゐ)「わしが額の瘰癧(ろれい)が無(な)うなつた、そこらにやないか、見て下(くだ)んせ。十三「エ、おいらが知るものか、馬鹿(ばか)の面(おもて)な。わうらゐ)「えらい願(ねが)なわろぢや、たゝんでこませやい(ト、いづれもまきかぬ氣(き)の者共(ものども)と見えて、大勢(おほせ)ぢや(ト立ちかゝれば北八とめて「コレヤアこつちらが悪(わる)かつた、ごなたも御了(ごりょう)簡下(かんげ)さりませ、サア(ト、彌次(やじ)さん、あゆび(歩行)なせえ。十四「いめえましい奴等(やつら)だ、北八(きたはち)ごうも一人(ひとり)では持たれぬ、あどの方(かた)へ肩(かた)を入れてくれぬか。十五「ドレ(ト、コレヤアおれまでをとんだ目(め)にあはせる。

是(こ)もまた話(はなし)しの種(ね)よ遙々(とほとほ)と京(きやう)へ上(あ)りし梯子(はし)一脚(いちあし)

十六「エ、歌(うた)ごころぢやアねえ、ごうどうつちやつてしまひてえものだが(ト、今は二百(にひゃく)の錢(ぜに)も惜(おぼ)しからず。厄介(やくがい)物の梯子(はし)うち捨て、行(い)かんと、往來(わうらい)少(すく)な横町(よこまち)へはいり、そつとすておき、逃(に)げんとすれば、折悪(せつあく)しく人(ひと)に見付(み)けられて咎(とが)められ、せんかたなくかつぎあるき、又(また)いづ方(かた)へぞ捨てん(ト)と思(おも)ふうち、うかく(ト)三條(さんじやう)廻(ま)りに來(き)りければ、宿引(やどひき)と見えたる男(おとこ)「モシナおまい様(さま)方(かた)お泊(とまり)りかいな。十七「泊(とまり)り(ト)こちのうら方(かた)へお出(いで)でんかいな。十八「おめえ何處(どこ)だよ(ト)ツイあこぢやわいな、サア(ト)お出(いで)でんかいな(ト、うち連れて大橋(おほはし)を

てられもせず見物はごつと笑ひて置く。四「こいつはいくちもねえ目にあつた。北八、そこらまでかついでくれ。五「エ、とんだことをいふ。おめえ時ちなせえな。彌又一番へこんだ。ごうはらな。

いかにせん梯子の親とこのやうな川介ものをひきうけし身は

かくて四條通りを寺町へさがりて行くみちも、梯子を持ちあぐみて、つぶやきながら。六「ナントきた八、手めえ附合を知らぬものだ、ちつとばかり持てくれろえ。七「いかさまおめえ心がらとは云ひながら氣の毒なこつた、さぞ重たかろ、かうしなせえアノ女どものやうにあたまへきけ。八「乗つて持つて見なせえ。九「成程。一〇「ト、手拭を曇み、あたまへ載せの上へ梯子を載せ、両手に持ち添へ行く。往來の人「コリヤなんぢやいな。浮雲うてならんわいな。二「ハイ。向うがさつぱり見えねえで、歩かれぬわうらいのス。コリヤちやうもんが行くさうぢや、おひや水持て出やせんかいな。ちやうもんがいくとは火車があるさうなといふことなり。わうらいの人「どこにちやうもんがいくわいな。アレあこへ梯子もていくわいな、あほよく。三「何ぬかしやアがる。わうらひ「ふぬけなわろぢや、ハ、ハ、ハ。四「イヤこの籠さくめらト、梯子をあたまへ載せたなりに、ぐつと振返れば、かの梯子の後さきにて往來のあたまをこつり。わうらひ「アイタ、ハ、ハ、何ぢやい、とめつさうな、此人

中で長い物横たはしにしくさつて、えらいあんだら(馬鹿)ぢやな、のうてん(天窓)ごやいてこませやい。五「ナニたはことぬかしやアがる。わうらひ「わしが額の贅瘤が無うなつた、そこらにやないか、見て下んせ。六「エ、おいらが知るものか、馬鹿な面な。わうらひ「えらい願なわろぢや、たゝんでこませやい。ト、いづれもきかぬ氣の者共と見えて、大勢ごやくと立ちかゝれば北八とめて「コレヤアこつちらが悪かつた、ごなたも御了簡下さりませ、サア。彌次さん、あゆび(歩行)なせえ。七「いめえましい奴等だ、北八ごうも一人では持たれぬ、あその方へ肩を入れてくれぬか。八「ドレ。コレヤアおれまでをとんだ目にあはせる。

是もまた話しの種よ遙々と京へ上りし梯子一脚

四「エ、歌ごころぢやアねえ、ごうぞうつちやつてしまひてえものだが(ト、今は二百の錢も惜しからず。厄介物の梯子うち捨て、行かんと、往來少々横町へはいり、そつとすておき、逃げんとすれば、折悪しく人に見付けられて咎められ、せんかたなくかつぎあるき、又いづ方へぞ捨てん。と思ふうち、うかくと三條通りに來りければ、宿引と見えたる男「モシナおまい様方お泊りかいな。五「泊り。こちのうら方へお出でんかいな。六「おめえ仙處だや。ツイあこぢやわいな、サア。お出でんかいな。ト、うち連れて大橋

東海道中 膝栗毛七編卷之上 終

東海道中 膝栗毛七編卷之下

既に其目もはや西に落ちて、家毎に灯火を照し、門鎖す頃、三條小橋を打ち渡りて、かの旅籠屋の方に着きたるに、マと引「サア、お泊り様ぢやわいなやどやのていしゆ」コレハお早うお着きでござりますわいな、彌「アイお世話になりやすていしゆ」お荷物は此梯子一丁ていしゆ「コレハ氣疎いお荷物ぢやわいな、コレ〜おたこや、奥へ御案内申さんかい、女「ハイ〜」お出でなされませ(ト、奥へ案内するに連れ立ちて、二人は座敷へ通ると、亭主來りて今晚は、お客様が、いこお少うござりますさかい、お湯は焚きませぬ、ツイあこの小橋下る所にきやうとう綺麗な湯がござります、これへなどお出でなされ、彌「おいらアい、から彌次さんお前いくなら、いつて來なせえ、京の水で洗ふと、ごうせえに色が白くなるさかい、ふことだぜ、彌「この上、白くなつちやア話らねえから、よしやせうていしゆ」ときあなた方は近在から御出でかいな、喜「イヤわつちらア江戸でござりやすていしゆ」かいな、私は又梯子をお持ちなされたさかい、コリヤ近在のお方でお宿へ買うてお歸りなさるのかと存じましたか、ごして江戸のお方が梯子を何なされますぞいな、喜「イヤ是には譯がありやす、アリヤ江戸からことづかつて來やしたのさ、ていしゆ」ソリヤなんとして、あないなものを喜

「ハテ今貴方の云うてちや通りなら、是非ともお頼みなさるのちやないかいな 喜それ
はさうだけれど、いしゆ「なんぢやあると、私へお任しなされ 喜そんなことより、おらア
早く飯が食ひてえていしゆ「御膳も今あげますが、坊様はごうぢやいな 喜オ、サ、ほん様
早く食ひてえ、腹がへつて堪へられぬ、いしゆ「ハイ、畏りましたわいな(ト、勝手へ立
つて行くと、程なく女飯を出す。食事の内さまぐむだあれども、あまりくだくしけれ
ば略す。やがて膳をひきたるに、宿の亭主は北八がちやらくらにのつた顔して慰み半分こ
れもぶしやれ者なれば、年のころ六十近き薄汚れた髭むしやくしやの大坊 一人誘ひ來り
て)いしゆ「イヤもう召しあがりましたかいな、ときに只今お話し申しましたは此坊でござ
りますわいな(ト、引合すれば、此坊主鼻ひしやげにて鼻聲なり)「ハイ是は、ヒヤウ(よう)
お泊りなはれました、愚僧名はひやんとつ(丸哲)と申します、内かたのはんな(旦那)どの
がお話し故参りました 彌「コレハ御苦勞、サア、これへ、喜「コリヤ御亭主さん、だ
ん、お世話だが、氣の毒なことがありやす、いしゆ「なんぢやいな 喜「イヤ無様ながらア
ノお方では間に合ひますめえ、何故といふに、ちつとばかり素人狂言でもしたといふやう
な坊様でなけりやアなりやせん、いしゆ「ソリヤどうしたもんぢやいな 喜「イヤ先刻お話し
申した通り、さきの親元へいつて、のぼりてえが金がねえといふ事を返事した上で、かの

むすこが三百兩なければのぼられねえといふものだから、その心意氣をせにやアなりやせ
ん、所でかの盛衰記の梅が枝が無間の鐘の所作事、撞木を柄杓とこちつけて、チ、チ、チ
ン、ア、三百圓の金がほしいなア、などとその坊様にやらかして貰はにやアならねえと云
ふものだから、むづかしいといしゆ「イヤよござります、此坊も、ありやうは馬鹿村變之助と
申して、以前は宮芝居の女がたをやりをつた者ぢやさかい、えらでけ(出来)ぢやわいな、
幸こちの娘めが今無間のかね習うてぢや、何も慰みちよぼ(淨るり)語らして、やらしま
しよかいな、ぐわんてつ「ヒヤリましよども、わしふめ(梅)が枝をヒヤるさかい、ごなた
ぞへんた(源太)をやつて下んせ 彌「コリヤ面白い、鼻くたの梅が枝に、北八、源太は手め
えが相應だ 喜「エ、馬鹿ア云ひなせえ、わるいしやれた(ト、まじめになり小言いつてゐる
うち、亭主が指圖に十三四の娘三味線をかへて來ると、うちの女房下女めしたき迄次
間にかたまり、丸哲坊をそのかしながら見物する、彌次郎をかしく)「コレ北八アノ通り
かみさまや女中たちが見物してぢやが、一番おちをとる氣はねわかどうだ(ト、袖をひかれ
て、北八少し浮かれが來て)「いかさま見物が多いと張合ひがある、まよ源太におれが
らう、その代り言草は出鱈目にやるがいか、ぐわんてつ「ヒヨござります、サアおとら
さん、へん太の出端からやて下んせ 彌「ハ、ハ、ハ、髭むしやくしやの梅が枝もい、が、源

太が職を染返し、着物きてゐるも珍しい喜「コレ、東西ノト、此うち娘、淨瑠璃を語り出す「夜毎、くに通ひ来る梶原源太景季、千歳が奥を伺へば、ちやうどよい首尾幸と、すつと通れば梅が枝に、炬燵にこんと身をそむけ、そらさぬ顔でふく煙管、喜「コレ何が機嫌に入らぬやら、めつきりとちたせ振り、われらがやうな浪人の微た袴にはつかれまい
 「ジャウリ」すんご立つを待たしやんせ、ぐわんて「座ひき(敷)ばかりをふとめる(勤)ひやづ(管)で、今日此處へほら(貫)はれたは、文でひら(知)せて合點ぢやないか、じ「うり」憎い男と目に脆き涙は戀のならばせなり、喜「ア、コリヤ寄るなく、臭くてならねえ、そつちへぐつと寄つたく、ごうせに臭い梅が枝だぞ、ぐわんて「ひよりや、聞えませぬ、へんたさん、喜「エ、寄るなどいふに、コリヤ手短にやつてくれう、コリヤ坊主イヤ梅が枝、産衣の鎧はごうした、ぐわんて「ひちなん即滅と三百目に曲げたわいの、ナニ打ち殺した、ソリヤなせに、ぐわんて「そもやわたしがよこね(便毒)からほねう(骨疼)になつて山歸來服むほごにく、氣種はしく、此ひやな(鼻)をたすけたいばかりに、ひやね(金)ならたつた三百目で、低いひやなを落すか、ア、ひやなが惜しいなア、三下りうた「二八十六でふみ付けられて、二九の十八でつい其心、四五の二十なら、一期に一度、わしや帯解かぬぐわんて
 「エ、なんぢやの、人の心もひらずに、ふたひくつさる、ほんにひよれよ、彌「イヤ待つ

た、ト、これも堪へられず勝手に行き、以前の梯子、店の間に横倒しにしてありしを提げ来り、鴨居にうちかけ、二階の氣取にて彌次郎中段に上りながら、手拭を疊んで、大盃風にちよいとあたまに載せて「サア、源太が母の安壽の役だ、サア和尚、やらかしねえ、ぐわんて「傳へ聞くふけん(無間)のひやね(鐘)をつけば、有徳自在のま、ほれ(是)よりはよ、小夜(の)中山へ、遙の道は隔たれど、ほもひ(思)詰めたるあが(我)念力、此ひようづばち(手水鉢)をひやね(鐘)となせらへ、ひし(石)にもせよ、ひやね(金)にもせよ、志すところはふけんのひやね(ト、煙管おつ取り色々ある、此時彌次郎梯子の上よりうちがへの錢をばら、と投出しながら、自身に淨瑠璃語る「そのかねこ、にと三百文うちがへの錢を出す、みやま嵐に山吹の、花吹雪散らすやうにはあらでぐわんて「こ、つに三文、かしこに五文、拾ひはつめてひやん百銅、コリヤ雇はれの賃錢、さき取りとは有難い(ト、かき寄せて袂に入れんとするを、彌次郎兵衛梯子の上から丸哲をさらへ「ソリヤやるのちやアねえ、おれがのだ(ト、ひつたくらうとするに、丸哲はやるまいと争ふ拍子に鴨居にかけたる梯子外れて、彌次郎兵衛ひつくりかへり、ごつさり落ちると、梯子は丸哲の上になり、娘も脾腹の骨を打たれて、わつと泣き出せば、彌次郎腰骨をなでさすりながら「アイタ、おん、がんで「ア、ウ、く、ていし「ごしたぞやい、ト、家内中が狼狽へちちて、煙草盆

ひつくりかへすやら、行燈をうちこかすやら、座敷中たいまつくらとなり、泣くやらわめくやら、大さわぎと成り、亭主やう／＼あかりを持ち來り「ア、コリヤいと(娘)めはどうちやい、イヤ梅が枝がをかしたな目をしをるわい、コレ／＼氣を確かにせいやい がんばつ「ア、／＼苦しい、あしや拘りして、はつとほもう(思)うた)へいやらして、ひん(金)玉が上の方へ吊つたわいな、アイタ、／＼、彌ソリヤ困つたものだ、モン／＼御亭主さん梅が枝がさん玉を吊しあげました 喜さん玉のあがつたにはよいことがある、先刻見ればこの店に錢膏藥といふ看板が見えたが、それを頸窩へ張ると、さんが下る ていしゆ「何言はずぞいな、錢膏藥首筋へ張つたて、何下るものかいな 喜ハテ下る理窟さ、なぜと言ひなせえ錢があれば、さんがさがる ていしゆ「エ、なんのこつちやいな がんばつ「ア、わしやごうやらよいやうぢやが、いと(娘)さんはごうぢやいなやどの女房「コレ誰など一走り寸伯さんへ行てたもらんかいな がんばつ「わしやもうよいさかい、醫者さま呼んで來うわいなその代りお寺へは誰なと外のものやらんせていしゆ「エ、何ぬかしくさるぞい 喜「ホンニお氣の毒なこつた、娘御は何處を毆ちなすつた ていしゆ「脾腹えらう打ちをつたて、いたがりますわいな 彌「いたいひはらは都のうまれ、人にござされ、ひよんなめにあはれて、ア、お笑止千萬なことだ ていしゆ「イヤおまい、人の娘に怪我さして口合所ぢやあるまいがな

彌ハ、／＼、人の娘に怪我さしたとは、わしやごうやら恥かしい ていしゆ「イヤ笑ひ所かいな、總體こなさん達はけたいぢやぞや 彌「けたいとは何がけたいだね ていしゆ「何がとはちよこ云うてぢや、よう思うても見さんせ、わしや此年まで宿屋してをつたが、終に梯子持て來た客をとめたことはないわいな、一體遠國の方が何しに梯子持て歩かんすやら、こちやさんとよめんわいな、若しも屋根から躍りこむ衆ぢやないかと、家内のもんがぼやい(小言)てぢやあつたが、成程やば(奇怪)なこと爲兼ねん衆と見わるわいな(ト、亭主やつきとなり、少し言葉荒々しくいふ。此躍り込むとは 上方にては夜盜のこころを／＼ごりこみといふ故なり。もとより彌次郎兵衛むか腹たちなれば)彌「イヤおめえ可笑しなことをいふわつちらア、しら几帳面のお旅人様だ、乙にひねくつたことをいふと、了簡がなりやせぬぞ ていしゆ「オ、いしこやの、何云うたて、こなたたちが梯子もてござんしたから起つたことぢやわいな 女ばう「是いなア、そないな人に構はずと、こち來て下んせ、いと(娘)がアレ／＼ひよんな目つきしてぢやわいな(ト、涙ぐみてさわげば、亭主もうろ／＼)「コレ見やんせ、若しもいとめが死に居ると、こなさんは下手人ぢや、さう思うてゐやんせ 女ばう「アレ／＼、たはいがないわいな ていしゆ「コリヤ目がまうたのぢや、ヤアイおとらヤアイ／＼女ばう「いとイのふ／＼ト、夫婦は娘をかき抱き、水よ、きつけよと騒きたちて泣きわめけ

ば、彌次郎俄にうろたへ出し「エ、コリヤきた八ごうしたものだらう、己アもう此處にやアおられねえていし」コリヤ、おとら死んでくれな、ごうちやぞやい女房「おとらアのふていし」おとらやアい「エ、なさけない、コリヤたまらぬ」ト、うろくして立つたり居たり騒ぎたつとていし「コレこなさんごつちやへも遣ることならんぞ」彌「ハイハイ何處へも行きは致しませぬ、コリヤ」北八せんてえ半めえが悪い、何の有體に云へばいゝものをちやらくら嘘をついたから起つて、無間の鐘だのなんのと、ろくでもねえことを始めたから、此の騒ぎになつた、もとは手めえが發頭人だから、下手人はそつちへ譲るぞ

「オヤとんだことをいふ、當人はおめえだわな」彌「そんなら拳をして負けた方が下手人だ」立馬鹿アいひなせえ、おいらア知らぬ」ト、此うち醫者も來り、藥なごへさまさまま介抱するうち、娘やうく息吹きかへせば、皆々安堵し、彌次郎胸撫でおろし落ちつき

て、此うへはのやまるにしくはなしと北八を頼み、だんく詫びごとし、あやまり訃文をかきて、やうくと此いさくさをさまりける。もつとも北八が判にて、しかつべらしく書きたるその訃文、

一札之事

一我等此度ひらがな盛衰記淨瑠璃之内、安壽の役相勤め候所實正也、然る所梅が枝

無間之鐘相撞き候節、其金是に罷有る趣申之、打替之鳥目投げ出し候逆梯子爲之候故、九哲ごの陰囊御釣上げ被成、并に貴息女へ怪我爲致候段、全く右梯子鳴居へ打掛け候より事起り候趣、御腹立預、無申譯、段々誤入り候所、御了簡被下、忝く存候、然る上は、已來御宿御無心申候共、梯子抔決而持參致す間敷候、爲後日仍而如件

月 日

當人 彌次郎 兵衛

證人 北 八

此證文にて事をさまり、宿屋の娘も次第に快く、中直りの酒酌み交して、夜も更ければ二人はやがて打ち臥したるに、程なく夜明けて、家内の人々起き立ちたる物音に目を覺し支度調べ、そこく立ち出づるとて、彌「コレハ大きにお世話になりやした、殊に色々なことでお氣の毒なていし」御機嫌ようお出でなされ女ばう「モシ」お梯子がござりますわいな 彌「イヤもうそれはこちらに置いてくんなせえ、今日は所々見物して晩程又お世話になりやせうからていし」イエ、お持ちなされ、そしてこちや晩程はおさし合があるわいな」ト、一體亭主は此二人を胡亂に思ひ居たりし故、梯子も預かること氣味悪く、いかなる後難やあらんと、うけつけざれば、せん方なく、又かの階子をかつき、この所をたちいで

「ナント今日はごつちの方へまごつくだ」彌「イヤまで東に見物してえ所がある、がマ

「ア今日は北野の天神様へいきやせう(ト、だん／＼みちを尋ねて堀川通りに出で)喜」ときに思ひ出したことがある、ソレ伊勢の古市で京の人と一座したが、確にその人は千本通中立賣とやらいつたが、北野の天神さまへ行く道だと言つたちやアねえか 彌オ、サ邊栗屋の與太九郎か 喜コレ／＼、そいつが所へ尋ねていつて酒でも呑んでやらうちやアねえか 彌「ナニあたじけなすびが飲ませるものか 喜」ところをおいらが術に懸けて飲倒さう(ト、往來の人に千本通りを尋ね、中立賣に至り、邊栗屋與太九郎の方へやう／＼と尋ねあたりて例の階子を軒に立てかけて) 彌「御免なせえ(ト、格子戸をあけてはいれば與太九郎)誰ぢやいな、コリヤ珍しい、ようお上りぢやわいな 彌「扱マア伊勢では大きにお世話になりやした與太」なんのいな、サアこち這入りんかいな 喜「ハイお久しぶりやす與太」イヤこれは／＼、まだ表にお連れ様があるさうちや 喜「二人ばかり、誰もをりやせん與太」それでもアリヤなんぢやいな 彌「階子のことかえ與太」何ぢや階子おもたせかいな、コリヤきよとい喜「イヤおめえの所は中立賣ひよいとあがる所だといひなすつたから、もしも高い所なら階子かけて登らうと思つて、わざ／＼求めて持参いたしました與太」ハ、ハ、ハ、コリヤお出来ぢやわいな、時に何もお愛相がない、お支度はどうぢやいな、アイ今朝宿屋でたべたま／＼中食はまだ致しやせん與太」ソリヤお樂みぢやわいな、さ／＼(酒)などあげたいが、此邊に酒

屋はなし 喜「酒屋は直にお隣りにあるぢやアねえか與太」イヤあこでは小賣は致しませんわいな、折角のお出で、お煙草でもあがりなされ 喜「煙草はこつちのだから勝手に致しやせう與太」おまい方せめて、もちつとさきへよつてお出でなさると、きやうとい物があるわいな、桂川の若鮎生きてをるのを、鹽焼か魚田にすると、ねからはから甘いなんのといふやうなこつちやないわいな、イヤまだ四條の生洲が近いとお供して行くもの、あこの鰻は加茂川でさらして、とつと迷うたものぢや、きやうとう甘いかな、そしてあこは玉子焼をえらうようして食はすわいな、何ぢやあると、是程に大きう切りをつて、ぼつぼといき出るのを、南京の薄鉢に盛つて出しをるが、甘いというては、ねからく／＼んで持つやうぢやわいな、ホンニそれよりまた秋にお出でなさると、とり／＼の松茸ぢや、當所の名物で、これがまた外にはない、わいな新しいのを、すましの吸物にして、ちよつと山葵落して酒の肴にいたそなら、とつともう、なんぼ食うても、ねから飽きがないわいな(ト、咄しばかりして何も出さぬ故、北八こらへかね、そつとぬけ出て、隣の酒屋へ飲みに行く。話に身を入れて、與太九郎は一向北八の逃げたるを知らず) 與「イヤも一人のお方は何處へ行かんしたぞいな 彌」もう歸りやしたよ」はてさて、ねから知らなんだわいな、いつの間にいんで、あつたぞいな 彌「今、松茸のお吸物の出た時、中座致しやした與太」ソリヤ殘多い

後段にまだお菓子のお話し致すもの 彌「イヤもう、さき程から大きに御馳走になりやせぬ
 お陰で空腹じい、お暇致やせう與大「イヤお待ちなされ、よい所へお出でたわいな、ちとお
 話があるわいな、アノ伊勢の古市で御つき合ひ申した時のこといな、あの時の入用、金
 一兩ちやあつたがな、わしや算川ちがひして、金一分二朱ちから出して置いたさかい、
 コレ見なされ、道中の小遣帳に御やま屋のつけ(書付)も、何もかも、こないに細かに書き
 つけて置いたが、うちへ戻つて算用して見ると、おまい方一人前 二十四文ヅ、わしの
 方へお貰ひ申さねば、算用が合はんわいな、僅のこつちやさか、ごしてもだんないが、
 取るに如くはないさかい、お二人分二百四十八文御貰ひ申しましよかいな 彌「エ、御めえ
 も、今となつてきたねえことをいふ、そればかりのこと、うつちやつて置きなせえ、こつ
 ちでも立替へた事がありやすよ」ソリヤあげるのがあらば上げるさかい、言ひなされ、算
 用は算用ぢや、マアこちへ取るのが此通りぢやさかい、斯しましよわいな、はしたまけて
 あぎよわいな、二百文くしなされ 彌「エ、げえぶん(外分)の悪い、その時取ればいゝもの
 を(ト、小言八百いへごも合點せず、かれこれとせり合つた所が、はてしつかず、彌次郎面
 倒也とて、二百文出してやるよ)「ハ、ハ、ハ、コリヤ御きんとうぢやわいな、是から御
 まい方は天神様へ行かんすぢやある、そしたら序に平野さま金閣寺へいかんしたがよいわ

いな、遅なるさかい早う行て戻らんせ 彌「大きにお世話(ト、ふくれ面して立出づれば、隣
 の酒屋より北八によつこり出で來りて)「どうだ御馳走がありやしたか 彌「いめえましい
 目に逢つた、なんの手めえが尋ねて寄らすともいゝ物を、錢二百たいとられた 彌「ハ、ハ、
 、ごうして、いゝは其代り、アノ階子の厄介物を此處にうつちやつて置いて困らせ
 てやりなせえ 彌「ナアニ困るもんだ、ちさに賣つて錢にするは、あの野郎めに階子までた
 い取られて詰るものか、やつぱりかついで行かう(ト、それより道を尋ね、行く程に、北
 野の下の森といふに至る。此處は至つて賑やかにて、芝居もあり、見せ物、豆藏、講賣、
 講釋、又唐茶釜と異名せし段簀張の水茶屋體なるもの、所々にあり。これに可笑しき趣向
 あれども、作者思ふ事あれば省きぬ。これより天満宮社内へかゝる道に、菜飯日樂をうる
 茶屋 夥しくあり。赤前垂の女軒に出で、)「あなたお休みなかいな、菜飯おでんあがらん
 かいな、茶々あがつてお出でんかいな 彌「モシ、わつちらア天神様へ參詣してけえりに
 おめえの處で休みやせうから、此階子を此處に置いてくんなせえちや屋「ハイ、お預かり
 申しましよわいな、お早う行てお出でなされ 彌「お頼み申しやす(ト、階子を茶屋の門にた
 てかけておき、行き過ぎて)「ヤレ、重荷卸した、なんのけえりに寄るものか、ナント北
 入階子をすてた智慧はどうだ 彌「ハ、ハ、ハ、面白くもねえ(ト、さやうどう前より右近の馬

場ばにいたる。此處こゝはいつも借馬かろうまあまた出て、馬うまの稽古けいこあり、見物けんぶつ夥おほし。幸さい「オヤすさまじい人ひとだ、何かあるさうだ」ト、立寄りたちよりて人を押分けおしわけみれば、馬うまのかけを乗のる人ひと「ヒヤア、トウ／＼／＼けんふつけんふつのときのこゝ」ワアイ引見物ひけんぶつ「皆みなえらい下手へたぢやな、七軒しちけん尻しりかして腰こしがふなつきをる、アノ蒨せきん玉たま見るやうな天窓あまなまの親父おやぢめがえらうよう乗のりくさるわい見物けんぶつ「アリヤ知しれたこつちやわいな、博勞はくろうの親方おやぢぢや見物けんぶつ「かいな、アレあつちやの男見おとこけんやんせ、手綱たづなを綾あやに取とつて、あないな手てつきしてゐるをる、アリヤ大おほかた織屋おりのやの手傳てでぢやあるぞい、そしてアレ／＼十二じふに、坊ぼくの弟子でし坊ぼくが珠たま數かず爪つめ繰くるやうなことをして、手綱たづな持もつてぢやわいな。幸さい「おれも一鞍いっくわん乗りてえな、向むかうに見みてゐる姉あね様にト、人ひとごみの中なか、女おんな連つられが二三人にんた立たつて見てゐる後あとへ廻まり、見物けんぶつしながら前に居ゐる娘むすめの尻しりをちよいとつめる」女おんな「オ、痛いたやの、誰たれさんぢやいな、コレおまるさん、お前まへこち來きてかしんかいなまゝ」なんぢやいなむすめ「だれぢやいら、わしがお尻おしりをつめつたわいな。としまの女おんな「ソリヤ女子おんなの無ない國くにで生うまれた人ひとさんぢやあるぞいな、構かまはんすな、ほつて置おかんせ。綱つな「エ、北八きたはちか、わりい洒落しやれをするなまゝ。幸さい「ナニおいらア知しらねえト、言いひさま、憎にくさも憎にくし、かの年増としま女の尻しりをつめつてやらうと、わきめをしながら、そばにより年増としまの尻しりと思おもひ、おぶつてゐる子の尻しりをおもふさまつめると」見けん「ア、痛いたい／＼ト、わつと泣なく。としまの女おんな「誰たれぢやいな、わるいことさんすわいな。おぶまつてゐる見けん「アノおぢさんがつめつたわいのう。女おんな「エ、好すかん人ひとさんぢやわいな。綱つな「堪かん忍にんしなせえさりと外間げまのわりい男おとこだト、足早あしはやにすご／＼と此所こゝをすぎて、南みなみの御門ごもんより入りて天満てんまん宮みやの本社ほんしゃへまゐる。」

おまもりを首くびにかけつゝ尊たふとまんさいふ(宰府さいふ)のみやをうつす神垣かみかき
 北野きたの天満てんまん宮みやは昔むかし近江おうみ國くに比良ひら社しゃの神主かみ良種らよたね、神勅かみさだめを蒙かかり朝日あさひ寺てらの僧そう最珍さいしん、右京うきやうの文字あやこ等らと力を合あせて靈れい祠しを作り、天德てんとく三年ねん右大臣みだじん師輔しほ卿けい、巍き々々たる大たい厦かをあらため營いみたまふ、今いまの北野きたの宮みやこれなり。社頭しゃがしらに渡邊わたなべの綱つなが納なめしと言いひ傳つたふ石燈籠いしとうろう昔むかしむしてあり。

綱つなの名なはいまだに朽くちぬ石燈籠いしとうろう昔むかしを今いまに三ツみつぼしの紋いづ
 東向ひがしむかひ觀くわん音おんは梅櫻うめざくらの二樹ふたきをもつて菅神くわんじん御手ごてづから刻きざませ給たまふ所ところなりといり。
 御利益ごりやくは四方よかたにかをれる觀世音くわんぜん梅櫻うめざくらにてつくりたまへば
 それより社内しゃないを援たすけて平野ひらのの社しゃに參まゐる。此御神このごんかみは四座よざにて、今木神いまきのかみ、久度神くわどのかみ、古開神ふるあきのかみ、比ひ咩め神かみなり。

こゝろよく飯めしくふために本ほん隱いんの平野ひらのの神かみを祈いのりこそせめ
 こゝに紙屋川かみやがはのほとりに二軒ふたけん茶屋ちやあり。二人ふたりは空腹くうぷくとなりたるに、支度しだくせんぞ此茶屋こゝちやに這は入れば、女共おんなども出迎いでむかひひて、女おんなようお出いででたわいな、ツイト奥おくへお出いででなされ。綱つな「なんぞ甘あまえ

物があるかね。飯も食ひたし、酒も飲みたし、マアちよびとした物で一盃早く頼みやすぞ
 (ト、奥の縁先に腰を懸けると、女銚子盃をもち出る。肴は乾鮎の煮ひたしなり) 彌「早速
 これはありがてえ、女中一つ注ぎ給へ、オットありやす〜」 女「お肴あぎよわいな、コリ
 ヤわたしが心のたけぢやぢやえ 彌「ハア此鮎がおめえの心意氣とはどうだ 女「わたしはナ、
 おまいさんが川鮎といふこつちやわいな 彌「コリヤ有がてえ、そんならお前にあげやせう
 ドレわつちも心意氣の肴上げやせう 女「オホ、この生姜がなんとしておまいさんの心
 ぢやえ 彌「わしやはぢかみイ 喜「ハ、このちつけるもんだ、さきに女中、田樂で飯を
 早くゝんなせえ 女「ハイ〜只今(ト、やがて女田樂と飯を持ち來たる。二人は食事しながら
 ら見れば、衝立のあなたに、さも穢ろしき出家二人、麻の法衣の汚れたるを着て、是も田
 樂にて飯食ひながら、一人の僧のいふを聞けば)「ナント役戒坊、きさま髪はどこで結ぶぞ
 いの、ヤ〜」オ、持戒坊、わりさまもわしが結ぶ所で結はんせ、あこはきやうとう善う結ぶ
 わいの、わしや久しうのんこ鬘に結うてぢやあつたが、今は流行らんさかい、コレ見やん
 せ、雷子にいうて貰うたが、えらう氣持がよてたまらんわいな(ト、いひつゝ、淺黄の頭巾を
 取れば、此坊様身には麻の法衣着ながら、あたまは巻髪にて、芝居のやつしといふ髪なり
 彌次郎兵衛北八これを見て膽をつぶし可笑しき半分、不思議さうにうかどひ見れば)「やつか

「ハ、ア、なる程よう結ひくさつた、わしや又のちの弟子坊に結はせをるが、もう〜
 月代がむちやぢやさかい、見て下んせ、いつの間やら、こないに剃りこかしをつたわい
 な(ト、これも頭巾を取れば、鬘は頸窩にある、剃り下げ奴なり。彌次郎餘りに合點ゆかす
 こたへかねて)「モシお隣りのお客様、わつちらは遠國の者でござりやすが、所々歩いてゐ
 るうち色々様々な珍らしいことも見聞きしやしたけれど、御出家方の髪結うたを見るは、
 まことに今が初め、ごうも合點がゆさやせぬ、卒爾ながら御まい方は何處のお方でござり
 やすねやつかいば〜」ハ、アこのあたまの御不審かいな、こちや空也堂の僧ぢやわいな 彌「な
 る程な、話に聞いてゐやした、かの茶筌賣るお方だなやつかい」さよぢやわいな、こちの宗
 體は昔から由緒があつて、こないに身には染衣を着しながら、天窓は大俗凡夫ぢやわいな
 彌「それ 聞えやしたが、なせ又おまい方のあなざる所を空也堂といひやすねやつかい」さ
 ればいな、こちの宗體では、ごしたこつちや〜ら、代々皆えらい大食で飯ぢやあろが何ぢ
 やあろが、何ばでもよう食ふさかい、齋非時に呼ばれて行ても、強ひつけられて。もつと
 くふやうぢやいななど、人毎にいうたを、すぐに空也堂といふわいなやつかい」そぢやさかい
 コレ見やんせ、ちよど此處へ來ても二人でお鉢三杯食うたわいな 彌「ソリヤ途方もねら大
 ぐらひだ、尤もわつちらも食つたものさ、何日やらも信濃へ行きやした、ナニカあつちは

物があるかね、飯も食ひたし、酒も飲みたし、マアちよびとした物で一盃早く頼みやすぞ
 (ト、奥の縁先に腰を懸けると、女銚子盃をもち出る。肴は乾鮎の煮ひたしなり) 彌「早速
 これはありがたえ、女中一つ注ぎ給へ、オットありやす〜」女「お肴あきよわいな、コリ
 ヤわたしが心のたけぢやぢえ 彌「ハア此鮎がおめえの心意氣とはどうだ 女「わたしはナ、
 おまいさんが川鮎といふこつちやわいな 彌「コリヤ有がてえ、そんならお前にあげやせう
 ドレわつちも心意氣の肴上げやせう 女「オホ、、、此生姜がなんとしておまいさんの心
 ぢやえ 彌「わしやはぢかみイ 喜「ハ、、、こちつけるもんだ、ときに女中、田樂で飯を
 早くゝんなせえ 女「ハイ〜只今(ト、やがて女田樂と飯を持ち來たる。二人は食事しながら
 ら見れば、衝立のあなたに、さも穢ろしき出家二人、麻の法衣の汚れたるを着て、是も田
 樂にて飯食ひながら、一人の僧のいふを聞けば)「ナント役戒坊、きさま髪はごこで結ふぞ
 いの、やく「オ、持戒坊、わりさまもわしが結ふ所で結はんせ、あこはきやうとう善う結ふ
 わいの、わしや久しうのんこ鬘に結うてぢやあつたが、今は流行らんさかい、コレ見やん
 せ、雷子にいうて貰うたが、えらう氣持がよてたまらんわいな(ト、いひつゝ淺黄の頭巾を
 取れば、此坊機身には麻の法衣着ながら、あたまは巻髪にて、芝居のやつしといふ髪なり
 彌次郎兵衛北八これを見て膽をつぶし可笑しき半分、不思議さうにうかどひ見れば)「やつか

「ハ、ア、なる程よう結ひくさつた、わしや又のちの弟子坊に結はせをるが、もう〜
 月代がむちやぢやさかい、見て下んせ、いつの間やら、こないに剃りこかしをつたわい
 な(ト、これも頭巾を取れば、鬘は頸窩にある、剃り下げ奴なり。彌次郎餘りに合點ゆかす
 こたへかねて)「モシお隣りのお客様、わつちらは遠國の者でござりやすが、所々歩いてゐ
 るうち色々様々な珍らしいことも見聞きしやしたけれど、御出家方の髪結うたを見るは、
 まことに今が初め、ごうも合點がゆさやせぬ、卒爾ながら御まい方は何處のお方でござり
 やすねやつかいば〜」ハ、アこのあたまの御不審かいな、こちや空也堂の僧ぢやわいな 彌「な
 る程な、話に聞いてあやした、かの茶筌賣るお方だなやつかい」さよぢやわいな、こちの宗
 體は昔から由緒があつて、こないに身には染衣を着しながら、天窓は大俗凡夫ぢやわいな
 彌「それ 聞えやしたが、なせ又おまい方のゐなざる所を空也堂といひやすねやつかい」さ
 ればいな、こちの宗體では、ごしたこつちや〜ら、代々皆えらい大食で飯ぢやあるが何ぢ
 やあるが、何ばでもよう食ふさかい、齋非時に呼ばれて行ても、強ひつけられて。もつと
 くふやうぢやいななど、人毎にいうたを、すぐに空也堂といふわいなやつかい」そぢやさかい
 コレ見やんせ、ちよど此處へ來ても二人でお鉢三杯食うたわいな 彌「ソリヤ途方もねわ大
 ぐらひだ、尤もわつちらも食つたものさ、何日やらも信濃へ行きやした、ナニカあつちは

飯ごころでござりやすから、先朝すつと起きると、茶うけにとて座頭の天窓程ある握り飯を出しやすが、あつちの手やひは子供てさへ夫を十四五程づゝも食ひやす、わつちは折わるく氣分が悪くて、ろくに食もいけやせなんだが、十七八計りも食ひやしたらう、さうすると頓て飯が出来たとつて、其處の亭主が云ふには、江戸のお客はお鹽梅が悪いといふことだから、今朝は麥飯をたきましたとつて、何が薯蕷汁を吸つた程に吸つた程に、摺鉢の二十ばかりも其處に並べてあると思ひなせえ、さうすると、椀へ盛るが面倒だと、家内の奴等は皆其摺鉢一ツづゝ引うけて、麥飯をその中へ山のやうに盛つてくらひをる、わつちも絶食同然でゐたが、麥は好物で堪へられやせんから、せめて一摺鉢もやつて見ようと思ひかゝつた所が、口あたりがいゝから、するゝと、なんのことなしに這りこんで、うごう摺鉢に五六杯も食ひやしたらうが、今ではとんと食が減りやしたやつかい「ソリヤおまいも飯は素人ぢやないわいの、ナント飯盛さんせんかいな 彌アノ飯盛が此處にもありやすかね やつかい」ハ、ハ、ハ、おまいの云うてちやは道中の飯盛ぢやある、そぢやないわいな ちとやら仲間でするは酒飲も衆が酒盛といふ格で、飯を互に食ひあふを飯盛といふわいな、ちとやて見やんせ、幸こちもまだ飯が食ひ足らんさかい、相手はしさの玉手箱ぢやわいな 甚ごうやら面白さうなこつたが、それはどうするのでござりやすね やつかい「マアな

んぢやあると、やて見なされ、モシ女中ちよと来てくだんせ、お鉢のおかはりぢや 女ハイ、ト、飯鉢に一杯持ち來と「やつかい」サア始めんかい、イヤ亭主役にわしからやろわいな、ト、茶づけ茶碗に飯を盛りてさつゝと食ひしまひ「やつかい」サア、お前さそかいな（ト、彌次郎へかの茶碗をつきつけて杓子を取り）酒盛ならお酌といふ所、飯盛ぢやさかいお杓子致しましよかいな（ト、彌次郎が持ちたる茶碗へ飯を盛りつける）彌「コリヤわつちが食ふのかね もつかい」左様ぢや、彌「ハ、アきこえやした、盃をまはす心だね（ト、彌次郎かの一杯の飯を食ひしまひて茶碗をやつかいの方へさすと）やつかい」コリヤきやうとい、おさへましよがい 彌「イヤまづゝゝ やつかい」はて、お前一杯重ねなされ、わしすけてあぎよわいな（ト、無理に又一杯盛り付ける）彌「そんならおめえすけてくんなせえ（ト、飯の盛つてあるまゝ茶碗をもつかいに渡せば、もつかいぼう三口ほど食ひて）これも酒ぢやと、つけざしぢやけれど、飯ぢやさかい食ひさしぢや 彌「エ、お前のその髻むしやくしやと、不掃除な口中で食ひさしはあやまるの、しかもソレゝゝ水鼻を垂らしてさ やつかい」ナニ云うてぢやぞいな、そないな事いうて、飯盛附合がなるかいな、早う食はんして誰になさうんしたがよいわいな 彌「ソリヤ情ない、さてゝ飯盛といふものはきたねえものだ、もうゝわつちには御免なせえ やつかい」イヤおまい麥飯摺鉢に四五杯食はんしたというてぢや

ないかいな、卑怯なこいはんす、斯うさんせ、一擧いかんせ 彌「そんなら擧でまゐらうかやっかい」よかろわいの、その代り否應さんと云はさんぞや(ト、かの茶碗の上へ盛り添へて)やっかい「サア〜薩摩拳ぢや、サンナ 彌「ムメで〜」やっかい「トウライ、えらいか〜」サア〜あがりなされ、其癖お鉢のおかはりぢや(ト、無理無體つきつけられ、彌次郎面倒なりと我慢を起し、やう〜と食ひしまへば)やっかい「も一つやらんせ、お鉢のかはり目ぢや 彌「イヤもう〜御免〜」やっかい「コリヤやくだいぢや、おまいは田舎者ぢやな、麥や挽割の混ぜたのをあがりつけてゐさんすさかい、こないな一本生の米ばかりの飯はようあがらんもんぢやあるぞいな 彌「ナニわつちらア 猪の牙の様な飯でなくちやア食ひやせんやっかい」さいな、これが猪の牙ぢやわいの 彌「そんなら、おめえかはり目のあひを頼みやすやっかい」ソリヤよいわい、とてもものことに大きなもんで、おつもりにしよぢやないかいな(ト、菜漬の入れてありし井をうちあけて飯を盛り、べろ〜と食つてしまひ、もつかいばうへ廻すと、これもしこたまよそつて食ひしまひ)サアあぎよわいな、イヤ飯でにちや〜する(ト、縁先の手水鉢へ井をいれ洗ひて)「サア澄ましたわいの、おつもりぢや〜」 彌「イヤもういかなぬ、そしてきたねえ、人が雪隠へいつた手を洗つた手水鉢ですました井、それでどうして食べるものか やっかい」それなら此茶碗で 彌「イヤもう腹が裂けるや

うだ、それに聞きなせえ、今の一杯やらかしてゐた時、何か懐のうちでぶつ〜りといふ音がしたから、搜つて見たら越中禪の紐が切れる位に腹が張り切つて来たものを、もう〜お許し〜 やっかい「ハ、ハ、ハ、もうよしなされ、おつもりぢや、コレ女中なんぼぢや勘定してくだんせ 女「ハイ〜、御いつ所に致しましよかいな やっかい」そぢやわいな 女「御酒とおでんの代もつは十文でよござりまするが、おめしは五百七十二錢頂きたうござりますもつかい」ソリヤ氣疎い安いもんぢや、割合に致そかいな(ト、此代錢勘定して半分の拂ひすれば) 彌「ソリヤあんまりだ、おめしはおめえ方が、しこたまあがつて、わつちはたつた一膳か二膳食つたもの、二ツ割りとは不承知だね やっかい」何言はんすぞいな、一座で飯盛さんしたもの、よう食はんはお前方の勝手ぢやないかいな(ト、やツつかへしつ、これも理詰めに、彌次郎せんかたなく、どう〜二ツ割りにしてこの所の拂ひをなしければ、僧二人は早くもさきにたちて出で行きたるに) 彌「ハ、ハ、ハ、ハ、いゝ見せものだ、サア彌次さんどうだいかねえか 彌「オ、サアきてえが、あんまり食ひ過ぎて動かれねえ、どうそ手を引いてそろ〜立たせてくれ 彌「エ、意氣地のねえ、サア立ちなせえ 彌「コレサ手荒くしてくれな、飯が口から出るやうだ 彌「テモ、きたねえことをいふ、サア〜立たなく〜(ト、いひつゝ彌次郎の手を取り引き立つれば、やう〜に起ちあがり出かける 女「おゆるりとお

出でなされ、喜アイお世話になりやした、サア〜彌次さん、いかねねか、どうする〜
 はじめから人を茶にして何杯もやたらにめしを空也寺の僧
 是よりまた天神の社内にかへりたるが、東の門より一條通りに入る道を知らず、うか〜
 ともと來し南向の門を出たるに、思はずもかの梯子を預けし茶屋の門近くなれば、彌次郎
 兵衛心づきて「待て〜、さつきの梯子が、やつぱりあそこにてたてかけてある、エ、こつ
 ちの方へ來なんたらよかつたものを、北八また後へ戻らうか、喜成程あそこへ休まずに直
 ぐ通りにしたら、ひよつと見付けた時、例の梯子持つていけといふだらうし、と云つて又
 後へ戻るも業腹だ、どうぞ宜智恵がありさうなものだ」と立ちどまりて思案してゐるうち
 右近の馬場の借馬一疋博勢がひいて來るを見るより、喜イヤアいることがあるぞ〜、ア
 ノ馬の横ッ腹の方にくツこいて、茶屋の前を通れば、馬の蔭になつてゐるから、よもや見
 つけはしめえちやアねえか、喜オ、サそれがい〜、コリヤ大出來だ〜（ト、あとより來る
 借馬を見合せゐるうち、やがて傍近くなれば、二人ともならんで馬の蔭に隠れ行くと、丁
 度かの梯子を預けし茶屋の前に至りて馬は立ち留まりて動かす。二人は駈け抜けて、茶屋
 に見つけられてはせんなしと思ひ、同じ馬の横腹の方へついで、立どまりゐる。博勢馬を
 打ちて「エ、このならずめは、何しをるのぢや、日が暮れるわやい（ト、打てども動かす、

頃て馬は小便をしやア〜。彌次郎北八にとばしりはねて小便だらけとなり（喜エ、
 コリヤ又情無い目に逢ふことだ、喜ア、臭い〜、ソレ彌次さん、おめえの方へ流れるは
 喜畜生めが、とんだ目に逢はせる、これは〜（ト、飛び退けば、むかふの茶屋の門先に
 ゐる女が目早く見つけて）「モシナ〜、こつちやでござりますわいな、サアお這入りなさ
 れ、喜ソリヤこそ見つけられた、喜コリヤたまらぬ〜（ト、一目散に駈け出せば、茶屋の
 亭主とんで出で）「コレナ、梯子がござりますわいな、オ、イ〜（ト、呼び立つれど耳にも
 入れず、二人は眞黒になり逃げる。○）兩人はやう〜と思をはかりに駈け出して、下の森を
 打過ぎ、もとの千本通りに出、今宵は島原の廊中を見物して、安見世もあらば、一宿せば
 やと申合せて、往來の人に道すがらを尋、千本さがりて行程に、町をはなれて東寺に至る
 手折らんと手を出す人を鬼ならめ東寺わたりの花の盛りに
 それより壬生寺に参りて、こゝに霞門先きに建てよせたる怪しの茶見世に引こまれて、
 其夜、宿と定め、打ち臥したるが、あくる日、島原を見物し、朱雀野より丹波街道を横ぎ
 りに淀の大橋に至り、爰より下り舟に打乗りて大阪へと赴きける。

東海中道 膝栗毛七編卷之下 終

東海中道 膝栗毛八編序

二七六

凡而事の十分なるは、缺くるの兆、九分なるは充つるの首なれば、八の數を以て、永久の嘉瑞とし、物のめでたき極位とする事は、先づ大京都の八百八町、長にして盡きず、神に入百萬神、永く跡を垂れ給ひ、法華經の八部、末世に傳へて弘く、歌書には八代集を最上とし、易に八卦、十露盤に入算、食言にも八百の相場あれば、質も八ヶ月を限とす。予が膝栗毛も此八編に至つて足を洗ひ、引込思案の筆をおくこと、花の半開、酒の微醉に託けたれど、質の所は逃げ口上、智恵袋扱底なれば、はたき仕舞ひし膝栗毛の趣向、據なくおつもりの大版着、長町泊から滑稽のはじまり。

文化巳孟春

十返舎一九識

東海中道 膝栗毛八編卷之上

押照るや難波の津は、海内秀異の大都會にして、諸國の賈船木津安治の兩川口に船首を並べ、錨を連ねて、こゝにも諸の荷物を嚮ぎ、繁昌の地云ふばかりなし。殊更花の春は淀川に棹さして、櫻の宮に遊び、網島の餅卵に酔を催し、夏は難波新地の納涼に螢を狩り、豆茶屋に腹をこやし、秋は浮瀬の月、冬は解船町の雪景色、四季折々の眺め多かる中に、目枯れぬ花の曲輪は、いつも盛りりの春の如く賑ひ、道頓堀の芝居は、常も顔見せの心地し。で群集絶えず。かゝる名譽の地を見残すも本意なしとて、かの彌次郎兵衛北八なるもの伏見の畫舟に途中より飛乗りして、早くも大阪の八軒屋に到り、爰より舟をあがりたるは最早黄昏時にして、東西を知らず、南北をわきまへざれば、人に尋ね問ひつゝ、長町をさして行く程に堺筋通を南に、日本橋へ出でたりければ、宿引ごもこゝに居合はせ、兩人を見かけて宿の相談をしかぐるに、早速極まり、直様此長町の七丁目なる分銅河内屋と云ふにぞ連れ行きける。宿引先に駈け抜て、「サア、くお客様を御供して来たわいなやどの。ばんとう」これはようお出でなされました、お幾人様でござります。彌「へい同行四十七人ばんとう」ナニ四十七人様、コレ、おさんどのや、大勢様ぢや、西の奥の間を打抜いてお

一七九

げさんせ、よう綺麗に掃き出したがよいわいの、コレ久三、お脚お洗ひなさるお湯はごう
 ぢやい、ぬるてもだんない、水なごうめてあげませい、早うく、時にもしその四十七人
 様はいこお後かいな 彌「イヤ是は先達で鎌倉へ發足、われく、兩人はこれより泉州堺の天
 川屋 ばんとう「へエ、何のこつちやいな、矢ッ張りお二人かいな、コレくおつんや、お二
 人ぢやといな、こつちやのお一人居しやしやる狭い所にさんせおつん「ハイく、御案内致
 しましよかいなト、此うち兩人は脚を洗ひ上りて見るに、此宿は常所隨一の大家にして凡
 そ間敷七八十もありと云へり。兩人女に連れられて行くに、奥の口もとの六疊ばかりなる
 小座敷へ這入る。外に一人此間に泊り合せゐることなれば「ばんとう「お赦しなされませ、ご
 うがモシ御究窟にござりませしが、御一所になされて下さりませ 此旅人は丹波の人「だんない
 てや、サアく此方へわせさつしやい 喜「これは御免なせえ 彌「モシわつちらア二三日返
 留して、所々見物がしたいからお頼み申しやす ばんとう「ハイ畏りました、先づ御ゆるり
 とト、云ひ棄て、勝手へ行く「たんばの人「コリヤわごりよ達は、ごこから來よりました、喜
 「わつちらア江戸でござりやす、お前は たんばの人「私は丹波の笹山在郷、今度高野へ行き
 よります、コリヤあぢいな縁で相宿しよりますわいな 彌「兎角旅は道連れ、お心安いがよ
 うござりやすト、此内やどの女「「まゝ上げましよかいなト、三膳持ち來り据ゑる。食事

の内、色々あれども略す。やがて飯もすみ、湯にも入りて畢ふと、大痘痕の女按摩、厭ら
 しき風にて探りく來りて「お療治はよござりますかいな、ごうぞ揉ましておくれんかい
 な 彌「イヤ按摩さんか、お前女だの、しかも生きてゐらア、北八ごうだ揉まねえか 喜「此
 方から揉んでやりてえあんま「オ、可笑し、何云ひぢや、お前さん方はお江戸ぢやな、
 わしやアノお江戸のお方が好きぢやわいな、殿達は男らしうて、ものいひぢやとこが、え
 らいすつぱりとしてよいわいな 喜「お前薩張目が見えやせんか、見ると此内にとんだ好
 い男がゐるに見せてえなアあんま「そぢやあるぞいな 彌「ナント按摩さん、此男よりわつち
 が好い男か、さうして年はごつちがわけ(若)え、當て、見なせえ、當つたなら二人ながら
 揉んで貰ひやせうあんま「ソリヤいつき(直)にあてるわいな 喜「コリヤ面白サアおいらは
 幾歳位だあんま「待ちなされ、お前さんは二十三四 喜「コリヤきついは、男は好、男だらう
 ねあんま「さよぢや、お顔はよう道具が揃うてぢや 喜「缺けてあつて、つまるものかあんま「
 お目がえらい、つかいお目ぢやあるがな、そしてお鼻が 喜「高いか低い、かあんま「かう云う
 たらお腹が立たか知らんが、確に獅子舞鼻ぢやあるぞいなたんば「ハ、ハ、ハ、きよといく
 彌「おいらはごうだあんま「貴方はいこ更けてお出ぢやわいな、お齡は四十ばかりで、お色
 が黒うて、鼻の開いた髯だらけなお顔ぢやあるがな 喜「奇妙く、あんま「そして、ぼやけ肥

りによろ肥えてゐなさなぢやある。彌「イヤ違つたな」おぼははひんなりとして色男「喜
 嘘をつく、コリヤ按摩さんが勝た、揉んでやりな。彌「約束だから仕方がねえ、爰へ来てく
 んなあんま」オホ、お、それへ参ぜうかえ」彌「彌次郎が後へ廻りもみにかゝると、此内
 女の菓子賣箱を重ねて持ち來たり」彌「ようお泊りぢやわいな、菓子買つておくれんかえ。喜
 ヒヤア、だん／＼と出て來るは、なか／＼い、菓子だぞ、お前わちらに賣る氣か、くわしうり
 「さよぢや、こちやお前さん方に賣りたうて、ならんさかい、漸う走りまうて参じたわ
 いな。彌「上方の女中は手があるの、くわしうり」手も足もないが、むぢやにお前さん方に惚れ
 たのぢやわいな、さう思うてごうを菓子買つておくれや、ドレ茶々汲んでさんじようかえ
 「ト、菓子箱を突き出し置いて、勝手へ行くと」喜「エ、面の憎い程饒舌る奴だ」ト、云ひつゝ
 彌次郎に目配せして、そつと菓子の箱の下に重ねてある箱より何やら菓子を五つ六つ取り
 出し、後へちやつと隠すと、かのあんま手を出て、其菓子をそつとひつたくり袂へ入る、
 を、北八一向に知らず。彌次郎も同じく菓子三ツ四ツ取り出すに、勝手より人音する故、
 ちやつと箱はもとの如く重ねて置き、かの菓子は後の方へ隠すを、あんま取てこれをもそ
 つとせしめて、袂に入る、を、彌次郎も一向に夢中作左衛門なり。此うち菓子賣の女、茶
 を汲んで盆に載せ持ち來りて」サア温いのをあがりなされ。彌「折角お前來なさつたものを

満更すげなくもしられめえ」ト、菓子箱の中より彌「是はいくらだ、くわしうり」ハイ／＼四せ
 んづ／＼ぢやわいな、ソリヤもむな(不味)い、こつちやあがつて見なされ」ト、並べたて、薦
 むるに、彌次郎も北八も丹波の人もてんでに取つて食らふ)喜「コウ待ちねえ、無上に食つ
 て數が知れめえ、くわしうり」よござります、なんぼなどあがりなされ、こちや只でもあげよ
 わいな、ノウおたこさんあんま」さよぢやわいな、サアよござります、此方のお方もみまし
 よかいな。彌「オヤもうしめえかあんま」サア貴方、私が傍へ寄て、かんしかいな。喜「ソレよ
 しか／＼、くわしうり」茶々最一つあがりなさらんかいなあんま」お鍋さん御馳走なされ、此お
 方々はえらい御心好ぢやわいな、サア貴方お横に。喜「もう肩は終えか、ごうぎに端折るの
 たんば」コリヤわり様達の口まつにかゝつて、えらう菓子食てのけた、何ぼぞい、くわしうり」
 ハイ／＼お三人様で二百四十八錢でござりますわいな。彌「ヤアとんだことを云ふ、何そん
 なに食ふものか、北八は幾つだ。喜「さればのいくらであつたかたんば」私は四文のを四つ食
 たから、ソリヤ二十やるぞ。彌「そんなら後は二人で出すのが、馬鹿をなしい菓子よりか籠
 旅の方が安い、くわしうり」そぢやて、あがりなされた物をしよ、ことがないぢやないかいな
 オホ、お、彌「イヤ、オホ、お、月ぢやアねえ、そんな日に送やる、ト、小言云ひながら、
 詮方なく錢を拂ひやると、此内あんまももんで畢ふと)喜「あんま様はいくらだ、んま」ハイ

お二人でおあし一すぢおくれたな 喜ナニ五十づゝか、コリヤ高い〜(ト、これも後では是非なく、百文出してやると二人は出て行く) 彌上方の女にやア油断がならねえ、しかし菓子賣めがおいらをいゝやうにしたと思つてけつかるであらうが、さうは虎の皮、此方も荒神様であらア、馬鹿な面な、とつくに上菓子をとくにはへ付けて置いたを知らぬ奴さ(ト、後を探すに、先刻の菓子見えず。北八も同じく爰に置いた筈だと尋ねるに、一向見えす、勝手より女茶碗と薬鐘を持ち出で)「御退屈様でござりませう、お煮花ができました(ト、置いて行く 喜エ、今のあると丁度いゝのに、ごうした知んたんばソリヤ今のあるま取奴が、と(取)て去んだもんぢやある、ハ、ハ、ハ、イヤこゝにえらい物がありよる(ト、後柳行李を開けて小さな曲物をとり出し) たんば「サア〜コリヤ道修町の店で貰うて来よつた砂糖漬ぢや、茶の子に一つやらつしやれ 喜コリヤ有難え、彌次さんごうだ、たんとやらかしねえたんば「イヤ、そないに食て貰うてはならんわい、こちくされ(ト、ひつたくりて、さう〜にしまふと、この内女蒲團を引き摺り来りて)「もうお床敷へましょかいな(ト、そこら取り片附けるうち、勝手より今一人の女枕蒲團を持ち来り、投り込んで行くを見れば、矢張今のあるま取なり。皆々膽を潰し) 彌モシ女中、今其處へ来た女は、先刻のあんまちやアねえかの女「さよぢやわいな 喜ごうして目が見える 女「アッヤお客さん方へ出

るに、目明ではお心置きがあつてゐるいさかい、お座敷へはあないに目の見えん振して出てぢやわいな。爰の内方で好きられますさかい、去にしたにはいつもあないに勝手を手傳うて去んでぢやわいな 彌ヤアさては、おいらがことを能く當てた筈だ、目が見えるものを 喜そんならおいらがものした物も、ものしやアがつたに違えはねえ 女オ、可笑し、お前さん方の源四郎してぢや菓子ぢやて、私もこないに貰うたわいな(ト、袂から出して見せ打笑ひ勝手へ行く) 喜大笑ひ〜 彌矢ッ張彼方が下ッ腹に毛のねえのだけは、ハ、ハ、ろく〜にあんまは取らず菓子迄もこちらに目のない故に取られた 斯く打ち興じつゝ、それより三人とも蒲團引つ被り打ち臥したるに、丹波の人は早や先きに高軒かき出せど、二人は未だ寝入もやらず、彼是と話しあふうち、裏通の鼠に犬の聲聞え、割竹の音時の太鼓も早や九ツの敷打ち過ぐる頃、北八頭をあげて 喜コレ彌次さん、お前ごそ〜と何をする 彌なぜか餘り寝られねえから、ふつと思ひ出して、コレ見や、足でこんな物を掻き寄せたは(ト、夜着の中から小さな曲物を取り出して見せる) 喜オヤそりや先刻あの人の出した砂糖漬ぢやアねえか 彌コリヤ聲が高い、柳行李の傍に出であるを、先刻から睨んで置いたからよ 喜コウ一ツ寄越しねえ 彌待て〜(ト、行燈暗く遠ければ、委細は分らず、かの曲物の蓋を取り、一つ、まんで口にかつちり) 彌コリヤ堅いは

「喜」ドレ〜(ト、曲物を引つとり、是もつまんで口にぐしやり、にちや〜)「喜」エ、なんだ、いつる灰だらけなものだ、ベツペ〜「彌」コリヤ砂糖漬ぢやアねえ、何だか可笑しな匂がする(ト、胸を悪くして、ゲイ〜と云ふ聲を聞きつけ、丹波の親爺目を覺し、この體を見るより喫驚して跳ね起き)「ヤア〜」わり様達、コリヤ何しよ、私が女房をなんせ食ひよる「彌」ナニお前おかみ様たア何のこつたたんば「何のこつちやとは情ないわいソリヤ私が知音女房ぢやわいな、其入物の蓋をよう見やしやれ(ト、云はれて彌次郎飛んで起き、行燈の前に持ち行き、かの蓋の書附を見れば)「彌」ハア秋月妙光信女ヤア〜、そんなら、此曲物はお前のかみ様の骨だな「喜」ナニ骨とは、コリヤ大變〜、道理で胸がむかつく、エ、どうしようたんば「わり様達の胸の悪るなつたより、私の胸がつつぱつたわい、コリヤ私共の村の所法則で、ろの骨を高野へ納めに持て行きよるのでござるわいの、ようマア大切な佛を、何せ食ひよつた、わり様達は眞人間ぢやありやしよまい、鬼か畜生か、ごしたのぢや〜い〜(ト、袂を顔に押し當て、おい〜と泣く。彌次郎も可笑しさ半分小腹立ちて)「彌」エ、むつかしいこたアねえ、お前が先刻柳行李を開けた時、轉げ出たを知らずに居たのは、そつちの無調法、それを砂糖漬だと思つて、食つたのがこつちの龜相、ソリヤ五分〜だ、何もいさくさはねわな〜「喜」イヤ〜「聽かん〜」もとの通りは

僕うて返しや〜(ト、息せい張つて、涙交りにわめき散らせれば、北八色々と断り云ひ、様々なためすかして、漸うと納得させ、鎮まりければ、彌次郎も心のうちに可笑しさ紛らかして)「喜」イヤもう、面目次第もねえのさ、人の骨食ふも道理若いとき親の膳をば齧りたる身は、此彌次郎が口誦みに、丹波の人も心解けて笑ひを催し、漸く機嫌直りて打臥したるが、程なく一睡の夢覺めて夜明ければ、勝手より起しに來り、手水つかふや否膳を据ゑるに、三人とも喰ひ畢ひ、丹波の人は高野へと出でゆき、彌次郎兵衛北八は二三日逗留のつもり故、今日は爰もとの名所一見せんと、仕度する内、番頭出て「コレハお早うござります、今日は何地へぞお越しでござりますかいな、さよなら御案内の者、お連れなさるがよござりませしよ「彌」ホンニそれをお頼み申しやすばんと〜「畏りました、コレ〜佐平次殿、ちよとごんせ(ト、勝手より案内の男を呼び)貴方がたが案内頼むとおつしやつてぢや「喜」モシ薬草履二足買つて貰ひてえの「彌」イヤ一足でい、おいらは京雪駄買つて來た、ごうも薬草履では、見す〜田舎者の上方見物と見えて悪い「喜」ナニ旅でし得も絲瓜もいるものか佐平次「お支度がえいななら、出掛けましょよかいな「彌」サア〜早くめえ(參)りやせうはんと〜女ども「行てお出でなされませ(ト、これより三人打ち連れて、此宿を出掛けて)さ〜い「ナン

隠にて此酒屋と裏に住む人の家と兩方にてつかふ雪隠なれば、彼方にも此方にも兩口あるゆゑ、北八狼狽へて這入りし方の戸を開けず、向うの戸を開けて出でたる故、餘所の内なり。隠居らしき爺様一人、何やら小細工してゐたりしが、北八を見て膽を潰し、眼鏡の上からじろく／＼と見るに、北八もうろく／＼と一向に合點行かず、まごつくうち、彼の隠居「モシ／＼こなんは誰ぢやいな 喜ハハ、是は違つたさうな、モシ酒屋へはさう参ります えいんきよ」ハ、ア解めたわいの、こなんは表の酒屋のお客ぢやな、其椽側を左に取つて、すぐに行かんせ 喜ハハ、コリヤ行きさまりだ いんきよ」その戸を開けて行かんせ 喜ハハ、ア又もとの雪隠へ這入らにや行かれねえなト、雪隠の戸を開けんとすれば内に「エヘン」ト、喜南無三寶、道が塞がつたト、云ふを開きて雪隠の内より「彌北八か、おつな方へ出てるの 喜イヤ彌次さんだ、おいらア戸惑をして、とんだ目に逢つた、早く其處を通してくんねえト、戸を開けにかゝる。彌次郎うちより掛金をかけて」彌イヤもちつと待つてくれ、をしていけむことア大毒だと云ふこつたから、自然に出てくる時節を待つてゐるのだによつて、少し暇がある、ア、退屈は、金に恨みでも語らうか、北八其處で口三味線頼むを 喜ハハ、とんだことを云ふ、早く出なせえ／＼ト、外から押せども開かず。内には悠々と道成寺の唄「戀の手習ひつひ見習ひて、誰に見しよとて紅鐵樂つきよぞ、皆主

への心中立、オ、嬉しく、喜氣の長え、何のこつたな 彌末は斯うぢやになア、さうなる迄は、とんと云はずに済ませいと、誓紙さへ偽か嘘か、誠か、どうもならぬ程、逢ひに来た 喜「エ、コリヤ早く出なせえか」ト、云へども内にはさつぱり何の音沙汰もなき故、北八せつ込み「喜」どうだ、もう出たか、エ、コリヤ彌次さん／＼ト、云ふうち、暫くム、ントンと云ふ音して「ふウツウリ、格氣せまいぞとたしなんで、喜コレサどうするのだ 彌もう疾くにいゝが待ちやれ山盡し迄やらかさう 喜エ、馬鹿なことを云ひなせえト、云ひさま無理に戸を強く押せば掛金はづれて、北八雪隠の中へ轉げ込むと、彌次郎も酒屋の方へ戸を開けて出る拍子、戸はづれて倒れる。その上へ北八ぐるめ、ごつさりと雪隠の戸は破れる」彌「アイタ、、ていしゆ走り来て」コリヤ何ぢやい、雪隠の戸がやくたいぢや 喜「イヤ全體お前方ア、こんなに兩頭の雪隠にして置くから悪い ていしゆ」そぢやて、二人連れもう雪隠へ行くと云ふ事があるもんかい、阿呆らしい 彌「堪忍してくんなせえ、わつちらが悪かつたト、膝頭を摩り／＼、店の方へ出で来たれば」佐平「何となされたぞいな 喜」打身には、酒がいと云ふことだ、早く一杯飲ましてくんない 彌「こゝはつけが悪い、又先きへ行つて飲みやれト、この所の勘定をして、早々出かけるぞ、酒屋の亭主不肖々に挨拶もせず、小言を言ひながら脹れかへりてゐるを、二人に可笑しく、こゝを立

ち出づるとて)

出ることの遅い早いで争ひしこれ宇治川の雪隠かそも

それより谷町通りを、安堂寺町より香坂の原に出で、咄しものして辿り行く程に、頓て天満橋にぞいたりける。藤や淀川の瀬れ巽く行きがふ舟ども漕ぎちがひ、棹さしあひて歌ひ或は遊山舟に三味線太鼓囃し立て、行くを橋の上より往來の人立ちごまりて「ヤアイ、己等そないにたて(春)くさつても、家へ歸んだら、借銭乞にせがまれて、吼えをろがな、えらい阿呆ぢや、阿呆よく、ふねのなかより」なんぢやい、そちが阿呆ぢやわい、はしろうへ、何吐しくさる、おごれらが阿呆ぢや、ふねの中「オ、いしこやの、阿呆くらべせうかい此方にはよやかなやしよまいがなはしの上」何のおごれらに負けてわいものかい、此方阿呆の豪いのおや(ト、無上に力みかへる、此男の連れと見えて)「ハテえいわいの、こなはんがえらい阿呆は、皆知つてをることぢや、ほつて置かんせ(ト、引つ張りて連れて行く、後から往來の人口々に)「ヨウ、阿呆のえらい、ハ、ハ、ハ、(ト、此内彌次郎北八も群衆に押されながら、この橋にさしかり、橋の上と船との喧嘩何處でもよく有るやつと、心に可笑しく打ち過ぐるとて)

眞黒になつて腹立つ喧嘩とて阿呆よくと鳥がする

それより此橋を北へ下り、市の側通りを行くに、爰は青物の市立つ所にて、殊に繁昌の地なりける。

青物の賣買ながら商人に尾續の見ゆる市の側町

程なく天満宮の御社にいたるに、誠や神徳の彰々たるは、參詣の人ごよみにあらはれ、料理茶屋の赤前垂、門になまめき、水茶屋揚弓塲の痛張聲、往來の心を動かせ、或は仙助が能狂言、忠七が浮世物真似、其外山海の珍物、見世物芝居輕業、曲馬乗、境内に充滿たり

何一つ御不足もなき御繁昌 誠に自由自在天神

かくて社内、悉く順拜し、靈符の女の眞白と顔も、横目に見なし、小山屋の門をも空しく打過ぎ、天神橋通りに出でたるに、彌次郎兵衛の穿きたる雪駄、如何してや横鼻緒抜けたりければ、彌しまつた、京の者は油断がならねえ、ごうせえに請合つて賣りやアかつて、忌々しい(ト、吐く、向うよりかみくづかひ)「デイ、デイ、デイ、(これは、大阪にては紙屑買斯の如く、デイと、呼んで歩くを彌次郎は江戸の格で、雪駄直しと思ひ呼びかけ)

彌コレ、此雪駄頼みますかみくづかひ「ハイ、コリヤ、片しかいな片しではごうもなら

んわいな、見りやその穿いてぢやも、鼻緒がどうやら損ねさうぢや、一所にさんせ、彌「ホ、云ふ故紙屑買是